

太宰府・佐野地区遺跡群 27

—前田・宮ノ本・日焼・久郎利・長浦遺跡の調査—

平成28(2016)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の南西部で行われた佐野土地区画整理事業に伴って、向佐野地区で実施した発掘調査の報告書です。

今回の調査では、縄文時代早期から現代の集落に繋がる近世の遺構に至るまで、幅広い時代の遺構が確認され、向佐野地区の歴史を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月
太宰府市教育委員会
教育長 木村甚治

例言

1. 本書は太宰府市大字向佐野（現在の向佐野1～4丁目）で行われた、前田・宮ノ本・日焼・久郎利・長浦遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は担当者が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は南空中写真企画が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は榊タクトが行った。
6. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、井上、宮崎、中村が行った。
7. 表入力・写真整理等は瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
8. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
9. 遺物の写真撮影は南システム・レコ（代表 仲村定美）、中村が行った。
10. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、井上、宮崎が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須志器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ 一窠跡篇一』（太宰府市の文化財第10集）1992
 - 土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第7集）1983
 - 陶磁器・・・『大宰府条坊跡Ⅳ』（太宰府市の文化財第49集）2000
12. 執筆は前田遺跡第15次調査が山村信榮・宮崎、長浦遺跡第4次調査を井上信正、長浦遺跡第5次調査を中村茂央・宮崎、その他の調査を宮崎が行い、編集は宮崎亮一が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	4
II、調査体制	5
III、調査および整理方法	7
IV、調査報告	
1、前田遺跡第15次調査	8
(1) 調査に至る経緯	8
(2) 基本層位	8
(3) 検出遺構	8
(4) 出土遺物	10
(5) 小結	11
2、前田遺跡第16次調査	13
(1) 調査に至る経緯	13
(2) 基本層位	13
(3) 検出遺構	13
(4) 出土遺物	18
(5) 小結	27
3、前田遺跡第17次調査	30
(1) 調査に至る経緯	30
(2) 基本層位	30
(3) 検出遺構	30
(4) 出土遺物	32
(5) 小結	38
4、宮ノ本遺跡第8次調査	41
(1) 調査に至る経緯と成果	41
5、日焼遺跡第17次調査	42
(1) 調査に至る経緯	42
(2) 基本層位	42
(3) 検出遺構	42
(4) 出土遺物	43
(5) 小結	44
6、久郎利遺跡第1次調査	48
(1) 調査に至る経緯	48
(2) 調査成果	48

7、久郎利遺跡第3次調査	49
(1) 調査に至る経緯	49
(2) 基本層位	49
(3) 検出遺構	49
(4) 出土遺物	49
(5) 小結	49
8、長浦遺跡第1次調査	51
(1) 調査に至る経緯と成果	51
9、長浦遺跡第2次調査	51
(1) 調査に至る経緯	51
(2) 基本層位	51
(3) 検出遺構	51
(4) 出土遺物	52
(5) 小結	60
10、長浦遺跡第3次調査	62
(1) 調査に至る経緯	62
(2) 基本層位	62
(3) 検出遺構	62
(4) 出土遺物	63
(5) 小結	64
11、長浦遺跡第4次調査	67
(1) 調査に至る経緯	67
(2) 基本層位	67
(3) 検出遺構	68
(4) 出土遺物	74
(5) 小結	81
12、長浦遺跡第5次調査	88
(1) 調査に至る経緯	88
(2) 基本層位	88
(3) 検出遺構	88
(4) 出土遺物	93
(5) 小結	98

V、調査まとめ	102
---------	-----

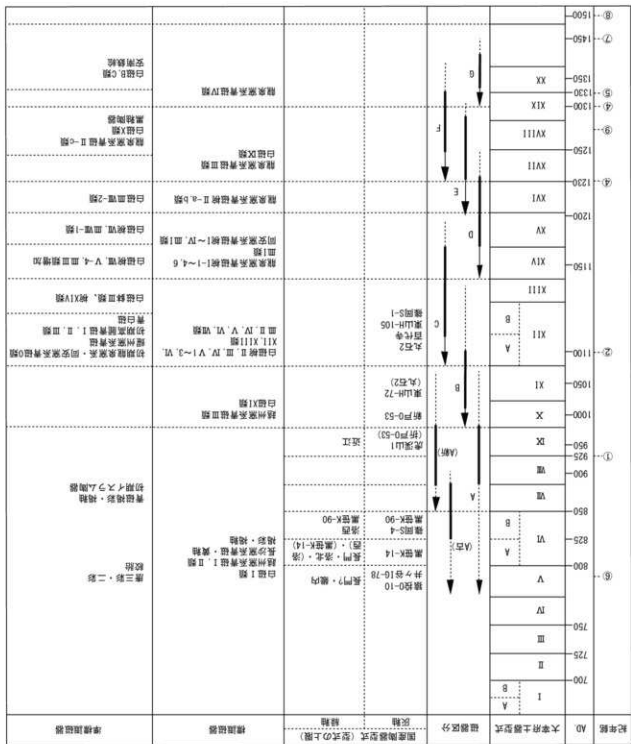
写真図版 …… 遺構および遺物写真

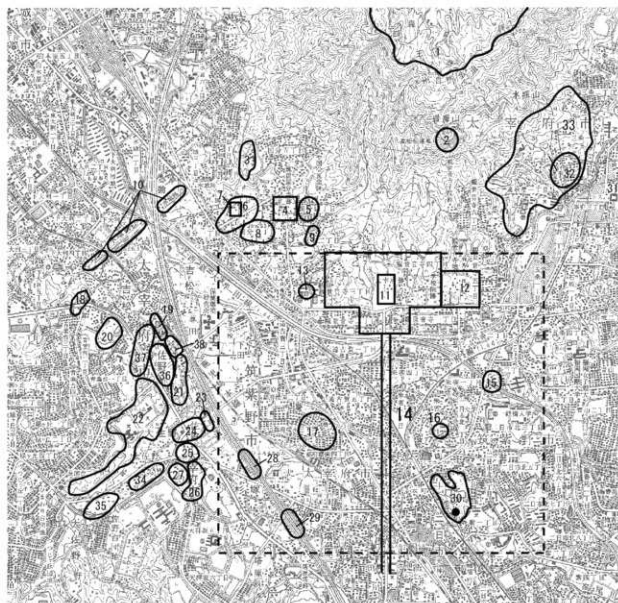
附録 CD (遺構および遺物写真)

Fig. 1 大宰府土器型式と国産陶器・箕野陶磁罐年

- 文献
- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 - ②由辺昭三、吉川義孝「平安京跡発掘調査報告左京段一五」1975 平安京調査会
 - ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査報告」1975
 - ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和62年度発掘調査報告」1989
 - ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査報告」1978
 - ⑥福岡市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 - ⑦福岡市埋蔵文化財センター「福岡市埋蔵文化財調査報告書」1979、1988
 - ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 - ⑨福岡市教育委員会「博多48」福岡市埋蔵文化財調査報告書37」1995

- 年代資料
- ①A.D. 927 延長5年、大宰府74次SD205A溝
 - ②A.D. 1091 寛治5年、平安京左京4條15段SE井戸
 - ③A.D. 1224 寛治3年、大宰府33次SD605溝
 - ④A.D. 1304 寛元2年、大宰府109.111次SD3200溝
 - ⑤A.D. 1330 元徳2年、大宰府48次SX1200溝
 - ⑥A.D. 784 延暦3年、長岡京102次SD10201溝
 - ⑦A.D. 1459. 1465 長祿3. 享正5年、福岡井相田C11. S616溝
 - ⑧A.D. 1501 文亀元年、大宰府70次SD1805溝
 - ⑨A.D. 1265 文永2年、博多62次T3上溝





- | | | | |
|------------|---------------------|--------------------|------------------|
| 1. 大野城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 21. 前田遺跡(報告) | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 2. 岩屋城跡 | 12. 観世音寺 | 22. 宮ノ本遺跡(報告) | 32. 浦城跡 |
| 3. 降ノ尾遺跡 | 13. 遺賢団印出土地 | 23. 難川遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(横山家、堀之内) | 24. フケ遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 5. 辻遺跡 | 15. 若畑遺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 16. 般若寺跡 | 26. 脇道遺跡 | 36. 日焼遺跡(報告) |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 27. 観城戸遺跡 | 37. 長浦遺跡(報告) |
| 8. 国分千足町遺跡 | 18. 神ノ前窯跡 | 28. 剣塚遺跡 | 38. 久郎利遺跡(報告) |
| 9. 御笠団印出土地 | 19. 原口遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 | |
| 10. 水城跡 | 20. 篠振遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡(●は峯火葬墓) | |

Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30000)

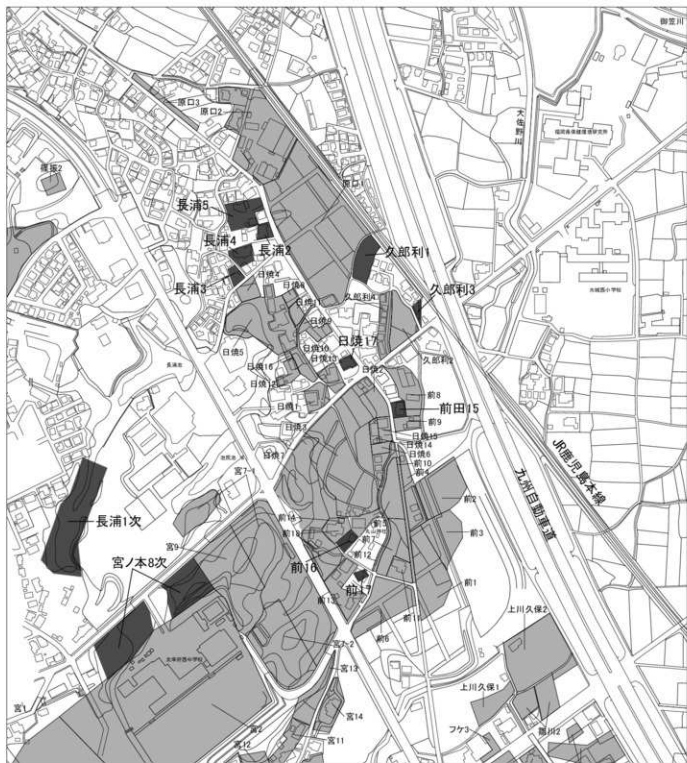


Fig. 3 調査地とその周辺調査地点 (1/5000)

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。市役所から博多湾まで直線距離で15km、筑後川まで20kmの位置関係である。

旧石器時代の遺物は、市内各所で散発的に出土し、脇道遺跡第4次調査では約1500点の剥片がまとまって出土している。縄文時代の遺構は多くはないが、大佐野地区の西端に位置するカヤノ遺跡では押型文土器が多く出土するなど低丘陵を中心に居住していた可能性を窺わせる。ちなみに、大佐野集落の背後の丘陵には阿蘇4火砕流台地が残存し、京ノ尾遺跡では、炭化物が混じる堆積層が調査されている。

弥生時代から古墳時代にかけての集落は、佐野地区では弥生時代前期と後期、国分地区で弥生時代中期の集落が展開し、狭い太宰府盆地の中を100～200年ごとに移動しているような状況が窺える。佐野地区では弥生時代前期と後期の集落が前田遺跡で確認され、糠川・フケ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落が、多くの木製品と共に確認されている。弥生時代の墓地として国分松本遺跡や高雄地区の吉ヶ浦遺跡では弥生時代中～後期の甕棺墓群が確認されている。

古墳時代では、殿城戸遺跡第7次調査で古墳時代初頭の方形区画溝が見つかり、集落と区別するために造られた公共的な広場とみられる。向佐野の宮ノ本遺跡や高雄の葛蒲浦古墳群では内部主体が割竹形木棺で鏡を副葬する古墳をはじめ、前期を中心とした古墳群が営まれている。5世紀後半頃には太宰府市唯一の前方後円墳（帆立貝形）である成屋形古墳が築造されているが、立地からすると福岡平野の御笠川沿岸の豪族の墓とみられる。逆に6世紀には市境に近い筑紫野市杉塚に全長42mの剣塚古墳があり、4世紀の古墳群とその上に築造された6世紀中頃～7世紀にかけての前方後円墳は6世紀代の太宰府地域を知る上で欠かせない存在である。その剣塚古墳に程近い大佐野川南岸の京ノ尾遺跡では6世紀代の集落が確認されている。

古代にはこの狭い平野の北端に太宰府政庁を置き、前面にいわゆる太宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北22条、東西各12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。この大佐野地区は条坊の外側に位置するが、6世紀前半～9世紀中頃の大規模須恵器窯である牛頭窯跡群に抜ける谷筋に位置し、すぐ東側を官道が通る要衝である。発掘調査では、カヤノ遺跡で7世紀末～8世紀初頭の掘立柱建物群が確認され、周辺の京ノ尾遺跡でも奈良時代の遺物が多く出土している。また、向佐野地区の宮ノ本遺跡では、古代の墳墓が100基以上確認され、買地券や鏡など多くの貴重な副葬品が出土している。

中世になるとまちの中心は、観世音寺や太宰府天満宮周辺などかつての条坊城の東部へ移り、宝満山を含め寺社を中心にその周辺一帯は高い密度で遺構が展開している。また、周辺の山々には岩屋城や有智山城など九州の戦国史に名を残す山城が築造され、激しい戦いが繰り広げられている。また、佐野地区周辺では、筑紫野市杉塚にわくど城（和久堂城、脇道城）があったと伝えられ、調査地南方の古野添遺跡では堀切や段造成が確認されている。

近世の太宰府は太宰府天満宮を中心に宰府や五条の町ができ、街道筋の集落として通古賀が形成されているが、その周縁に位置する他の集落は都市近郊型の農村集落であった。大佐野集落の始まりとわくど城などの周辺の山城築造との関係性が指摘されている。その後、区画整理が行われる直前までは、田圃と山林に囲まれた静かな農村集落で、戦時中、周辺の山々では防空壕の坑木伐採が盛んに行われていたといわれている。今回報告する向佐野・大佐野地区では、昭和61年度から平成19年度にかけて区画整理事業が行われ、住宅街と変化している。

II、調査体制

(平成元／1989年度)・・・長浦遺跡第1次調査

総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	西山義則					
	社会教育課長	関岡 勉					
	文化財係長	鬼木富士夫	主事	岡部大治	白水伸司		
調査	技 師	山本信夫	狭川真一	城戸康利	緒方俊輔	山村信榮	
	技師(囑託)	中島恒次郎	狭川麻子				

(平成2／1990年度)・・・久郎利遺跡第1次調査

総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	西山義則					
	社会教育課長	関岡 勉					
	文化財係長	鬼木富士夫					
	主任主事	岡部大治	主事	白水伸司			
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利			
	技 師	城戸康利	緒方俊輔	山村信榮			
	技師(囑託)	中島恒次郎	狭川麻子				

(平成6／1994年度)・・・宮ノ本遺跡第8次調査

総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	白木三男					
	文化課長	花田勝彦					
	文化財保護係長	高田克二	文化振興係長	大田重信			
	主任主事	岡部大治	川谷 豊	主事	今村江利子		
調査	技術主査	山本信夫					
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	重松麻里子	
	技 師	井上信正		技師(囑託)	田中克子	下川可容子	

(平成9／1997年度)・・・久郎利遺跡第3次調査

総括	教育長	長野治己					
庶務	教育部長	小田勝弥					
	文化財課長	津田秀司					
	文化財保護係長	和田敏信					
	文化財調査係長	山本信夫					
	主任主事	藤井泰人	主事	今村江利子			
調査	技術主査	狭川真一					
	主任技師	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	井上信正		
	技 師	高橋 学	宮崎亮一				
	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子				

(平成15／2003年度)・・・長浦遺跡第2・3次調査

総括	教育長	関 敏治					
----	-----	------	--	--	--	--	--

庶務	教育部長	白石純一			
	文化財課長	木村和美			
	文化財保護係長	和田敏信 (～6月30日)	久保山元信 (7月1日～)		
	文化財調査係長	神原 稔 (～9月30日)			
	事務主査	藤井泰人	主任主事	大石敬介	
調査	主任主査	城戸康利			
	技術主査	山村信榮	中島恒次郎		
	主任技師	井上信正	高橋 学	宮崎亮一	
	技師 (囑託)	下川可容子	森田レイ子	柳 智子	渡邊 仁

(平成 17 / 2005 年度)・・・前田遺跡第 15・16 次調査

総括	教育長	關 敏治			
庶務	教育部長	松永栄人			
	文化財課長	木村和美			
	保護活用係長	久保山元信			
	調査係長	永尾彰朗			
	主任主査	齋藤実貴男	事務主査	大石敬介	
調査	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	
	技術主査	井上信正			
	主任技師	高橋 学	宮崎亮一		
	技師 (囑託)	下川可容子	柳 智子	長 直信	松浦 智

(平成 18 / 2006 年度)・・・長浦遺跡第 4 次調査・前田遺跡第 17 次調査

総括	教育長	關 敏治			
庶務	教育部長	松永栄人			
	文化財課長	齋藤廣之			
	保護活用係長	久保山元信			
	調査係長	永尾彰朗			
	主任主査	吉原慎一			
調査	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	
	技術主査	井上信正			
	主任技師	高橋 学	宮崎亮一		
	技師 (囑託)	柳 智子	下高大輔		

(平成 25 / 2013 年度)・・・日焼遺跡第 17 次調査

総括	教育長	木村甚治			
庶務	教育部長	今泉憲治			
	文化財課長	菊武良一			
	文化財副課長	城戸康利			
	保護活用係長	友添浩一			
	調査係長	山村信榮			
調査	事務主査	廣見京子	主事	古川あや	有田ゆきな
	主任主査	井上信正	高橋 学	宮崎亮一	

	主任技師	遠藤 茜			
	都市計画課 景観・歴史のまち推進係				
	係長	中島恒次郎 (文化財課事務取扱)			
(平成 26 / 2014 年度)・	・	・	・	・	・
統括	教育長	木村甚治			
庶務	教育部長	堀田徹			
	文化財課長	菊武良一			
	文化財副課長	城戸康利			
	保護活用係長	友添浩一			
	調査係長	山村信榮			
	主任主査	廣見京子	主事	有田ゆきな	久木原駿史
調査	主任主査	井上信正	高橋 学	宮崎亮一	
	主任技師	遠藤 茜			
	技師	沖田正大	中村茂央		
	都市計画課 景観・歴史のまち推進係				
	係長	中島恒次郎 (文化財課事務取扱)			
(平成 27 / 2015 年度)・	・	・	・	・	・
統括	教育長	木村甚治			
庶務	教育部長	堀田徹			
	文化財課長	菊武良一			
	文化財副課長	城戸康利			
	保護活用係長	友添浩一			
	調査係長	山村信榮			
	主任主査	廣見京子	主事	有田ゆきな	久木原駿史
調査	主任主査	井上信正	高橋 学	宮崎亮一	
	主任技師	遠藤 茜			
	技師	沖田正大	中村茂央		
	都市計画課 景観・歴史のまち推進係				
	係長	中島恒次郎 (文化財課事務取扱)			

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001年9月改訂）に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/10、1/20等で記録し、遺構全体図は人力によって1/20の縮尺で実測を行った。

整理に際し、時期が特定できそうな遺物については、実測作業を行っている。一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

IV、調査報告

1、前田遺跡第15次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野465番地2である。佐野土地区画整理事業に伴う調査で、調査期間は2005(平成17)年4月4日～5月6日にかけて発掘調査を行った。調査は山村信榮が担当した。調査対象面積は330.57㎡、調査面積は210㎡である。

(2) 基本層位

調査地には、直前まで住宅が建っていた。地表から0.5m程は住宅建設時の真砂土の盛土で、その下に厚さ0.3mの灰色土や淡灰色土の耕作土があり、それらを除去すると青灰色シルトや褐色粗砂の地山に遺構が検出された。

(3) 検出遺構

溝

15SD002

調査区東端で検出された若干蛇行する溝状の遺構であるが、東側は調査区外となる。埋土は灰黒色砂状土で、深さは0.2m前後で北に向かって深くなっている。埋土からは古墳時代から平安時代の遺物が出土するが、土壌が灰色気味であるため近世以降の可能性もある。

15SD004 (Fig. 5)

幅0.22～0.32m、深さは0.03～0.1mだが、底面はほぼ水平である。埋土は弱粘質の茶褐色土でSX003の水田と推測される埋土と似ており、水田に関連した溝の可能性はある。

15SD006 (Fig. 5)

幅0.18～0.5m、深さは0.03～0.1mだが、底面はほぼ水平である。埋土は弱粘質の灰褐色土でSX003の水田と推測される埋土と似ており、SD004と同様水田に関連した溝の可能性はある。

15SD008 (Fig. 5)

調査区を南北に走る溝で、検出長17.5m、幅0.4～0.9m、深さ約0.2～0.3mで、北側に向かって深くなっている。埋土は灰色粗砂のラミナ層や淡灰色砂状土である。出土遺物は全体的に少ないが、奈良時代の遺物に混じって、国産磁器が1点出土している。

15SD011 (Fig. 5)

調査区北側を蛇行するようなプランである。深さ0.3m前後で、埋土は白灰色粗砂のラミナ層である。埋土に木杭(SX012)が打ち込まれていた。

15SD013 (Fig. 5)

SX003の底面で検出された溝で、SD008に切られている。幅0.45m前後、深さはSX003の底面から0.1m前後で、断面形状は逆台形を呈する。埋土は淡灰色の砂状土や粘土である。

その他の遺構

15SX003

調査区南側で不定形の溜まり状遺構が検出された。深さ0.1～0.2mで、埋土は灰褐色土であるが、古代ではない新しい土壌であった。底面に起耕によると思われる凹凸が検出され、江戸時代以降の水田の可能性が考えられる。出土遺物は僅かで、そのほとんどが奈良時代の須恵器であったが、肥前系陶器の鉢を1点含んでいる。

15SX012 (Fig. 5)

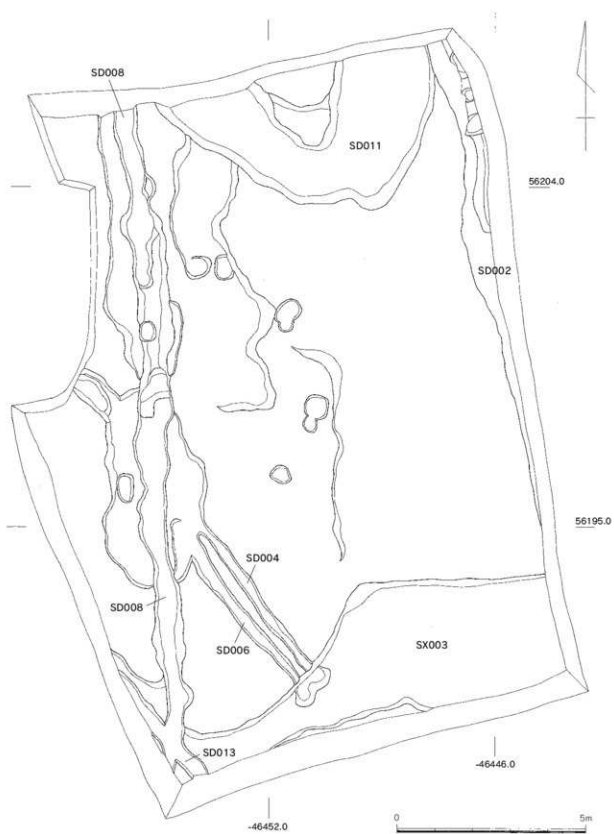


Fig. 4 前田遺跡第15次調査遺構全体図 (1/100)

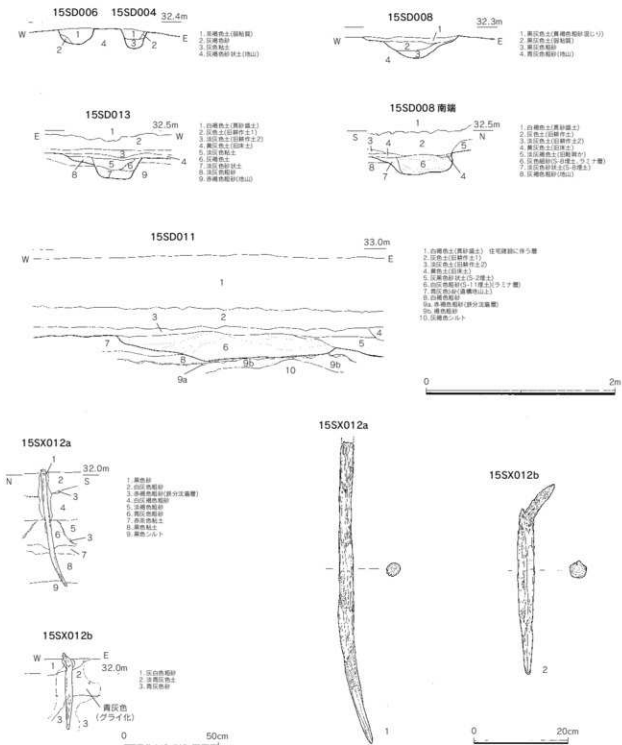


Fig.5 前田遺跡第15次調査遺構・遺物実測図 (1/40、1/20、1/8)

SD011の溝状遺構の埋土に横切るように2本の木杭が検出された。木杭は先端部を加工し、打ち込んだような状況であった。2本の距離は0.62mで、これ以外に杭は未確認で、その目的は不明である。

(4) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少なく、そのほとんどが須恵器や土師器など古代の遺物で、僅かに近世以降の遺物が出土している。遺構ごとの遺物の出土状況は出土遺物一覧を参考にされたい。

15SX012a 出土遺物 (Fig.5)

木製品

杭 (1) 長さ 63.9 cm、径 2.7～3.2 cm の自然木で、先端部 12 cm 程を 5～6 面に加工しているが、劣化が目立つ。未加工部分には部分的に樹皮が残る。上部は欠損する。

15SX012b 出土遺物 (Fig. 5)

木製品

杭 (2) 長さ 40.2 cm、径 3.4～3.6 cm の自然木で、先端部を六角形に加工する。未加工部分には一部樹皮が残る。上部は折れ曲がっている。先端部は打ち込みにより若干潰れている。

(5) 小結

調査区南側で褐色の遺物包含層が確認された。包含層は江戸時代以前の耕作土壌と考えられ、調査区南側で東西に延びる堆積土壌 15SX003 に溝 15SD004・006 が連結する形状で検出され、両者は同じ堆積によって埋没し、15SX003 の底面に起耕によると思われる凹凸が確認された。これらは江戸時代以降の水田と灌漑水路であると推測される。15SD008 は 15SX003 に先行する水路で、出土遺物の大半が奈良時代の須恵器であるが、国産陶器と考えられる土器片が 1 点出土していることから、これも近世以降の所産と考えられる。15SD013 は切り合いから 15SD008 より古い遺構であり、その方向性から日焼遺跡第 2 次調査で検出された蛇行する道路遺構に関連する可能性がある。

以上のように、今回の調査区では住居など集落痕跡は検出されず、水田に関連した土壌や溝のみが広がっていたことから、調査地は集落の周辺部の耕作地としての土地利用がなされたものと考えられる。

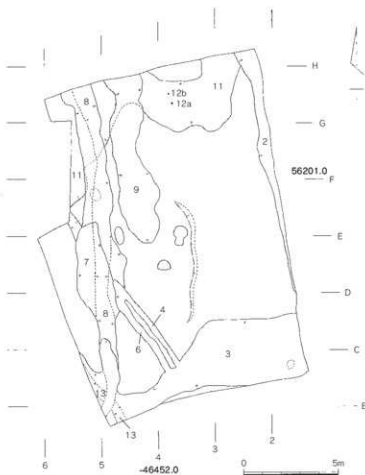


Fig. 6 前田遺跡第 15 次調査遺構略測図 (1/200)

表1 前田遺跡第15次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
2	15SD002	溝	灰色粗砂	江戸時代以降?	D~H・1.2
3	15SX003	水田跡?	灰褐色土	江戸時代以降	A~C・1~5
4	15SD004	溝	上層が灰褐色粘土 S-3と同時か?	江戸時代以降	B~D・3.4
6	15SD006	溝	上層が灰褐色粘土 S-3.4と同時か?	江戸時代以降	B~D・3.4
7		たまり	淡灰色土 S-8→7 下層はS-8		C~E・4.5
8	15SD008	溝	黒灰色土 S-11→8→7	江戸時代以降	D~G・4.5
9		たまり	黄灰色土+灰色土ブロック S-11→9		D~G・4
11	15SD011	溝	白灰色粗砂 S-11→8→7		E~G・2~5
12	15SX012	杭列			G3
13	15SD013	溝	S-13→8	江戸時代以前	AB・4.5

表2 前田遺跡第15次調査 出土遺物一覧表

S-2

銅 貨	銅[鹿?、Hc、H]
土 師	銅[H、破片]
土 製 品	用途不明土製品
瓦	物(瓦)

S-3

銅 貨	銅[鹿?、Hc、H、Hc、雙]
銅 前 系 銅	銅[鹿]

S-4

銅 貨	銅[H、大鹿a]
土 師	銅[破片]

S-6

銅 貨	銅[Hc、H鹿]
-----	----------

S-7

銅 貨	銅[Hc、Hc、雙?]
土 師	銅[鹿]
龍泉窯系青銅	銅[2(1)]

S-8

銅 貨	銅[Hc、H、鹿]
土 師	銅[H]
国 産 銅	銅[破片]
瓦	物(平瓦(無文)、破片)

S-11

弥 生 土	銅[破片]
-------	-------

S-12a

木 製 品	木[板]
-------	------

S-12b

木 製 品	木[板]
-------	------

灰色土

銅 貨	銅[H、雙、鹿]
土 師	銅[鹿]
龍泉窯系銅	銅[破片]
国 産 銅	銅[鹿?]

2、前田遺跡第16次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野 437-1、438 で、丸山神社の西側に位置する。調査地は、向佐野の川越（こうごし）組の上（かみ）の集落の一角である。この集落には江戸時代に米蔵「殿の倉」があり、福岡城の蔵屋敷まで米を運んだという伝承や、江戸後期（天保期）には寺子屋「佐野塾」があったと伝える石碑が調査区の西側（前田遺跡第14次調査区内）に建っていた。

調査は佐野地区土地区画整理事業に伴うもので、発掘調査は2005（平成17）年4月8日～5月23日に実施した。調査面積は161㎡を測る。調査は松浦智が担当した。

(2) 基本層位 (Fig. 9)

調査地は官ノ本丘陵の東裾部に位置し標高36m前後である。北方10mに丸山神社、東側には大佐野川が南北方向に流れている。

調査前には倉庫が建っていて、その建築を行う際に厚さ0.1～0.3m前後の真砂土で盛土している。その下の厚さ0.8～1mの土層は黄色ブロック土、橙色ブロック土を含み、近現代の整地層と考えられる。この層を除去した面で遺構を確認した。遺構検出時の遺物取り上げは灰色土である。地山は明黄褐色粘質土で、その下に厚さ0.3～0.5m程の粗い白色砂粒を含む明青灰色粘質土が堆積している。調査区南端は流路（SX010・015）の上面に黒茶色粘土や暗灰色粘土が入り乱れ、他と層位が若干異なっている。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

16SB025 (Fig. 10)

調査区北側で検出した東西棟の掘立柱建物である。南北1間、東西2間以上、振れはE-25° 42' -S程度。掘り方は円形で、大きさは0.4～0.55m、深さ0.3m前後、柱痕は径約0.2mである。柱間は南北1間で4.7mもあり、溝が切り込み確認できなかった部分に柱穴があったと考えられ、南北2間であったと推測される。東西は1間分の柱穴を確認し、さらに調査区東側に続いている。北側の2基の柱穴から柱痕を検出した。柱間は1.9mを測る。出土した土師器は小片で時期については不明である。

溝

16SD005 (Fig. 10)

調査区の中央を南北方向に走る溝である。東岸が西岸より1m程高い。検出長は17m以上、幅1.6～2.5m、東岸からの深さは1～1.4前後を測る。振れはN-14° 45' 45" -E程度である。部分的にテラス状の段がつく。北端と南端の底面のレベル差から流路は南から北に向かって流れていたようである。埋土は灰茶色土や暗灰色粘土である。

16SD035

調査区北端で検出した東西方向に延びる溝とみられる。深さは0.5mで、遺物は出土していない。溝の深さや埋土の状況が16SD005に類似していることから、16SD005と同一の遺構になる可能性が考えられ、L字に曲がる溝と推測される。

焼土坑

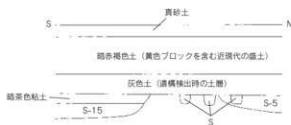


Fig. 7 前田遺跡第16次調査土層模式図

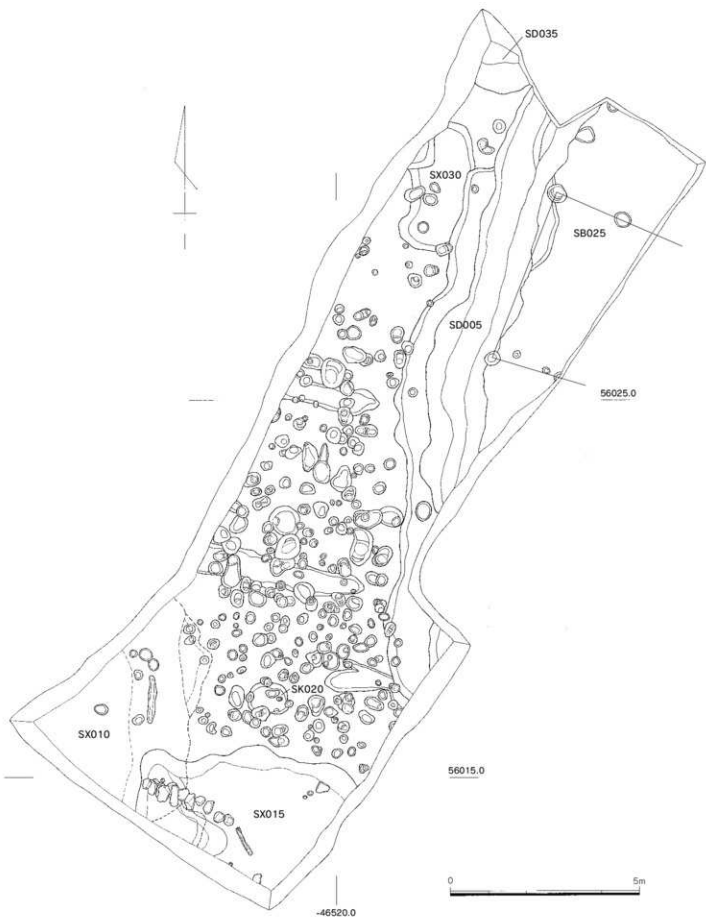
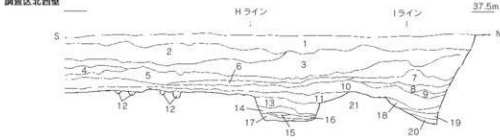


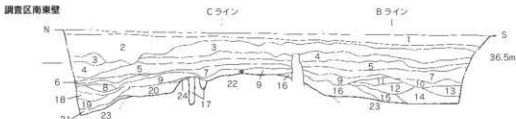
Fig.8 前田遺跡第16次調査遺構全体図 (1/100)

調査区北西壁



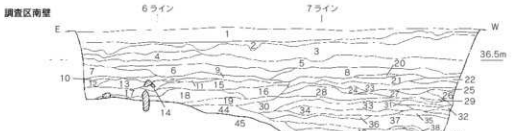
- | | |
|---|----------------------------|
| 1. 黒砂土(コンクリート・ビニール残渣、焼物の少量含む) | 11. 灰褐色土(よこしまる、黒色ブロックを含む) |
| 2. 黒砂土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物少量含む) | 12. 黒砂土 |
| 3. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物を含む、焼物の少量含む) | 13. 黒砂褐色土(よこしまる) |
| 4. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック(焼物・コンクリート残渣物)少量含む、焼物の少量含む) | 14. 黒砂褐色土(よこしまる) |
| 5. 黒砂褐色土(よこしまる、焼物・ブロック(焼物・コンクリート残渣物)少量含む、焼物の少量含む) | 15. 灰褐色土(よこしまる) |
| 6. 黒砂土(よこしまる、焼物の少量含む) | 16. 黒砂褐色土(よこしまる) |
| 7. 灰褐色土(よこしまる) | 17. 黒砂褐色土(よこしまる) |
| 8. 黒砂褐色土(よこしまる、焼物・黒色ブロック少量含む) | 18. 灰褐色土 |
| 9. 灰褐色土(よこしまる) | 19. 焼物(焼物土、よこしまる、焼物) |
| 10. 灰褐色土(よこしまる、焼物の少量含む) | 20. 焼物(焼物土) |
| | 21. 別異焼物(焼物土)層(由糸跡物を含む、焼山) |

調査区南東壁



- | | | | |
|--|---------------------------|----------------|-----------|
| 1. 黒砂土(コンクリート・ビニール残渣、焼物の少量含む) | 17. 灰褐色土 | } S-5の境土 | } 焼物の出土なし |
| 2. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物少量含む、焼物の少量含む) | 18. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 3. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物を含む、焼物の少量含む) | 19. 黒砂褐色土(よこしまる) | | |
| 4. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック(焼物・コンクリート残渣物)少量含む、焼物の少量含む) | 20. 灰褐色土(よこしまる) | | |
| 5. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック少量含む、焼物の少量含む) | 21. 黒砂褐色土(よこしまる) | } S-5 境界土で取り上げ | } 焼山 |
| 6. 黒砂土(よこしまる、焼物の少量含む) | 22. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 7. 灰褐色土(よこしまる、焼物の少量含む) | 23. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 8. 黒砂褐色土(よこしまる) | 24. 黒砂褐色土(よこしまる、S-7で取り上げ) | | |
| 9. 灰褐色土(よこしまる) | | | |
| 10. 黒砂褐色土(よこしまる、焼物の少量含む) | | | |
| 11. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | | |
| 12. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 13. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 14. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 15. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 16. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |

調査区南壁



- | | | | |
|--|---------------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 黒砂土(コンクリート・ビニール残渣) | 17. 灰褐色土 | } S-15の境土 | } S-15 境界土(焼物土)で取り上げ |
| 2. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物少量含む) | 18. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 3. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック、炭化物物少量含む) | 19. 黒砂褐色土(よこしまる) | | |
| 4. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック(焼物・コンクリート残渣物)少量含む、焼物の少量含む) | 20. 灰褐色土(よこしまる) | | |
| 5. 黒砂褐色土(よこしまる、黒色ブロック少量含む、焼物の少量含む) | 21. 黒砂褐色土(よこしまる) | } S-15 境界土(焼物土)で取り上げ | } S-15 境界土(焼物土)で取り上げ |
| 6. 黒砂土(よこしまる、焼物の少量含む) | 22. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 7. 灰褐色土(よこしまる) | 23. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | |
| 8. 黒砂褐色土(よこしまる) | 24. 黒砂褐色土(よこしまる、S-7で取り上げ) | | |
| 9. 灰褐色土(よこしまる) | | | |
| 10. 黒砂褐色土(よこしまる) | | | |
| 11. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | | |
| 12. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 13. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる、焼物) | | | |
| 14. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 15. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 16. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 17. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 18. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 19. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 20. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 21. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 22. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 23. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 24. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 25. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 26. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 27. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 28. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 29. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 30. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 31. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 32. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 33. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 34. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 35. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 36. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 37. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 38. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 39. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 40. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 41. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 42. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 43. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 44. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |
| 45. 別異焼物(焼物土)層(よこしまる) | | | |



Fig. 9 前田遺跡第16次調査区土層実測図 (1/80)

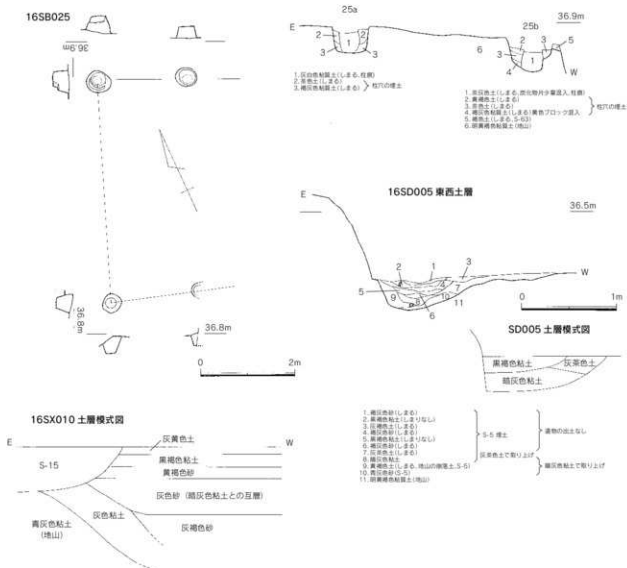


Fig. 10 前田遺跡 16SB025・SD005・SX10 遺構実測図 (1/80, 1/40)

16SK020 (Fig. 10)

調査区の南側で検出した焼土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.02m、短軸 0.79m、深さは最深で 0.25m を測る。埋土は褐灰色土、黒色土で、床面には炭化物が 0.03～0.1m の厚さで堆積していた。壁面は赤変したり焼き締まったような痕跡は確認できなかった。

流路

16SX10 (Fig. 10)

調査区南端にあり、16SX15 に切られている。隣接する前田遺跡第 14 次調査で確認した 14SD100 の続きであり、南北方向に走っている。調査区際で湧水もあったため安全上の問題から検出面から深さ 1.5m で掘り下げを中止した。埋土は茶色系粘質土と灰色系のきめ細かい砂、粗砂が互層している状態で、各層に植物遺体の炭化物片、木片やドングリが少量入っていた。他にも灰黄色土、黒褐色粘土、褐灰色砂、灰色砂、灰褐色砂、灰色粘土が入り混じっている。土器片の出土量は少なく、木製品の出土はなかった。

16SX15 (Fig. 11)

調査区の南端で検出した流路で、16SX10 を切っている。遺構は調査区外に続き、流路の長さ、幅に關しては不明である。底面は平坦で深さは 0.4m 前後で、流路の南西側は 0.3m 程さらに下がっている。底面には花崗岩礫が 1 段もしくは 2 段積まれた状態で東西方向に 2.6m 並んでいる。また、花崗岩礫群は、

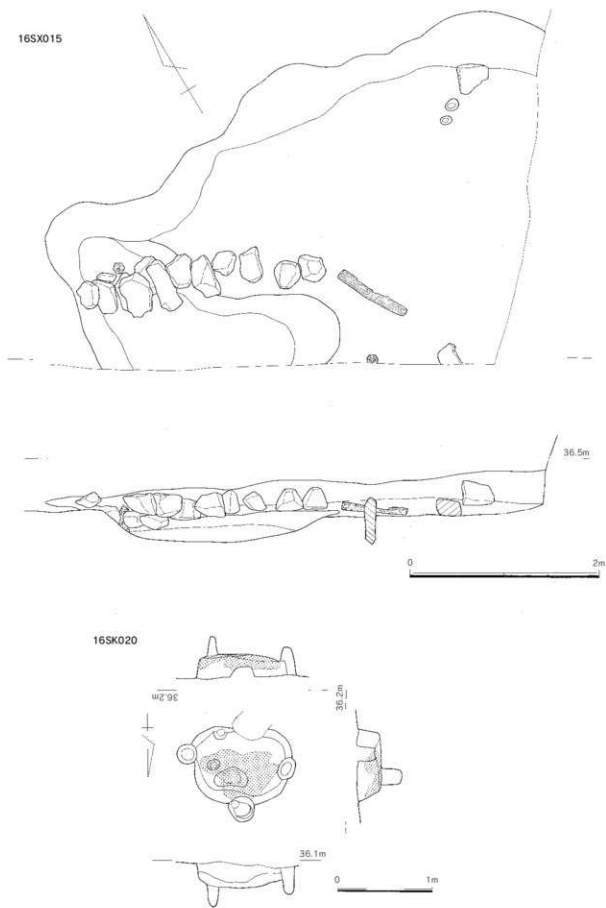


Fig. 11 前田遺跡 16SX015・SK020 遺構実測図 (1/40)

上端のレベルを揃え意図的に水平に置かれている。花崗岩は特に面取り等の加工は行われていなかった。木製品は六角杭2本と棒状加工品1点を確認した。杭は断面が六角形に加工され、2本とも立っている状態で確認した。棒状加工品は中央に割り込みの加工が行われていた。16SX015は調査区端のため遺構の性格の判断が難しいが、一段落ちている部分を囲むように礎や木が検出されたことから、流路内に貯水場や洗場等の施設ではないかと推測される。埋土は黒灰色粘土、茶褐色砂質土に分かれている。

たまり状遺構

16SX030

調査区北側で検出し、16SD005に切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.46m、短軸1.71m、深さは最深で0.31mを測る。埋土は褐色土、暗灰色土、黒褐色粘土である。

ピット群

調査区から約150基のピットを確認した。ピットは調査区中央部に集中していて北側になると少なくなっている。ピットの埋土には暗灰色土と茶灰色土があり、前者が後者を切っている。ピット内で柱材を確認したものはS-64の1基のみである。また、掘立柱建物と特定したのはSB025のみであったが、ピット群の深さは0.5mを越えるものが多いことから、ほかに建物や柵列跡が並ぶ可能性が高い。しかし、切り合いも多く明確にし切れなかった。

(4) 出土遺物

溝

16SD005 灰茶色土出土遺物 (Fig. 12)

瓦質土器

播鉢(1、2) 1は外面ナデ調整で指頭圧痕を残す。内面はヨコナデの後播り目を施し、使用で平滑となる。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。2は外面ナデの後ハケ調整、内面はヨコハケの後播り目を施す。

湯釜(3) 外面肩部に沈線を巡らせ、花文スタンプを施す。

石製品

砥石(4) 4面使用。砂岩製。

16SD005 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 12)

瓦質土器

播鉢(5~7) 5は復元口径29.6cm。内面は4本の播り目を施し、下半は平滑である。外面はナデ調整で指頭圧痕を残す。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。6は復元口径31.5cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は暗茶灰色を呈する。内面は粗いヨコハケの後播り目を施す。外面はナデ調整し指頭圧痕とタテハケが若干残る。7は内外面ナデ調整で、その後内面は摺り目を施す。色調は淡灰色や暗灰色を呈する。

鉢(8、9) 8の内面は僅かにハケを残す。9の胎土は白色砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。内面ヨコハケ、外面細かいタテハケの後指頭圧痕を施すが、上部は磨滅する。

湯釜(10) 内外面ともヨコナデで、外面に突帯を巡らす。色調は内面薄橙色、淡黄灰色を呈する。

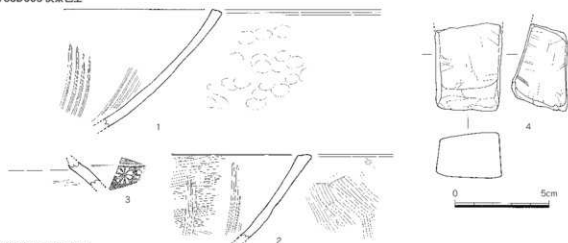
鍋(11) 口縁部は肥厚させる。外面ナデ、内面ヨコハケ。内面黒色、外面淡灰色を呈する。

中国陶器

天目碗(12) 復元口径15.0cm。胎土は少量砂粒を含み、ザラザラしている。色調は白色で、口縁部は茶褐色、下に行くほど黒茶色を呈する。

流路

16SD005 灰茶色土



16SD005 暗灰色粘土

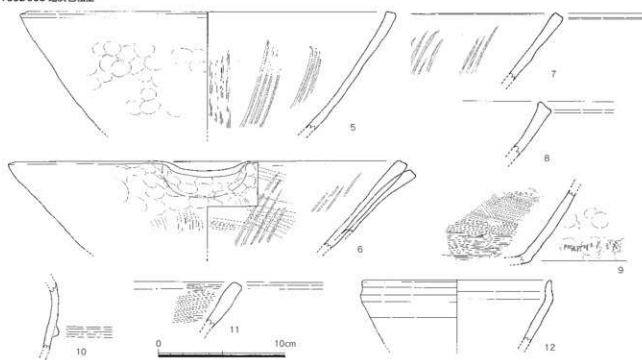


Fig. 12 前田遺跡 16SD005 出土遺物実測図 (1/3、4は1/2)

16SX010 灰黄色土出土遺物 (Fig. 13)

弥生土器

二重口縁壺(1) やや丸味のある二重口縁で、復元口径21.1cm。頸部には低い突帯を巡らす。内面には粗いヨコハケを施す。外面はナデ調整か。色調は淡茶灰色を呈する。

壺(2) 外面に突帯を巡らす。全体的に磨滅する。色調は茶灰色や黄橙色を呈する。

16SX010 黒褐色粘土出土遺物 (Fig. 13)

弥生土器

壺(3) 胴部に刻み目のある突帯を巡らす。内外面ともヨコハケを施す磨滅が目立つ。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡茶灰色を呈する。

16SX010 黄褐色砂出土遺物 (Fig. 13)

弥生土器

二重口縁壺(4) 復元口径11.4cm。内外面ともヨコナデ調整。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、

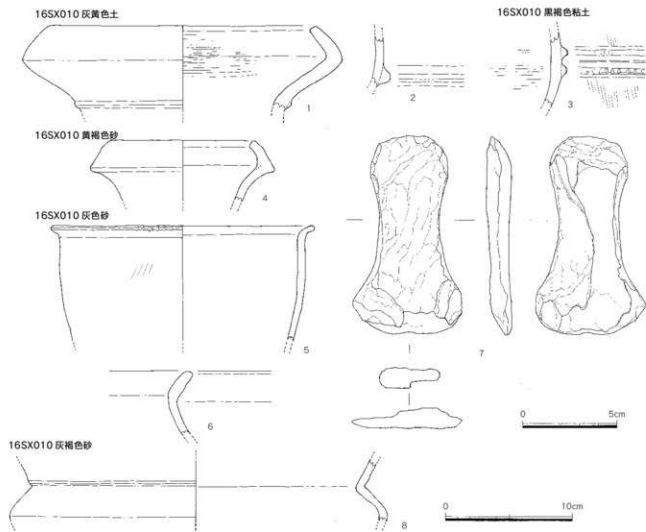


Fig. 13 前田 16SX010 出土遺物実測図 (1/3、7は1/2)

色調は茶灰色を呈する。

16SX010 灰色砂出土遺物 (Fig. 13)

弥生土器

甕 (5) 口縁端部を外反させ、端部に刻み目を施す。復元口径 20.8cm。外面には全体的に煤が付着している。

壺 (6) 口縁部は若干肥厚させる。胎土は 0.25cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗茶灰色や黒灰色を呈する。

石製品

石鍬 (7) 長さ 10.4cm、幅 5.8cm、厚さ 1.35cm。中央部をくびれさせ幅 3.2cm となる。鍬先部を若干研磨している。緑色片岩製。

16SX010 灰褐色砂出土遺物 (Fig. 13)

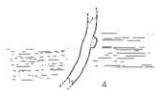
縄文土器

鉢 (8) 胎土は雲母や角閃石を多く含み、色調は暗茶灰色を呈する。内外面ともヨコナデで、くびれ部には煤が付着する。

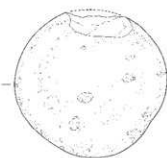
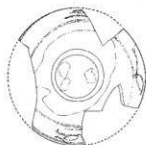
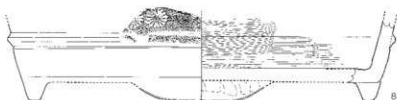
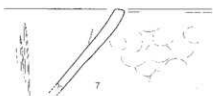
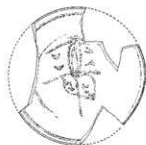
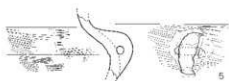
16SX015 出土遺物 (Fig. 14)

瓦質土器

16SX015



16SX015 黒灰色粘土



16SX015 茶褐色土

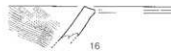
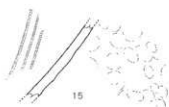
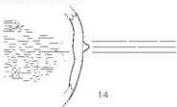


Fig. 14 前田遺跡 16SX015 出土遺物実測図 (1/3、11 ~ 13 は 1/2)

播鉢 (1) 口縁部を内湾させる。内外面とも磨滅する。色調は内面茶灰色、外面暗茶色を呈する。S-3より出土。

16SX015 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 14)

土師器

坏b (2) 復元底径4.4cm。底部切り離しは回転糸切り。胎土は0.15cm以下の白色砂粒を含み、色調は淡茶灰色を呈する。

瓦質土器

鉢 (3) 内面ヨコハケ、外面ヨコナデ。色調は暗茶灰色を呈する。

湯釜 (4,5) 4は外面に低い突帯を巡らす。内外面ともナデのようなミガキを施す。5は耳部付近で、内外面にヨコハケを施す。

播鉢 (6,7) 6は内面ヨコハケ調整後播り目を施す。外面はナデの後ハケ調整。色調は黒色や白灰色を呈する。7は内面に播り目、外面はナデ調整で指頭圧痕を残す。色調は黒灰色を呈する。

火鉢 (8) 外面に低い突帯を巡らし、花文スタンプを施す。内面はヨコハケ、それ以外はヨコナデ調整。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は黒灰色や灰色を呈する。復元底径27.2cm。

肥前系磁器

皿 (9,10) 9は乳白色の胎土に、口縁部内外面に薄青灰色釉で圏線を描く。10は口径10.8cm、器高3.1cm、底径4.2cm。胎土は黒色微粒子を含み、色調は白灰色を呈する。釉は薄い黄灰色で、細かい貫入がみられる。内外面に薄青灰色釉で文様を施す。

石製品

敲石 (11) 大きさ7.7×8.1cm、厚さ3.2cm。側面に敲打痕がみられる。

石核 (12) 大きさは12.5cm、幅7.75cm、厚さ3.2cm。両面剥離痕があるが、一部自然面を残す。安山岩製。

金属製品

銅銭 (13) 径2.3cm、厚さ0.05～0.1cm。劣化が目立つが「開元通寶」とある。

16SX015 茶褐色土出土遺物 (Fig. 14)

瓦質土器

湯釜 (14) 内面はナデの後ハケ目調整、外面は断面三角形の突帯を貼付し、突帯より下には煤が厚く付着する。

播鉢 (15) 外面はナデ調整で指頭圧痕が残り、厚くはないが煤が付着する。内面はナデの後播り目を施す。胎土は薄茶色を呈する。

土師質土器

鉢 (16) 内面は細かいハケ目を施す。色調は白橙色を呈する。

溜まり

16SX030 褐色土出土遺物 (Fig. 15)

土師質土器

鉢 (1) 内面ハケ目のようだが全体的に磨滅する。色調は薄橙色を呈する。

播鉢 (2) 復元底径26.2cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙白色を呈する。内面に播り目が残るが、全体的に磨滅し調整不明。

石製品

砥石 (3) 両側面が研磨され、それ以外は剥離面となる。現存長8.1cm、幅6.6cm。安山岩製。

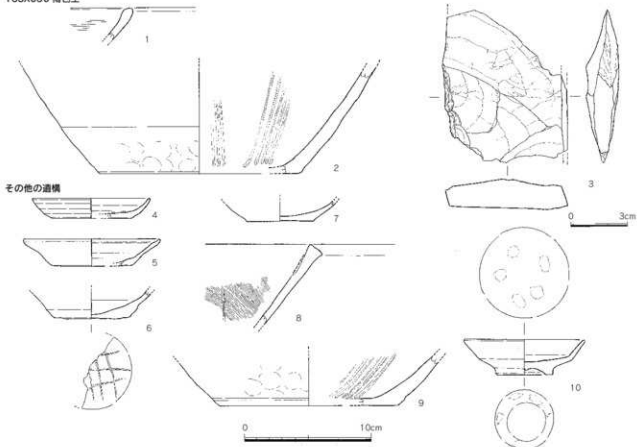


Fig. 15 前田遺跡 16SX030・その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 3は 1/2)

その他の遺構出土遺物 (Fig. 15)

土師器

小皿 a (4) 復元口径 9.3cm、器高 1.6cm、復元底径 6.2cm。底部切り離しは不明瞭だが板状圧痕が残る。S-58 より出土。

坏 a × 坏 b (5) 復元口径 10.8cm、器高 2.2cm、復元底径 6.4cm。底部は回転糸切りで、板状圧痕を残す。色調は暗茶色や淡茶灰色を呈する。S-11 より出土。

坏 a (6) 底部外面は粗いナゲで、ヘラ記号を施す。内面ナゲ調整。色調はやや暗い灰色を呈する。復元底径 6.3cm。S-49 より出土。

坏 b (7) 復元底径 5.4cm。底部切り離しは回転糸切り。内面底部はナゲ、その他は回転ナゲ。色調は白黄色を呈する。S-44 より出土。

土師質土器

播鉢 (8, 9) 8は内面に細かいハケ目の後播り目を施す。外面ナゲ調整。色調は黄茶白色を呈する。S-58 より出土。9は外面ナゲ調整で指頭圧痕を残す。胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を多く含む。色調は白茶灰色を呈する。内面は若干平滑である。S-58 より出土。

肥前系陶器

皿 (10) 復元口径 9.6cm、器高 2.8cm、高台径 4.6cm。胎土は薄橙色で、若干白濁した釉を施す。高台皿付の釉は粗く拭き取り、内外面に目跡を残す。唐津焼。S-38 より出土。

灰色土出土遺物 (Fig. 16)

青白磁

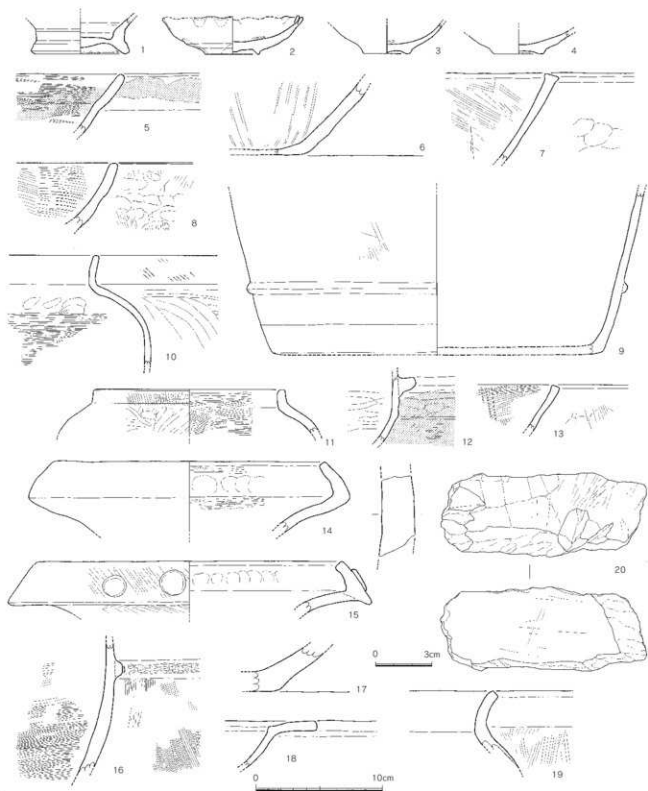


Fig. 16 前田遺跡第16次調査灰色土出土遺物実測図 (1/3、20は1/2)

壺 (1) 復元高台径7.8cm、外面には淡青色釉を施し、やや粗い貫入が入る。内面は回転ナデで露胎。底部外面は露胎で目跡を残す。

国産陶器

皿 (2) 口径11.15cm、器高3.0cm、高台径4.3cm、口縁部は菊花状に波打っている。胎土は灰色で、

内面と外面上半部に灰色釉をやや厚く施す。内面底部には目跡が3ヶ所残る。

朝鮮陶器

皿(3、4) 3は低い高台を作り出し、高台径3.75cm。胎土は0.1cm以下の白色砂粒をやや多く含む。内外面には僅かに緑色味を帯びた光沢のある灰色釉を施すが、高台畳付は釉を掻き取る。内外面に目跡が4ヶ所残る。4は低い高台を作り出し復元高台径4.0cm。胎土は灰白色を呈し、薄い緑色味を帯びた灰色透明釉を施し、全体に細かい貫入が入る。高台畳付は釉を掻き取る。目跡を残す。

土師質土器

鍋(5) 口縁部を若干外側に屈曲させる。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含む、色調は淡茶褐色を呈する。内面は細かいヨコハケを施す。外面は全体に煤が付着し、口縁部は特に厚く付着している。

播鉢(6、7) 6は全体的に磨滅するが、内面に播り目を残す。7は内面ハケの後播り目を施す。外面は磨滅するが指頭圧痕が残り、煤が薄く付着する。

瓦質土器

鉢(8) 胎土は0.1cm以下の砂粒と赤色粒を含み、色調は淡灰色を呈する。内面はヨコハケ、外面は粘土紐接合痕とハケ目や指頭圧痕が残る。

火鉢(9) 復元底径26.0cm。胎土は砂粒を少量含む、色調は暗灰色や淡灰黄色を呈する。内外面とも磨滅するが、内面にヨコナデ、外面にミガキが確認できる。

湯釜(10) 体部外面はミガキ、口縁部はハケの後ヨコナデ調整。内面はヨコハケ。色調は淡灰色や暗灰色を呈する。

釜(11) 復元口径15.2cm。胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含む、色調は黒色で、断面灰白色を呈する。内面は丁寧なナデ、口縁部外面はタテハケ、体部はミガキ調整。

羽釜(12) 内面ミガキ、外面はハケの後ヨコナデで、罫より下には煤が厚く付着する。

播鉢(13) 胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、色調は黒灰色を呈する。内面はヨコハケの後播り目を施す。外面磨滅するがハケ目や指頭圧痕が僅かに残る。

弥生土器

二重口縁壺(14、15) 14は復元口径23.9cm。胎土は白色砂粒や赤色粒を多く含む、口縁部外面にはタテハケの後、円形粘土の貼り付けを行っている。15は復元口径21.3cm。内面にはヨコハケや指頭圧痕が残り、外面は磨滅する。

壺(16、17) 16は内外面ともとても細かいハケを施し、外面にはハケ状工具の刺突文を施した突帯を巡らす。17の胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含む、色調は淡茶灰色を呈する。全体は磨滅する。

高坏(18) 胎土は0.2cm以下の砂粒を多く含む、色調は淡茶灰色を呈する。全体は磨滅する。

甕(19) 内面磨滅、口縁部外面ヨコナデ、体部外面タテハケ調整。色調は淡灰茶色を呈する。

石製品

石鍋(20) 内外面に削り調整痕が残る。滑石製。

表土出土遺物 (Fig. 17)

瓦質土器

湯釜(1、2) 1は復元口径13.6cm。口縁部はヨコナデ、体部内面は指押さえの後粗いハケ調整。耳部は欠損する。2は断面灰色、外面黒色を呈する。内面指押さえの後ヨコナデ。外面頭部にはタテハケの後ヨコナデ。肩部に巴文のスタンプを押す。

鉢(3) 内面は磨滅するが、外面は粗いハケ調整。胎土は砂粒が少なく、色調は淡灰色や黒灰色を呈する。

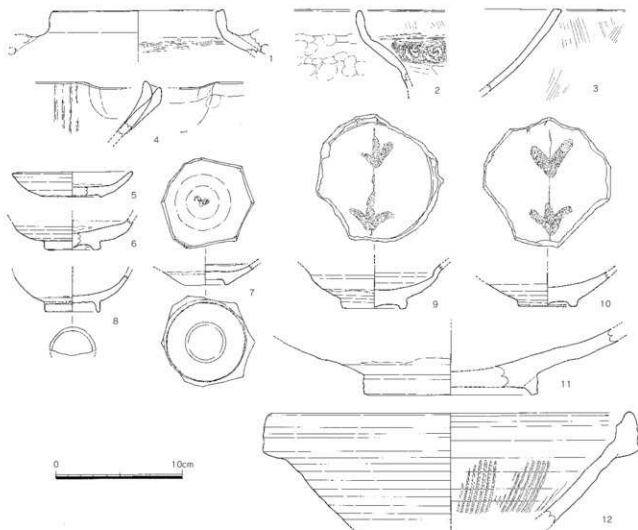


Fig. 17 前田遺跡第16次調査表土出土遺物実測図 (1/3)

播鉢 (4) 片口の播鉢で、内面は回転ナデの後播り目を施し、外面は磨滅し調整不明。

国産磁器

皿 (5, 6) 5は復元口径9.5cm、器高1.95cm、復元底径5.0cm。回転ヘラケズリで高台を低く削り出している。内外面とも薄い鉛色の透明釉を施す。底部は内外面とも釉を拭き取っている。6は高台削り出で、高台径4.5cm。胎土はやや粗く灰色を呈し、内面には透明度が低い濁灰緑色釉を施し、外面は露胎。内外面に目跡を残す。

肥前系磁器

皿 (7) 高台は削り出で基筒底となる。高台径3.2cm。やや白濁した不透明釉を施す。外面下半は露胎で、内面底部は輪状に釉を掻き取る。内外面に呉須で文様や圏線を描く。

碗 (8) 復元高台径4.4cm。胎土は黄白色で、白濁した釉を全面に施し、高台畳付は露胎。外面高台付け根に暗灰色釉で圏線を描く。

肥前系陶器

段皿 (9) 高台径4.6cm。内面及び外面上半部に灰緑色釉を施し、内面に濃緑色釉で文様を描く。底部の露胎部分は焼成後緑褐色に変色している。唐津焼。

皿 (10) 高台径5.0cm。内面及び外面上半部に灰緑色釉を施し、内面に濃緑色釉で文様を描く。底部の露胎部分は焼成後茶褐色に変色している。唐津焼。

国産陶器

大皿 (11) 復元高台径 13.8cm。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡橙茶色を呈する。内面と外面上半部は灰白色釉を施す。外面は高台付近が回転ヘラケズリで露胎。

播鉢 (12) 復元口径 29.0cm。口縁部は大きく肥厚させる。色調は内外面とも赤茶色を呈する。内面には掃り目を施し、使用により平滑である。

(5) 小結

調査地は、向佐野の川越(こうごし)組の上(かみ)の集落の一角であったが、調査範囲が狭いことも関係しているのか、近世以降の遺構や遺物は少なく、近世集落に関連した明確な遺構も確認できなかった。逆に中世後期の遺物が多く、その中でも瓦質や土師質の播鉢の出土が目立っていた。調査地では多くのピットが検出されたものの建物を復元することはできなかった。しかし、遺物の出土状況からすると中世の集落の一部と推測される。また、周辺で確認されている前田遺跡の弥生集落の一角であることを物語るように、弥生前期・後期などの流路や遺物もみられた。



Fig. 18 前田遺跡第16次調査遺構略測図(1/150)

表3 前田遺跡第16次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ビット群	暗灰色土	中世	C4
2		ビット	暗灰色土	中世	B5
3		溝?	暗灰色土	中世後期	B5
4		ビット群	暗灰色土	中世後期	A5
5	16SD005	溝		中世後期(15世紀代)	C~H3・4
6		ビット群	茶灰色土		C6
7		溝	暗灰色土		C4
8		ビット	茶灰色土	中世	C4
9		ビット	茶灰色土		D4
10	16SX010	流路	S-10→15	弥生前期～後期	C7
11		ビット	茶灰色土	中世～	D4
12		ビット	暗灰色土		D4
13		ビット	茶灰色土	中世	D4
14		ビット	茶灰色土		D4
15	16SX015	流路	茶褐色土と黒灰色粘土 S-10→15	中世後期～近世初頭?	B5他
16		ビット	茶灰色土		D4
17		ビット	暗灰色土	中世	D4
18		ビット	茶灰色土	中世～	C6
19		ビット	茶灰色土	弥生後期	C6
20	16SK020	焼土坑	褐色土	中世後期	C5
21		ビット	茶灰色土		C5
22		溝	褐色土	中世後期	D4～6
23		ビット	茶灰色土		C5
24		ビット	茶灰色土		C5
25	16SB025	掘立柱建物			FG2・3
26		ビット	暗灰色土		C5
27		ビット	茶灰色土		C5
28		ビット	茶灰色土		C5
29		ビット	暗灰色土		C5
30	16SX030	たまり	褐色土	中世後期	GH3・4
31		ビット	茶灰色土		C5
32		ビット	茶灰色土		C5
33		ビット	茶灰色土		D6
34		ビット	茶灰色土		D5
35	16SD035	溝	遺物なし		H3
36		ビット	茶灰色土		D5
37		ビット	暗灰色土	中世～	D5
38		ビット	暗灰色土 S-38→22	近世初頭	D5
39		ビット群	茶灰色土 S-39→22	中世	D5
41		ビット群	茶灰色土		D4
42		ビット	暗灰色土	中世～	D5
43		ビット群	暗灰色土	中世	D5
44		ビット	暗灰色土	中世?	E5
46		ビット	暗灰色土	中世～	D5
47		ビット	黒褐色土		H2
48		ビット群	茶灰色土 S-48→22		D5
49		ビット	暗灰色土		E5
51		ビット	暗灰色土	近世～	E5
52		ビット群	茶灰色土		E4
53		ビット	暗灰色土		E4
54		ビット群	茶灰色土	中世	E4
56		ビット群	暗灰色土	中世	E4
57		ビット群	暗灰色土		E5
58		ビット	暗灰色土	中世後期	F5
59		ビット群	茶灰色土	中世	F5
61		ビット群	暗灰色土	近世初頭	F4
62		ビット群	暗灰色土		G4
63		たまり	遺物なし		G3
64		ビット			C6

3、前田遺跡第17次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野421-1で、佐野土地区画整理事業地内に位置する中島義照氏の住宅を建て替えることになり、発掘調査することとなった。

建物の建築範囲を地権者と建築業者立会いで確認し、その範囲のみ表土である真砂土を除去し、その後遺構面まで掘削した。東側は以前水路が通っていた関係で地盤が下がっており、攪乱も多く入り、その殆どを重機で除去した。

開発対象面積は1834.61㎡であったが、住宅建築予定地のみを調査し、それ以外は遺構を保存している。調査面積は156㎡である。発掘調査は2007(平成19)年1月9日～2月6日に実施した。調査は宮崎亮一が担当した。

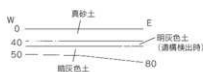


Fig.19 前田遺跡第17次調査区土層模式図(単位:cm)

(2) 基本層位 (Fig.19)

調査地は、西の宮ノ本丘陵から東側の平野部に向かってなだらかに傾斜している地形の途中で宅地が造られている。そのため厚さ約0.4mの真砂土を除去すると、青灰色粘土と灰色粘土と白色粘土が混じった宅地造成時の表土があり、西側はその直下に遺構面があり、東側は遺構面が深く、表土の下に暗灰色土層があり、地表面から0.8mで遺構面に達する。

(3) 検出遺構

竪穴住居

17SI025 (Fig.21)

東西3.2m、南北3.9m、深さ0.4mの方形に近い楕円形を呈する。上面が削平され東側に向かって低くなっているため、西側ほど遺構の残りが良く、東側は殆ど段差がない状態である。埋土は若干の土質の違いはあるが、全体として同じ埋土で埋まっている。南西側にテラス状の中段が設けられている。底面や西側法面にピットが見られるが、明瞭に柱穴と言えるものはない。しかし、検出プランから竪穴住居と推測される。出土遺物は破片が多く、住居として利用されていた時期を特定するのは難しいが、最終埋没は8世紀中頃～後半頃と推測される。

溝

17SD005 (Fig.22)

検出長5.3m、幅0.2～0.32m、深さは0.03～0.06mで、南半分が一段低くなっていて、深さ0.19mを測る。断面U字形の溝で、振れはN-15° 27' -Wである。途中でSK001に切られている。埋土はほぼ黒茶色土の単層である。最終埋没は奈良時代。

土坑

17SK001 (Fig.22)

東西1.15m、南北1.18m、深さ0.38mの円形の土坑である。埋土は黄色土と白色粘土ブロックが混じる灰褐色土である。

埋壘

17SX015 (Fig.22)

検出時は東西にやや長い楕円形で東西0.92m、南北0.64mのプランで、土坑の西側で埋壘と考えられる瓦質土器の甕を検出した。残存する深さは0.2mである。土坑の東側半分はさらに約0.3mと深くなっ



Fig. 20 前田遺跡第17次調査遺構全体図 (1/100)

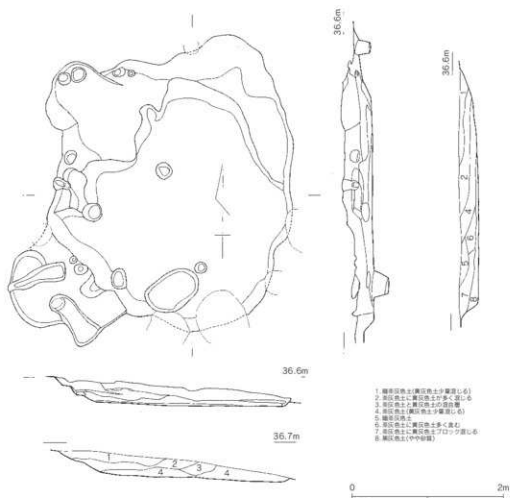


Fig. 21 前田遺跡 17SI025 遺構実測図 (1/50)

ている。埋土はその上層と変わらなかったが、別遺構の可能性も考えられ、埋土の土坑の大きさは径約 0.6m の円形土坑だった可能性も考えられる。甕は底部下半が殆ど残っている状態で、甕の内外に若干破片を検出した。

17SX020 (Fig. 22)

西側の一部を攪乱で削平されていて、大きさは南北 0.65m、東西 0.56m 以上、深さ 0.38m の隅丸方形の土坑であったとみられる。土坑内には、鉢の底部のみが割れた状態で埋まっていて、口縁部は欠損している。鉢は土坑の埋土の中位にあり、鉢の中央には花崗岩礫が 1 個置かれ、その下にさらに破片がみられる。これらのことから、鉢は埋めた当初から欠損していた可能性が高い。

流路

17SX010

調査区の東端で検出された落ち込みで、確認できた範囲では深さ 0.9m を測る。これは区画整理前に敷地の東側を水路が通っていたため、その流路の一部とみられる。

(4) 出土遺物

竪穴住居

17SI025 茶灰色土出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋 3(1) 口縁端部は僅かに摘み出した程度。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ。

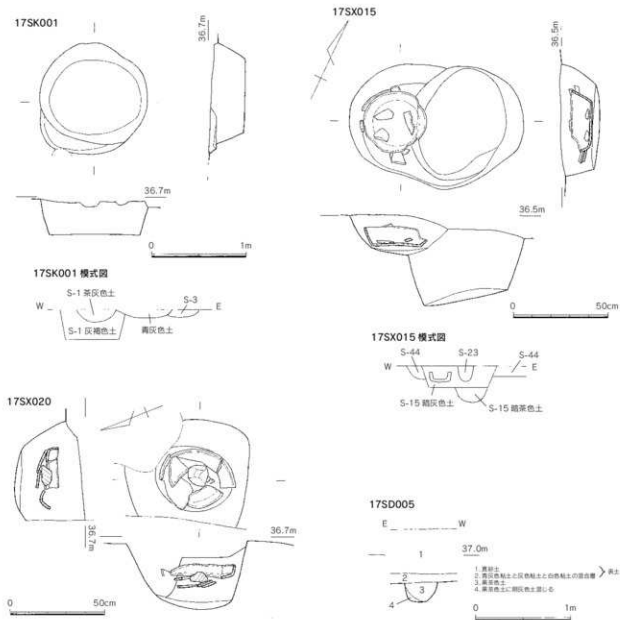


Fig.22 前田遺跡 17SK001、SX015・020、SD005 遺構実測図 (1/20、1/40)

還元やや不良で、色調は灰黄色を呈する。

坏c (2~6) 復元高台径9.8~10.0cm。若干丸みのある体部に台形状の高台を貼付する。色調は2が灰色で、それ以外は暗灰色を呈する。2と3の内面底部には不定方向のナデがみられる。6は僅かに外に跳ねる高台を貼付する。色調は淡灰色を呈する。

土師器

甕 (7) 胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。内面は横方向のヘラケズリ、口縁部外面はヨコハケを施すが、その下はナデ調整。

古式土師器

高坏 (8) 胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、色調は淡茶灰色を呈する。内面ナデ、外面はタテハケを施す。

鉢 (9) 全形は分かりづらいが、胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。外面はナデ、内面は細かいハケ調整を施す。

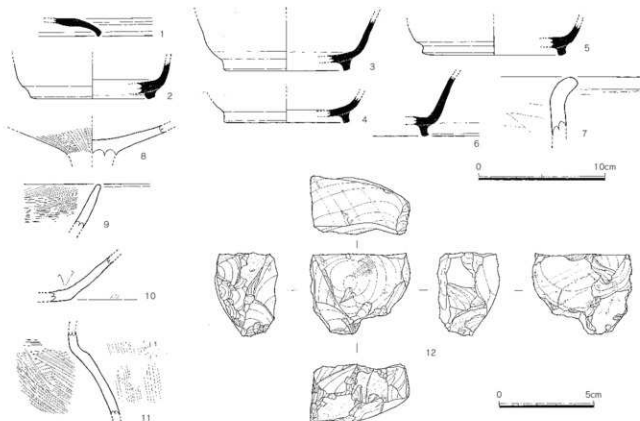


Fig. 23 前田遺跡 17S1025 茶灰色土出土遺物実測図 (1/3、12は1/2)

壺 (10) やや丸味のある底部。胎土は0.3 cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈する。内面はケズリが僅かに残るが、外面は磨滅し調整不明。

弥生土器

甕 (11) 肩部付近で、胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は灰茶色や淡橙色を呈する。内外面にタテハケを施す。

石製品

石核(12) 大きさは4.2 × 5.3 × 3.25 cm。広く打ち插いた部分が多くみられ、原石面も一部残る。黒曜石製。

溝

17SD005 出土遺物 (Fig. 24)

須恵器

坏c (1) 復元高台径9.0 cm。焼成不良で全面磨滅し調整不明。色調は淡灰色を呈する。

17SK001 灰褐色土出土遺物 (Fig. 24)

肥前系磁器

皿 (2) 復元高台径9.2 cm。内外面透明釉で、高台畳付は軸を掻き取る。外面には圏線、内面には花樹が描かれ、花卉が朱色、その他を緑色、灰色で描く。

碗 (3) 復元口径11.0 cm、器高5.9 cm、復元高台径6.0 cm。全面に白青色釉を施し、薄青色釉で外面に草花文、内面は口縁部に圏線、底部に「寿」を描く。

埋壘

17SX015 出土遺物 (Fig. 24)

瓦質土器

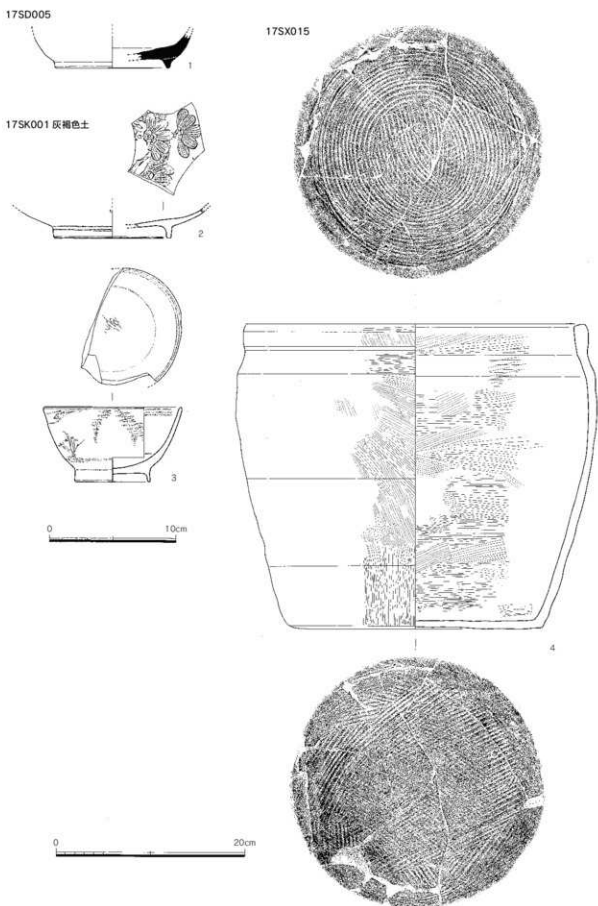


Fig. 24 前田遺跡 17SD005、SK001、SX015 出土遺物実測図 (1/3、4は1/4)



Fig. 25 前田遺跡 17SX010・020 出土遺物実測図 (1・2は1/4、3・4は1/3)

甕 (4) 復元口径 35.8 cm、器高 32.3 cm、底径 27.0 cm。胎土は 0.3 cm 以下の砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。口縁部はやや肥厚し、やや直線的に立ち上がる。内外面はハケ目調整され、内面は単位が 5～6 本/cm のヨコハケ、外面は単位が 5 本/cm のタテハケやヨコハケで、底部の内外面には同

心円状に3本/cmの粗いハケを施す。

17SX020 出土遺物 (Fig. 25)

瓦質土器

鉢 (1, 2) 1は底径38.1cm。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は灰色や白灰色を呈する。内外面とも細かいハケを施すが内面中央付近は使用により磨滅し、ハケは部分的にしか残っていない。外面底部のハケ目単位は約8本/cmである。2は肥厚した口縁部で、外面下位は指頭丘痕とタテハケ、その上はヨコハケ、口縁端部はヨコナデで、内面下半は斜めハケを施す。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は薄黄灰色を呈する。1と2は同一個体の可能性がある。

流路

17SX010 出土遺物 (Fig. 25)

国産陶器

椀×皿 (3) 復元底径4.2cm。胎土は淡茶白色を呈する。外面は黄灰色釉を施すが、底部付近は露胎で赤茶色に変色する。内面には緑黄色釉や暗緑灰色釉を施し、底部は輪状に釉をふき取る。SX010の最上層にあるS-21より出土。

17SX010 茶色土出土遺物 (Fig. 25)

鉢 (4) 復元高台径10.0cm。体部より底部の器面の方が薄い。胎土は比較的精製された明茶色で、内面は白色釉と薄茶灰色釉の波状文で、目跡が残る。外面は茶褐色に施釉。高台皿付は露胎で目跡が残る。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 26)

肥前系磁器

椀 (1, 2) 2点ともSK022より出土。1は口径12.4cm、器高7.3cm、底径6.85cm。高台皿付以外は淡白青色釉を施し、須帯で草花文と圏線を描く。口縁端部には2ヶ所だけ輪花のような切込みがみられる。2は復元口径11.1cm、器高6.15cm、復元底径4.8cm。高台皿付以外は淡白青色釉を施し、外面は藍色釉で草花文と圏線を描き、内面は青灰色釉で圏線や文様を描く。口縁端部には1ヶ所だけ輪花のような切込みがみられる。

国産磁器

椀 (3) 復元高台径4.1cm。外面は黒色釉、内面は淡青灰色釉を施す。高台はケズリ出しで露胎。胎土は黒色粒が混じり白灰色を呈する。SX037より出土。

皿 (4) 復元高台径4.2cm。胎土は白灰色で、内外面に白灰色釉を薄く施し、内面底部を輪状に拭き取る。外面高台付付近は露胎で回転ナデ調整。SX053より出土。

瓦質土器

鉢 (5~7) 5は口縁部がやや肥厚する。胎土は微細な砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。内面はナデ、外面はタテハケで、内外面とも煤が付着する。SX036より出土。6は復元口径13.4cm。若干内湾気味の体部で、口縁部は肥厚する。内面ヨコナデ、外面下半はヘラケズリで、上半部はミガキで、花卉のスタンプを施す。表土より出土。7は復元底径16.4cm。胎土は0.2cm前後の白色砂粒を含み、淡明灰色を呈するが、断面の芯部は黒灰色を呈する。外面はタテハケ、内面はヨコハケ、外面底部は磨滅するが僅かにハケ目が残る。SK058より出土。

埴輪

円筒埴輪 (8) 台形のタガを貼付する。タガ直上の復元径で19.2cm。胎土は0.2cm以下の茶色粒をやや多く含み、薄い明橙色を呈する。外面は僅かにハケ目が確認できる。内面は磨滅するが、布目のような痕跡が残る。大きさは成屋形古埴の埴輪より小さい。攪乱より出土。

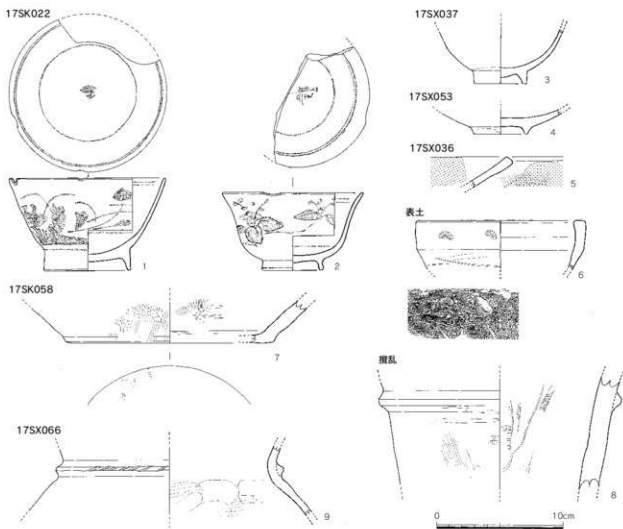


Fig. 26 前田遺跡 17次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3)

弥生土器

壺 (9) 頸部の屈曲部に刻み目のある突帯を巡らせる。外面は磨滅するが、内面にはヨコハケ後にナデた痕跡が残る。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は黄灰色を呈する。SX066より出土。

(5) 小結

奈良時代の遺構は東側に官道が通っていた時期のものとみられる。隣接地で行われた前田遺跡第13・14・16次調査でも中近世の遺構が多く確認され、今回の調査区でも一連の遺構の広がりを示していた。これら中近世の遺構は、区画整理事業直前まで4軒ほどの集落を形成していた川越組(こうごし)の上(かみ)の集落の前身とみられる。

表5 前田遺跡第17次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	17SK001	土坑	S-5→1	19世紀～	B5
2		ビット	茶灰色土		B5
3		土坑	茶灰色土		B4
4		ビット群	茶灰色土		B4
5	17SD005	溝	黒灰色土 S-5→1	奈良時代	B5
6		ビット	茶灰色土	奈良時代	B4
7		ビット	茶灰色土	近世～	B4
8		ビット	茶灰色土	近世～	B3
9		ビット	茶灰色土		B3
10	17SX010	流路		近世～	CD1
11		攪乱			B3
12		ビット	茶灰色土		B3
13		ビット	茶灰色土		B3
14		攪乱	灰白色土	近現代	B3
15	17SX015	埋嚢	S-25→15	中世後期	B2
16		土坑	茶灰色土	弥生時代?	B3
17		ビット		弥生時代?	B3
18		ビット			B3
19		攪乱		近現代	B3
20	17SX020	埋嚢		中世	C3
21	17SX010	窪み	流路の堆積	近世～	C1
22	17SK022	土坑		19世紀～	B2
23		ビット	S-15→23		B2
24		ビット			B2
25	17SI025	堅穴住居	S-25→15	8世紀中頃～後半	C2
26		土坑			C2
27		土坑			C1
28		ビット			C2
29		ビット群			D2
31		ビット群	灰茶色土		C3
32		ビット群	灰茶色土		C3
33		ビット	S-25の下		C2
34		ビット群		中世～	C3
36	17SX036	ビット群		中世～	C4・5
37	17SX037	ビット		近世	D6
38		ビット		中世～	D5
39		窪み			C6
41		攪乱			D6
42		土坑			C3
43		窪み		中世～	C4・5
44		たまり	S-44→15		B2
46		土坑			C2
47		ビット		古代～	D2
48		ビット			D2
49		ビット群			C3
51		ビット			D6
52		攪乱		近現代	D6
53	17SX053	ビット		近世	D3
54		ビット			D3
56		窪み			D3
57		窪み		近世～	D3
58	17SK058	土坑		中世	E3
59		ビット群		近世～	E3
61		ビット		近世～	E3
62		ビット			D3
63		ビット		中世～	D3
64		ビット			D3
66	17SX066	土坑	S-57の下	弥生後期	D3
67		ビット群	S-57の下		D3
68		ビット		古代～	D3
69		ビット	S-43の下	近世～	D4
71		ビット			D3
72		ビット			E4
73		ビット	S-5の下	古代～	C5

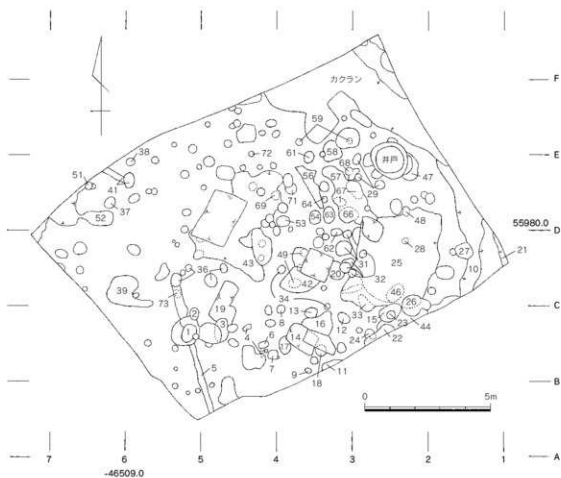


Fig. 27 前田遺跡第17次調査遺構略測図 (1/150)

4、宮ノ本遺跡第8次調査

(1) 調査に至る経緯と成果

調査地は、太宰府市大字向佐野 374-1 で、古代の官人墓地と知られる宮ノ本丘陵に位置する。

調査は佐野土地区画整理事業に伴って実施された。周辺一帯は区画整理前にすでに造成されている部分が多かったが、調査地は旧地形が残されていた。官人墓地や須恵器窯の存在が期待されたが、遺構・遺物とも確認されなかった。調査後も周辺の調査が進み、現在まで宮ノ本丘陵で確認されている官人墓地は、平野部が望めるような丘陵周辺部に分布しており、そのような場所を選地していることがわかった。この調査地のように奥まったところで、墳墓が全く確認されていないことは、早くから造成されていた西側の丘陵一帯にも、墳墓は存在していなかったと推測できる。調査対象面積は約 3800 m²。調査期間は 1994 (平成 6) 年 5 月 11 日～6 月 23 日、調査は狭川真一が担当した。

5、日焼遺跡第17次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市向佐野1丁目106の一部で、宮ノ本丘陵の東側裾付近に位置する。

2013(平成25)年5月、積水ハウスより個人住宅の建て替えにあたり、埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせがあった。2013(平成25)年7月19日、確認調査を行い、遺構や遺物を確認したため調査することとなった。開発対象面積は686.98㎡であったが、調査は遺構が破壊される建物部分のみであったため、調査面積は255㎡である。発掘調査は2013(平成25)年7月31日～8月30日に実施した。確認調査は遠藤茜が行い、調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

調査地は、現代の宅地造成の真砂土が0.5m前後全体に覆い、その下にはそれ以前の造成土が0.2m前後覆い、それを除去すると遺構が確認されたが、包含層や田畑の土は確認されていない。東側は現在でも市道が通り、道路の方が低い。遺構面も道路から約3m程から道路に向かって急に下がっていくため、元々東に向かって下がっていく土地に石垣を積み、盛土をすることによって、現在の宅地が形成されたことが理解できる。

(3) 検出遺構

貯蔵穴

17SK001 (Fig. 29)

貯蔵穴は南北に長い楕円形で、断面形状は上部が狭く、深いほど広いフラスコ形をしている。検出段階での穴の大きさは南北1.32m、東西1.6mであった。内部は最大幅南北2.85m、東西2.3m、底部の大きさは南北2.6m、東西1.75m。深さは1.55m前後であった。埋土は上層1m程が灰茶色土で、地表面近

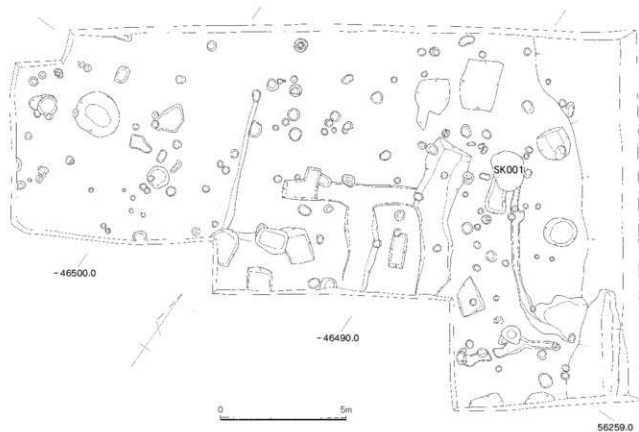


Fig. 28 日焼遺跡17次調査遺構全体図 (1/150)

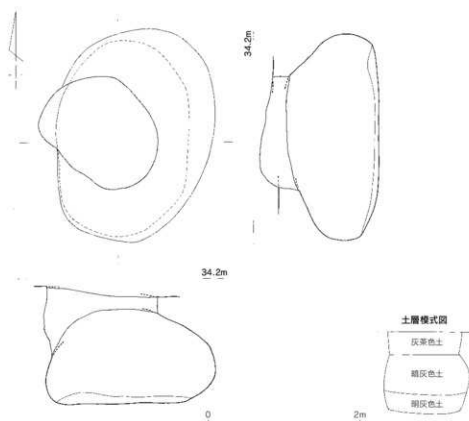


Fig. 29 日焼遺跡 17SK001 遺構実測図 (1/50)

くは特に硬かった。その下層は地山の黄灰色土と暗灰色土が互層になり、その下に一見地山のようなきれいな明灰色土があって、それを除去すると地山に達する。明灰色土を除去すると日照り続きの調査時でも僅かに湧水があった。よって、当時は掘削後の掘り方の底に明灰色土を入れ固めた状態で使用したものと推測される。埋土から黒曜石の石製品は出土するが、弥生土器の出土はみられず、底部糸切りの小皿や土師質の擂鉢の破片が出土した。自然堆積とみられる互層の堆積層がみられたことから、掘削は弥生時代で、自然堆積の最終埋没は中世頃と推測される。

(4) 出土遺物

貯蔵穴

17SK001 灰青色土出土遺物 (Fig. 30)

土師質土器

鉢 (1) 胎土は 0.2cm 以下の橙茶色粒をやや多く含む。焼成はやや不良で、色調は淡橙色を呈する。内外面磨減し調整不明。

国産陶器

壺 (2) 内外面回転ナデ。胎土は精製され、色調は茶褐色を呈する。外面には暗茶色釉を薄く施す。内面は回転ナデで、外面と同じく暗茶色釉を薄く施す。

石製品

搔器 (3) 大きさは縦 2.75cm、横 2.2cm、厚さ 0.7cm。端部両面に小刻みな加工を施す。黒曜石製。

削器 (4) 端部を欠損する。現存縦 4.2cm、横 1.6cm、厚さ 0.75cm。側面に整形のための小刻みな加工がみられる。黒曜石製。

剥片 (5) 大きさは縦 2.1cm、横 2.2cm、厚さ 1.0cm。黒曜石製。

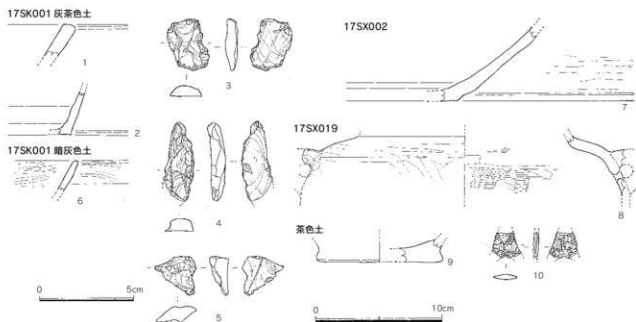


Fig. 30 日焼遺跡第17次調査出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

17SK001 暗灰色土出土遺物 (Fig. 30)

瓦器

鉢 (6) 胎土は精製され、焼成良好で色調は灰色を呈する。内外面ともミガキを施す。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 30)

土師質土器

鉢 (7) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒や雲母を多く含み、色調は茶色や暗茶色を呈する。内面はヨコナデ、外面はナデ調整で、薄く煤のようなものが付着する。底部外面にはハケ目が残る。SX002より出土。

瓦質土器

湯釜 (8) 孔を持つ耳部を貼付する。胎土は白色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。内面は粗いハケで、上部はその後ヨコナデで、炭化物が薄く付着する。外面はミガキを施す。SX019より出土。

弥生土器

甕×壺 (9) 復元底径10.0cm。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡黄茶色等を呈する。全体的に磨減が著しくボロボロで調整は不明。茶色土より出土。

石製品

石鎌 (10) 先端と基部を欠損する。現存縦1.35cm、現存横1.55cm、厚さ0.25cm。黒曜石製。

(5) 小結

遺構の状況はビットが散在するものの、古代の遺物はほとんどなく、黒曜石片や近世以降とみられる遺物が少量と出土する程度で、残された遺構からそれらの性格を読みとるのは難しい。西側で行った日焼遺跡第13次調査の遺構検出レベル(34.6m前後)からすると、0.4m程低くて、遺構検出面も浅い。包含層が全く残されていない状況から考えても、近世以降の宅地利用によって、古代の遺構は削平されたものと推測される。

そのような中、貯蔵穴と推測される断面フラスコ形の土坑が検出されたことは、前田遺跡で展開していた弥生時代前期の集落の一部がこの付近まで広がっていた可能性を考えるものであった。

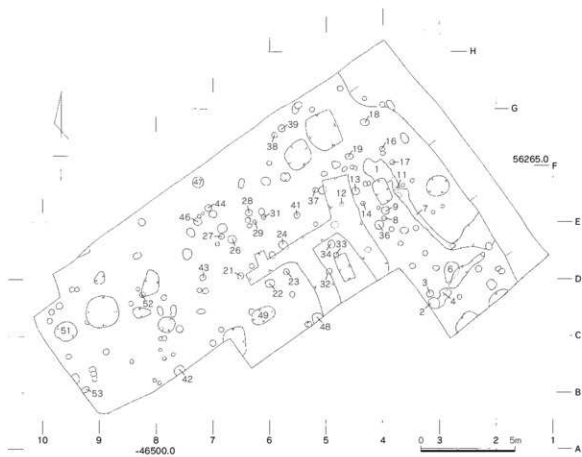


Fig. 31 日焼遺跡第17次調査遺構略測図 (1/200)

表7 日統遺跡第17次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	17SK001	貯蔵穴		弥生時代～中世	EF3・4
2	17SX002	ビット			C3
3		ビット			C3
4		ビット		近世～	C2
6		土坑	上層は灰茶色土、下層は灰色砂	近世～	D2
7		溝	灰茶色土	近世～	D・E2～4
8		ビット			E3
9		ビット		近世～	E3
11		ビット			E3
12		ビット			E4
13		ビット			E4
14		ビット			E4
16		ビット			E4
17		ビット			E3
18		ビット			E4
19	17SX019	ビット			E4
21		ビット			D6
22		ビット	黒灰色土		C5
23		ビット			D5
24		ビット			D5
26		ビット		近代～	D6
27		ビット			D6
28		ビット			E6
29		ビット			E6
31		ビット			E6
32		ビット			D4
33		ビット			D4
34		ビット			D4
36		ビット			D4
37		ビット			E5
38		ビット			F5
39		ビット			F5
41		ビット			E5
42		ビット			B7
43		ビット			C7
44		ビット			E7
46		ビット			E7
47		ビット	ビット内にコンクリートブロック基礎。	現代	E7
48		ビット			C5
49		擾乱			C6
51		擾乱			C9
52		ビット			C8
53		ビット			B9

表8 日後遺跡第17次調査 出土遺物一覧表

S-1 灰褐色土	
須 恵	器 灰 甕
土 師	器 灰、小皿、甕類
土 師 質 土	器 鉢
国 産 陶	器 甕
石 製	品 削片(黒曜石)
S-1 緑灰色土	
須 恵	器 灰
土 師	器 破片
瓦	器 埴
土 師 質 土	器 埴鉢
S-2	
土 師 質 土	器 鉢、破片
石 製	品 削片(黒曜石)
S-3	
土 師	器 破片
S-4	
須 恵	器 破片
土 師	器 破片
国 産 陶	器 埴
国 産 磁	器 破片
S-6	
国 産 陶	器 埴
石 製	品 削片(黒曜石)
土 の	類 灰化木
S-7	
国 産 陶	器 埴
瓦	類 破片
S-8	
土 師	器 破片
S-9	
肥 前 系 陶 磁	器 破片
S-11	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-12	
土 師	器 破片
S-13	
土 師	器 破片
瓦 質 土	器 文鉢?
石 製	品 削片(安山岩)
S-14	
土 師	器 破片
S-16	
須 恵	器 破片
石 製	品 削片(黒曜石)
S-17	
土 師	器 小皿a
土 師 質 土	器 埴鉢
S-18	
須 恵	器 破片
S-19	
瓦 質 土	器 蓋縁
S-21	
土 師	器 破片
瓦	類 破片
S-22	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-23	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-24	
土 師	器 破片
石 製	品 削片(黒曜石、安山岩)
S-26	
瓦 質 土	器 鉢
国 産 磁	器 甕
S-27	
土 師	器 埴

S-28	
土 師	器 破片
S-29	
国 産 磁	器 破片
S-31	
弥 生 土	器 甕?
S-32	
須 恵	器 破片
土 師	器 小皿
石 製	品 削片(黒曜石)
S-33	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-34	
須 恵	器 埴
土 師	器 埴
S-36	
土 師	器 破片
S-37	
土 師	器 破片
S-38	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-39	
白	類 埴、破片(I)
S-41	
石 製	品 削片(黒曜石)
土 製	品 土塊
S-42	
石 製	品 削片(黒曜石)
S-43	
土 師	器 破片
瓦 質 土	器 破片
石 製	品 削片(黒曜石)
土 製	品 土塊
S-44	
土 師	器 破片
S-46	
国 産 陶 器	埴、工業製品
S-47	
漆 器 製	品 漆釘(丸釘)
瓦	類 半瓦(横L瓦)
S-48	
土 師 質 土	器 埴?
S-49	
土 師	器 破片
瓦	類 半瓦(横L瓦)
S-51	
須 恵	器 埴
肥 前 系 陶 磁	器 小皿
国 産 陶	器 埴、土瓶、破片
瓦	類 半瓦(横L瓦)
S-52	
土 師	器 破片
S-53	
土 師	器 破片
茶色土	
須 恵	器 埴
肥 前 系 陶 磁	器 小埴、埴
国 産 陶	器 瓶、土瓶、破片
国 産 磁	器 甕
弥 生 土	器 破片?
縄 文 土	器 埴
石 製	品 削片(黒曜石)
土 製	品 土管、レンガ

6、久郎利遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経緯

今回の対象地は太宰府市大字向佐野 488-1 に位置し、佐野土地区画整理事業に伴って、発掘調査を実施した。発掘調査は重機による試掘調査を行い、ピットが確認された南側のみ行った。調査期間は1990（平成2）年4月10日から4月11日である。調査は山村信榮が担当した。調査対象面積は315㎡、調査面積は132㎡である。

(2) 調査成果

地山はASO IV火砕流に由来する白色粘土の上面に茶色弱粘質土がのったものである。標高は31m前後である。

薄い表土直下でピット群と窪みを確認したが、隣地の原口遺跡第1次調査A区よりも地盤が高く、上面が大きく削平を受けているものと推測され、遺物も全く出土していないことから、これらのピット類が明確に遺構と言いつけるか微妙な状況であった。

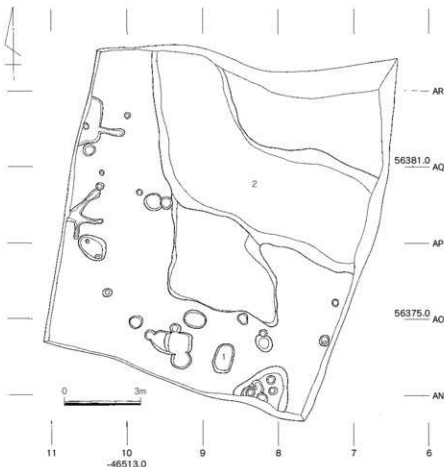


Fig. 32 久郎利遺跡第1次調査遺構全体図（1/150）

表9 久郎利遺跡第1次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		土坑	赤褐色土		AN8
2		溝状の窪地	明茶色土		AN8

7、久郎利遺跡第3次調査

(1) 調査に至る経緯

今回の対象地は太宰府市大字向佐野 493-1 に位置し、佐野土地区画整理事業に伴い、周辺で遺構が確認されていたため、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は1997（平成9）年9月30日から10月6日にかけて実施した。調査は宮崎亮一が担当した。調査対象面積は158.56㎡、調査面積は30㎡である。

(2) 基本層位

上面から宅地造成の真砂土が1.2mほど厚く覆い、その下に宅地以前の田圃の耕作土（黒灰色土）や床土、暗灰色砂質土が堆積し、その下の暗黄灰色砂質土に遺構が確認された。遺構検出面はおおよそ標高29.9m前後である。

(3) 検出遺構

氾濫原

3SX001

当初は白灰色砂が溝状に確認されたが、その後の調査で白灰色砂はさらに抹茶色土の堆積土の下に潜っていくことが確認され、東側に向かって下がっていく堆積状況がみられた。調査区は大佐野川の西側に位置し、また、すぐ東隣に現代の溝が通っていることから、調査区全体が大佐野川の氾濫原の一部である可能性が考えられる。

(4) 出土遺物

出土遺物は少量であり、また、風化も著しく年代を推定するには資料が極めて少ない状態で、実測できるものを図化した。なお、土師器は風化が著しく原形を保つものがほとんどない。

3SX001 黒灰色砂出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 3 (1、2) 2点とも外面上半部ナデ、内面上半部ナデ、それ以外は回転ナデ調整。色調は青灰色を呈する。

坏 c (3、4) 3の高台は外側に開くハの字形。復元高台径9.5cm。4は底部端に高台を貼付する。復元高台径8.2cm。

坏 (5) 内外面とも回転ナデ調整。色調は暗青灰色を呈する。

3SX002 出土遺物 (Fig. 33)

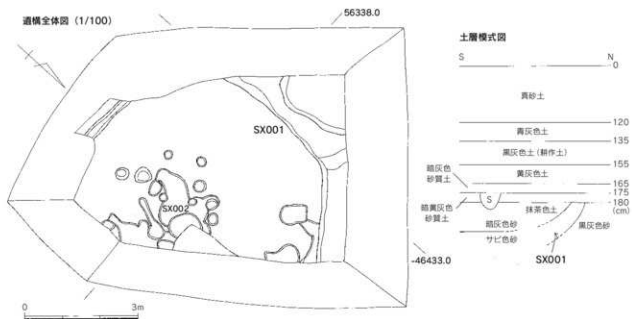
青白磁

碗 (6) 体部内外面に淡青緑色釉を施し、内面底部の軸を輪状に掻き取る。高台畳付と外面底部は露胎で、高台畳付には砂粒が付着する。

(5) 小結

今回の対象地は明確な生活と認識できる遺構は少なかった。また、久郎利遺跡第2次調査で、8世紀中頃から後半にかけての南北溝（流路？）が検出されていたが、そのすぐ東に位置する今回の調査区では、範囲が狭いため溝と認識するには至らなかった。

前述したように出土遺物が少ないため時期の特定は困難であるが、氾濫原は8世紀後半から平安時代初期に堆積したものと推測される。氾濫原上で確認されたピットや土坑の時期は全く不明と言わざるを得ない。



出土遺物 (1/3)
3SX001 黒灰色砂



Fig. 33 久郎利遺跡第3次調査遺構全体図 (1/100)・出土遺物実測図 (1/3)

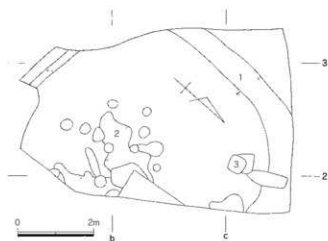


Fig. 34 久郎利遺跡第3次調査遺構略測図 (1/100)

表10 久郎利遺跡第3次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	3SX001	流路(氾濫原)の堆積層		8世紀後半～平安初期?	C1～3
2	3SX002	窪み		中世～?	AB1, 2
3		土坑			C2

表11 久郎利遺跡第3次調査 出土遺物一覧表

S-1 灰白色砂		S-2	表土
調査 部1通×Hc	調査 部1通, Hc, 裏?	調査 部1通×Hc, Hc	調査 部1通×Hc(裏面あり)
調査 白 銅1個	調査 白 銅1個		
S-1 黒灰色砂		灰色土	
調査 部1通3, Hc, 環	調査 部1通3, Hc, 環		

8、長浦遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経緯と成果

調査地は、太宰府市大字向佐野字長浦 255-1、255-2、256、257、259、260-6、260-5、262 で、佐野土地区画整理事業に伴って発掘調査が実施された。調査は1992（平成4）年1～2月にかけて実施し、調査面積は約7000㎡。調査は狭川真一が担当した。

調査地は、下流に長浦池が存在する谷地形で、古代の官人墓地と知られる宮ノ本遺跡がある丘陵地の北側の一角に位置している。また、調査地東側丘陵頂部で7世紀後半頃の須恵器窯跡が確認され、福岡県教育委員会によって調査されたこともあり、今回は対象地全面の表土を除去し遺構の確認を行った。しかし、それらに関係した遺構・遺物は全く確認できず、人為的な土地利用は全く行われなかったことがわかった。

9、長浦遺跡第2次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野字長浦 294 である。2003（平成15）年4月14日、専用住宅建築に伴う埋蔵文化財の問い合わせがあった。2003（平成15）年4月16日に確認調査を行い、深さ0.5mで遺構を確認した。対象地が佐野土地区画整理事業地内ということで、区画整理事業の一環として調査することとなった。発掘調査は2003（平成15）年5月19日から8月7日にかけて実施した。開発対象面積は891㎡で、調査面積は426㎡である。調査は高橋学が担当した。

(2) 基本層位 (Fig.36)

調査地は、東側の市道より2m程高い土地で、標高34mから36mにかけて遺構が展開している。調査直前は住宅が建っていたため、上面は平坦となっていたが、東側は傾斜面が盛土され、西側ほど表土が薄く削平も目立っていた。よって、周辺地形もあわせて考えると丘陵の背に向かって、あと1～2mは傾斜地が続いていたことが推定できる。調査地上面は表土が薄く、耕作土もほとんどなく現代の盛土であったが、東側法面に江戸後期の盛土が確認できた。地山は赤茶色土で、阿蘇4火砕流堆積物が堆積してできた地盤である可能性が高い。なお、遺構検出時の遺物取り上げは赤色土で行った。

(3) 検出遺構

木棺墓

2ST010 (Fig.36)

調査地で最も高い所から約1m下がった平坦面で検出された木棺墓で、東西向きで埋葬された木棺墓で、木棺は検出プランが長さ2.0m、幅0.55mで、棺材は遺存していなかったが、鉄釘24本の出土位置や鉄釘に残された木質状況から、木棺そのものは長さ1.93m、幅0.5m程で、底板の上に側板がのり、その側板は東西の材を南北の材が挟む形で棺となっていたと推測される。また、木棺の部材は厚さ2.1cm前後の板材を用いて作られている。底板については明確ではないものの厚さ2.5cm以上の板材で作られていたと推測される。掘り方は長さ2.43m、幅は東側に向かって広く0.8～1.1mで、前述のように上面が大きく削平を受けているため深さは0.3mであった。棺内から副葬品は検出されなかった。

溝

2SD005

ST010の西側にある南北溝で、約1mの段が付いた法面下に掘られている。検出長7.3m、最大幅1.22m、深さ0.2m前後で、削平のためか北に行くほど狭くなり自然に消滅している。振れは約N-73° 9′ -Eで

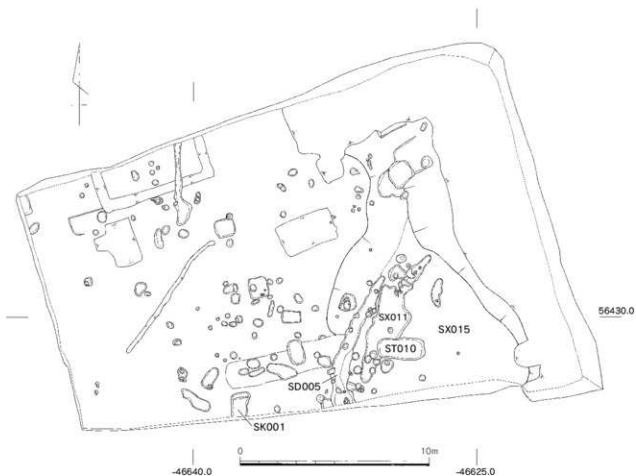


Fig. 35 長浦遺跡第2次調査遺構全体図 (1/200)

ある。

土坑

2SK001 (Fig. 36)

調査区南辺部で検出され、調査区外に続いている。長さ1.2m以上、幅0.7～0.9m、深さ0.1m前後の方形プランである。炭化物が多く混じった明茶色土からは、弥生土器が出土したが、底面より浮いていて、置かれた状態ではなく、廃棄土坑と推測される。

溜まり状遺構

2SX011

長さ7.55m、幅1.85m、深さは最深で0.12mだが、全体的に0.03m前後と浅く、溝というより窪み状の遺構である。

段造成

2SX015

調査区東端にある段で、調査区上面より1m前後低く、東側の市道より2m程高い。平坦面の西側には、SD005やSX011が掘られている。なお、東側は攪乱で削平されている。

(4) 出土遺物

木棺墓

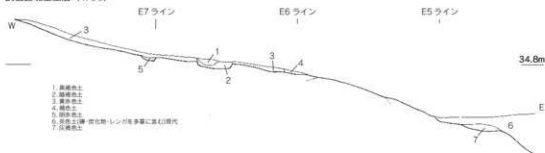
2ST010 出土遺物 (Fig. 37)

須恵器

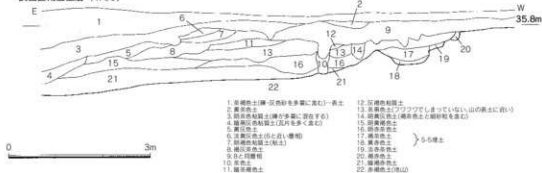
調査区基本層位模式図



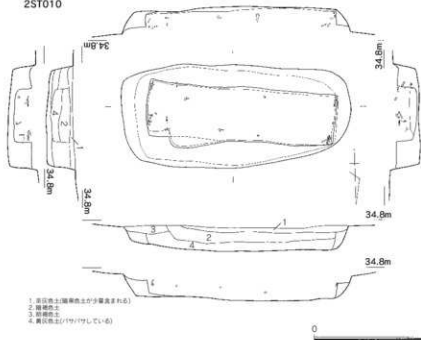
調査区北壁土層 (1/80)



調査区南壁土層 (1/80)



2ST010



2SK001

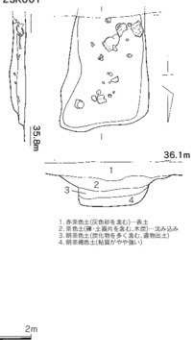


Fig. 36 長浦遺跡第2次調査土層、2ST001、2SK001 遺構実測図 (1/40、1/80)

甕 (1) 内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

土製品

輪羽口 (2) 先端部で、被熱により内外面とも暗灰色や灰色などに変色し、先端部内外面ともは黒色に溶解している。

金属製品

鉄釘 (3～5) 3・4 は上部を欠損するが、木質が錆つき、上部は横方向、下部は縦方向の木目が残る。3は縦8.3cm+ α 。釘断面は0.4×0.6cm。南側板からの打ち込み釘。4は縦7.3cm+ α 。釘断面は0.5×0.5cm。北側板からの打ち込み釘。5は90°に折り曲げた鉄釘で、それぞれ釘方向に直行する木目が残る。

2ST010 茶灰色土出土遺物 (Fig. 37)

金属製品

鉄釘 (6～26) 頭部が残る6・7・9～11・13・14・16～20・22～24は、頭部を90°曲げている。釘断面は方形で、先端部に向かって細くなっている。釘の長さは9cm前後と7cm程の2種類を使用したものと推測される。6は、先端部が90°に折れている。これは打ち込み時に折れた可能性も考えられる。錆ついた木質は上部が横方向、下部は縦方向の木目で、上部の板材は厚さ2.1cm前後と推測される。北側板からの打ち込み釘。7は長さ8.7cm。上部の横方向の木目幅は1.1cm。南側板からの打ち込み釘とみられるが、打ち込み過ぎか。8は両端を欠損し、横方向の木目幅は2.1cm以上。北側板からの打ち込み釘。9は頭部を僅かに欠損し現存長9.1cm。横方向の木目幅は2.0cm。北側板からの打ち込み釘。10は長さ6.85cm。木目は全て横方向である。蓋留め釘。11は長さ6.7cm。木目は全て縦方向である。蓋留め釘。12は現存範囲での木目は全て縦方向である。蓋留め釘か。13の上部は、横方向の木目で幅2.0cm。北側板からの打ち込み釘。14は現存範囲での木目は全て横方向である。蓋留め釘。15は先端部分で、現存範囲での木目が全て横方向である。蓋留め釘。16は現存範囲での木目が全て横方向である。蓋留めの釘とみられ、木目にも2cm程で変化があるため、蓋材は厚さ2cm前後であったことがわかる。17～20は上部破片で、木目は全て横方向である。17は蓋留め釘。18は南側板もしくは蓋留め釘。19は蓋もしくは底板からの打ち込み釘。20は蓋留め釘。21は横方向の木目が残存。22～24は上部の破片で、現存範囲では横方向の木目が残存。22は底板からの打ち込み釘か。23は蓋留め釘か。25は木質が残存しておらず、釘断面は0.3×0.4cmの方形である。26は横方向の木目が残存。底板からの打ち込み釘。

溝

2SD005 出土遺物 (Fig. 38)

須恵器

坏 (9) 内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

土坑

2SK001 出土遺物 (Fig. 38)

弥生土器

甕 (1～5) 1は口縁部内面にヨコハケ、体部外面にタテハケを施し、それ以外はヨコナデ。色調は暗茶褐色を呈する。2は体部に一条の断面三角形の突帯を貼付する。全体を薄く仕上げるが、磨滅し調整不明。色調は暗黄色を呈する。3の色調は黄色を呈する。内外面とも磨滅し調整不明。4は平底の底部で、外面に僅かにタテハケが見られ、内面に指頭圧痕がみられる。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は外面赤橙色、内面暗茶色を呈する。底径6.9cm。5は平底の底部で、内外面とも調整不明。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は外面赤橙色、内面暗茶黄色、断面暗茶色を呈する。底径7.05cm。

甕×壺 (6) 底部と推測される破片。内外面磨滅し調整不明。

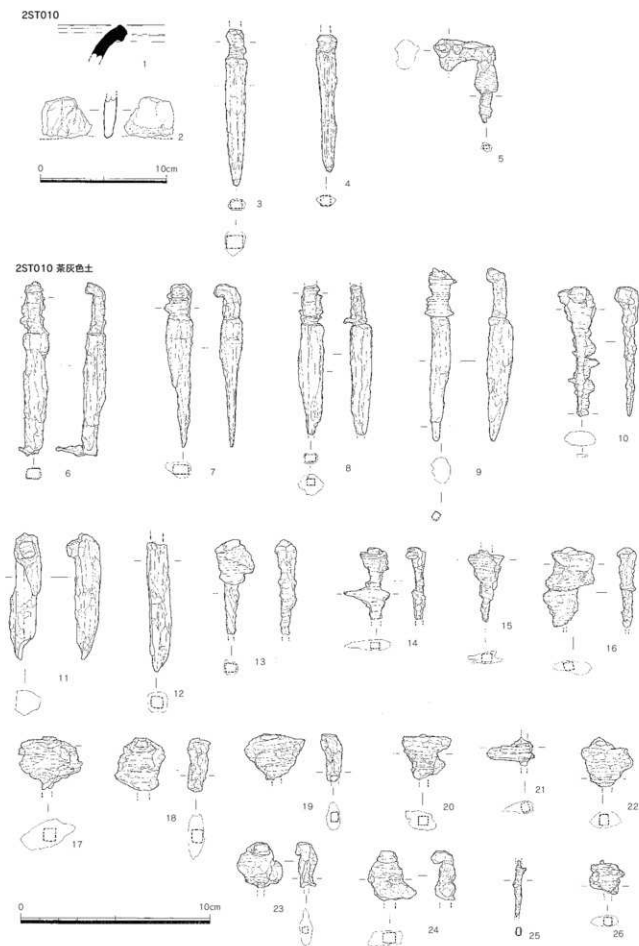


Fig. 37 長浦遺跡 2ST010 出土遺物実測図 (1/2、1・2は 1/3)

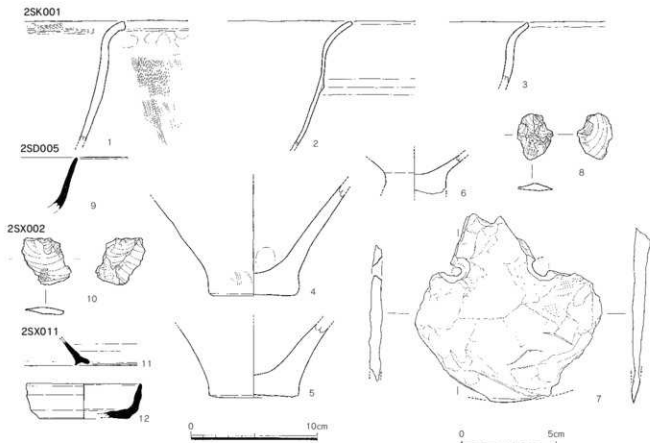


Fig. 38 長浦遺跡 2SD005・2SK001、SX002・011 出土遺物実測図 (1/3、石製品は 1/2)

石製品

石包丁 (7) 大形の石包丁である。大きく欠損し、表裏とも剥落が目立つが、研磨された刃先が僅かに残り、紐孔である円孔が2つ確認できる。輝緑凝灰岩製。

剥片 (8) 大きさ 1.4×1.4 cm、厚さ 0.4 cm。黒曜石製。

その他の遺構

2SX002 出土遺物 (Fig. 38)

石製品

剥片 (10) 大きさ 2.5×2.7 cm、厚さ 0.4 cm。表面が風化している。黒曜石製。

2SX011 出土遺物 (Fig. 38)

須恵器

蓋 1 (11) 内外面とも回転ナデで、外面上半部は回転ヘラケズリである。焼成良好だが還元不良で、色調は暗黄色や淡黒灰色を呈する。

小坏 a (12) 復元口径 9.2 cm、器高 2.8 cm、復元底径 7.3 cm、底部外面は回転ヘラケズリ後未調整。その他は回転ナデ調整。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗灰青色を呈する。

土層

茶褐色土出土遺物 (Fig. 39)

瓦類

軒丸瓦 (1) 燻し瓦で、外面は光沢があるが、一部土師質である。瓦当は巴文の周囲に珠文を巡らす。

石製品

石臼 (2) 石臼の上石で、上面は窪み、掘り合わせ面には溝が彫られ使用により研磨されている。上面の周縁部は条痕があり、一部平滑である。

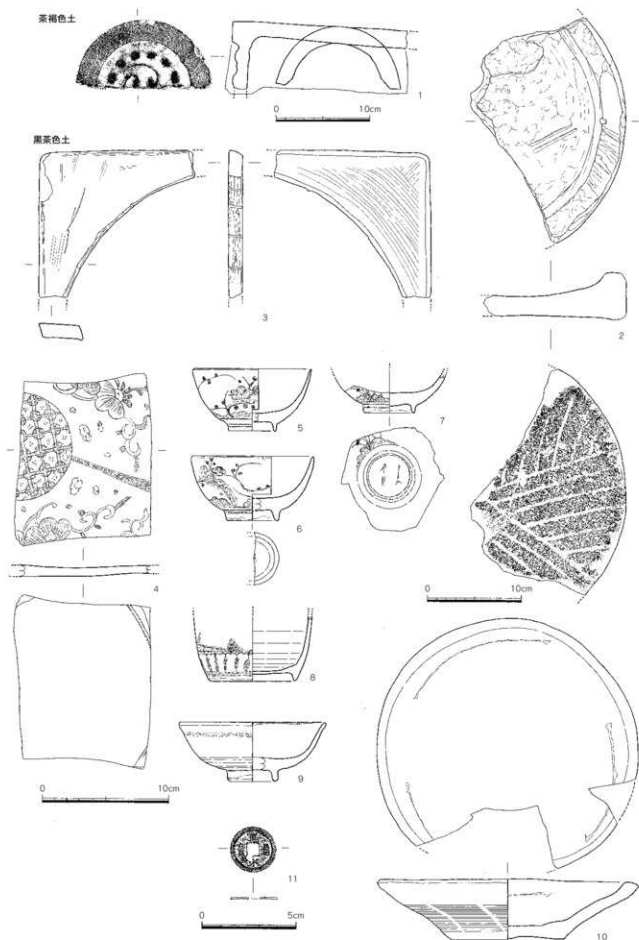


Fig. 39 長浦遺跡第2次調査茶褐色土・黒茶色土出土遺物実測図 (1/3、1・2は1/4、11は1/2)

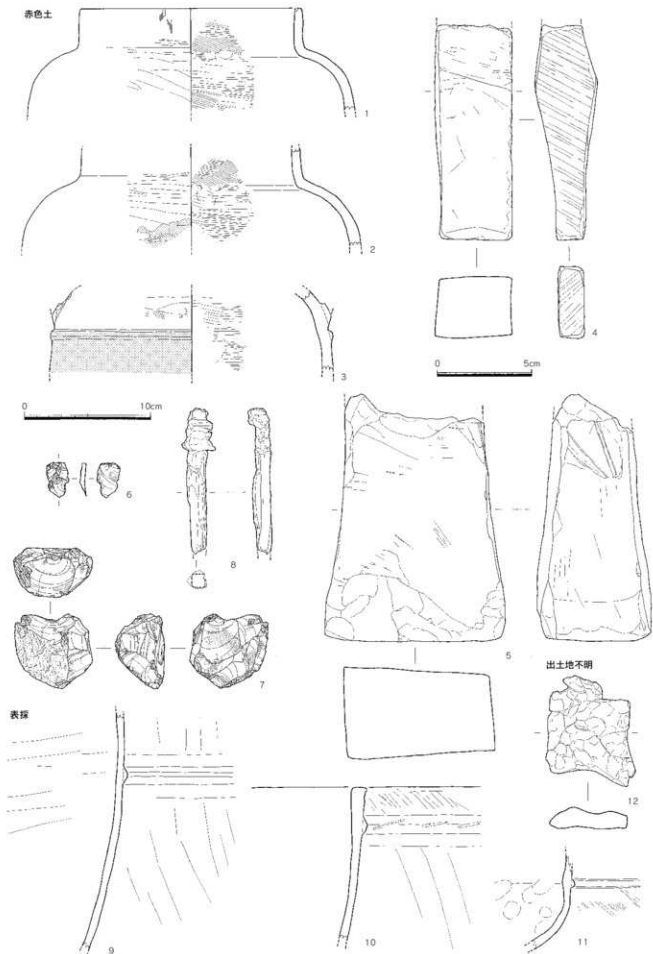


Fig. 40 長浦遺跡第2次調査赤色土、表探、その他出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

黒茶色土出土遺物 (Fig. 39)

土師質土器

サン (3) 七輪のサンの一部とみられる。内側を円形に削り抜いている。上面は橙褐色でミガキのように仕上げる。下面は黄褐色で、内側面と共にハケ目を施す。

肥前系磁器

大皿 (4) 色絵の大皿で、高台径 25cm 程と推測される。白灰色の胎土に内面には濃朱色、朱色、淡茶褐色、黒色の軸で文様を描き、外面には淡藍色で圏線を描く。

碗 (5～7) 丸味のある体部に梅花文様を描き、高台に 2 条の圏線を描く。高台壘付は露胎である。5 は復元口径 9.4cm、器高 4.9cm、復元高台径 3.8cm。6 は復元口径 9.8cm、器高 5.1cm、復元高台径 4.2cm。全体に薄い淡い緑色を施し、淡藍色で文様を描く。高台外面にも文様が描かれている。7 は高台径 4.1cm、文様は淡く薄い藍色と暗緑色の 2 色で描く。高台外面にも文様が描かれる。

猪口 (8) 外面は薄い淡青白色釉を施し、藍色で文様を描く。高台壘付は軸を掻き取り目跡が残る。内面は回転ナデで露胎である。復元高台径 6.9cm。

国産磁器

碗 (9) 復元口径 11.6cm、器高 4.7cm、復元高台径 4.1cm。内外面に淡茶黄色釉を施し、内面底部は輪状に軸を掻き取る。口縁部外面はやや濃い茶黄色を巡らし圏線をなしている。高台壘付は露胎で、高台内面は白灰色釉を施す。

国産陶器

皿 (10) 口径 20.6cm、器高 4.8cm、底径 8.8cm。内外面回転ナデだが、外面は強い回転ナデで輪状の文様ようになる。全面茶褐色釉を施し、内面には輪状に目跡が残る。

金属製品

銭貨 (11) 「寛永通宝」(新寛永) で、表面は劣化が目立つ。

赤色土出土遺物 (Fig. 40)

瓦質土器

湯釜 (1～3) 1 は復元口径 17.6cm、口縁部内外面ハケ、体部外面ミガキ、内面は指押さえの後ヨコハケ調整。胎土は精製され、焼成は良好、色調は黄白色を呈する。2 の胎土は精製され、焼成は良好、色調は黄白色を呈する。外面ミガキ、内面指押さえの後ヨコハケ調整。体部中位には煤が付着する。3 は体部中位に突帯を巡らせ、うっすらと煤が付着する。内面は指押さえの後ヨコハケ、焼成は良好で色調は黄白色を呈する。

石製品

砥石 (4、5) 4 は一部欠損し、現存長 11.45cm、最大断面幅は 4.1 × 3.3cm。使用面は 2 面で、それ以外にも一部研磨面がある。使用面以外の面に切断時の鋸痕とみられる条痕が残る。5 は半分ほど欠損するが、現存長 13.1cm、断面の大きさは 9.55 × 6.0cm。使用面は 4 面。一部深く抉り込み削り込んだ部分がある。

剥片 (6) 大きさは 1.85 × 1.2cm、厚さ 0.3cm。黒曜石製。

石核 (7) 大きさは 3.95 × 4.2 × 2.15cm。原石面が残る。黒曜石製。

金属製品

鉄釘 (8) 頭部を曲げ、上部は横方向、下部は縦方向の木目が残る。上部の板材の厚みは 1.6cm 前後である。釘断面は方形で、大きさは約 0.7 × 0.7cm である。先端部は欠損する。

表探遺物 (Fig. 40)

瓦質土器

火鉢 (9、10) 9は、外面は工具によるナデでミガキのような調整である。内面は磨滅する。10は口縁部ほど肥厚する。口縁部外面には低い突帯を巡らし、ハケ状工具による刺突痕を施す。外面は工具のようなものでナデを施す。内面は磨滅する。

湯釜 (11) 胎土は精製され、色調は黒灰色を呈する。内面指押さえ、外面はハケの後ヨコナデ調整。

出土地不明遺物 (Fig. 40)

金属製品

鉄片 (12) 幅4.7cm、厚さ1cmで内外面にヒビが入っているが、全形は不明である。

(5) 小結

調査区は丘陵地であったため、上面は大きく削平され、遺構はほとんど残っておらず、一段下がった東側を中心に遺構が遺存していた。調査区東側の中段テラス (SX015) では、墓や溝が検出されたが、SX011の存在から、7世紀中～後半に傾斜地を切り下げて平坦面を造っていたと推測される。さらにこの平坦面の西端にSD005があり、調査まとめて後述するように官道西側溝の可能性を秘めている。また、この平坦面には、SX011に切り込んで木棺墓 (ST010) が営まれている。これは宮ノ本丘陵に造営されている古代墓地群の中で最も北に位置している。木棺墓 (ST010) に土器が残されていなかったため、明確な築造年代はわからないが、宮ノ本丘陵の官人墓地はほとんど10世紀中頃までのもので、糸坊域にみられるように中世の墓地は確認されていない。さらに、この平坦面が官道として使用されていたとするならば、ST010の時期は、水城西門を通る官道が主に使用されていた時期 (9世紀中～後半まで) より後となり、10世紀代の木棺墓である可能性が考えられる。決定的な証拠が少ない中での推測のため、官道の位置次第では所見も大きく変わることもあり得るが、周辺環境を知る上で貴重な調査であった。

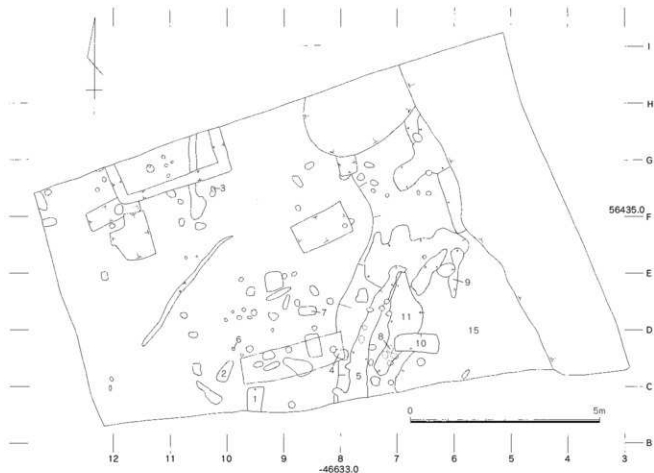


Fig. 41 長浦遺跡第2次調査遺構略測図 (1/200)

10、長浦遺跡第3次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野 300-1 で、小字長浦に位置する。佐野土地区画整理事業に伴うもので、2003（平成15）年8月19日に確認調査を行い、敷地の北東側で遺構の存在が確認されたため、2003（平成15）年9月11日から9月20日にかけて発掘調査を実施した。確認調査は中島恒次郎が行い、調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は397㎡であるが、遺構が確認された部分のみの調査であり、調査面積は54.5㎡である。

(2) 基本層位

調査地は、西側の宮ノ本丘陵から緩やかに下る丘陵中に位置し、調査前は畑として利用されていた。表土は西側が約0.4mと浅く、東ほど0.6mと深くなっている。表土は暗灰色の耕作土のみで、その直下に遺構が確認できる。地山は東側が暗灰色のやや粘土質で、干裂状の亀裂が確認できたが、縄文時代や旧石器時代の遺物は全く出土していない。

(3) 検出遺構

土坑

3SK001 (Fig. 43)

不定型な土坑でやや北西方向に長く、長辺5.5m、短辺3.5m、深さ0.3mを測る。底面は緩やかな凸レンズ状になっていて、南側がやや深くなっている。埋土は縮まりのない灰茶褐色土の単純層で、焼け石など数個の川原石が含まれていた。SX003と切り合っているが、SX003の堆積層が消滅するあたりで切り合っているため明瞭ではないが、現場の所見ではSK001が新しく見えた。出土遺物に1点だけが肥前系の染付が含まれており、最終埋没はSX003とほとんど変わらないかもしれない。

その他の遺構

3SX003

埋土は黄灰色土や暗灰色土が混じる茶灰色土で、SK001との切り合いは微妙である。東西に堆積が確認でき、南側では約0.3mの明瞭な落ち込みが確認できるが、北側は緩やかな落ち込みであり、北側の

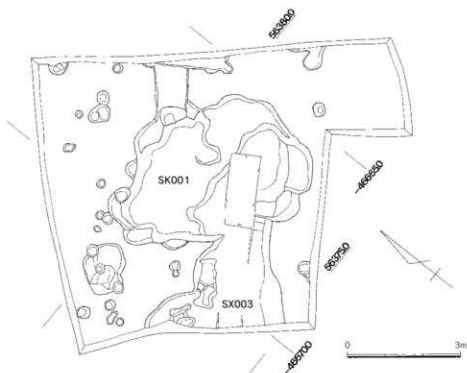


Fig. 42 長浦遺跡第3次調査遺構全体図 (1/100)

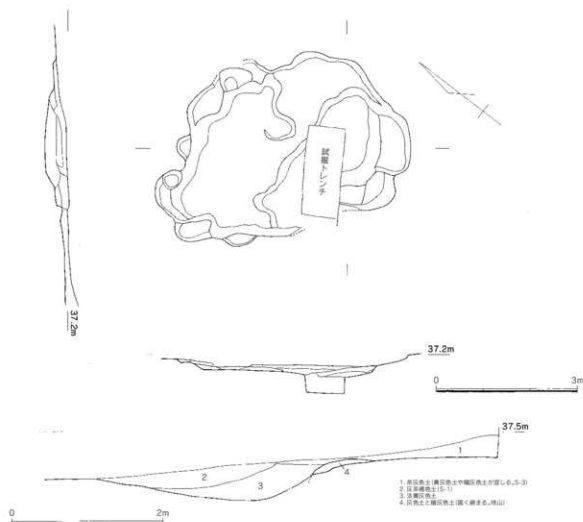


Fig. 43 長浦遺跡 3SK001 遺構実測図 (1/80、土層は 1/50)

底面には自然にできたと思われるえぐり込みがみられたが、ビット等の遺構は認められなかった。

(4) 出土遺物

土坑

3SK001 出土遺物 (Fig. 44)

土師質土器

播鉢 (1) 口縁部外面を若干肥厚させる。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡黄灰色を呈する。外面には煤が厚く付着する。内面には細かいヨコハケを施し、下方には摺り目が残る。

3SK001 茶色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (2) 口径 6.2cm、器高 1.15～1.3cm、底径 4.9cm。外面底部切り離しは回転糸切りである。色調は明橙色を呈する。

土師質土器

鉢 (3) 口縁部に向かって僅かに肥厚させる。内面には粗いヨコハケ、外面にはタデハケを施し、煤が付着する。胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒を多く含み、金雲母も僅かに含む。色調は内面が暗茶色、外面は黒茶色を呈する。

3SK001 茶灰色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

坏 a (4) 復元底径 6.8cm。全体的に磨滅するが外面にはヨコナデがみられる。色調は黄灰色を呈する。

坏 b (5, 6) 5 は復元口径 10.5cm、器高 2.3cm、復元底径 5.4cm。体部は水挽きで整形され、外面底部切り離しは回転糸切りである。色調は淡橙色を呈する。胎土は白色砂粒を多く含みザラザラしている。6 は復元口径 12.0cm、器高 3.5cm、復元底径 6.8cm。体部は水挽きで整形され、外面底部切り離しは回

転糸切りである。色調は淡橙色を呈する。胎土は白色砂粒を多く含みザラザラしている。

黒色土器

小皿 a (7) A 類。復元底径 6.2cm、底部切り離しは糸切り。内外面ヨコナデ。胎土は金雲母をやや多く含み、色調は黄橙色を呈する。

土師質土器

播鉢 (8、9) 8 は復元底径 14.9cm。外面には煤が付着する。内面は細かいヨコハケの後に 6 本 /3cm の播り目を施す。底部外面はナデ調整。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は茶灰色を呈する。9 の外面は指頭圧痕が残る、底部近くには僅かにハケ目が残る。内面は細かいヨコハケの後に 6 本 /2.6cm の播り目を施す。底部外面はナデ調整。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は茶灰色を呈する。

瓦質土器

湯釜 (10) 内面ヨコナデ、外面は口縁部がヨコナデだが、体部はミガキのようにも見えるが丁寧なヨコナデにも見える。屈曲部には指頭圧痕を残す。肩部には 2 本の細い沈線を巡らし、その間に六弁の花文のスタンプを付ける。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色を呈する。

3SX003 出土遺物 (Fig. 44)

土師質土器

鉢 (11) 胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。内面は磨滅し調整不明、口縁端部はヨコナデ、外面は煤が付着するがヨコハケがみられる。

大甕 (12) 口縁部外面の突帯部分を欠損し、ヨコハケを見ることができる。外面はヨコハケの後ナデ。口縁部上面と内面はヨコハケ調整。胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈する。

肥前系磁器

碗 (13) 白色の素地で、外面には薄青色釉で文様を描く。

国産陶器

皿 (14) 胎土は赤茶色で、外面には暗灰色釉を施し、内面には暗白灰色釉と黄褐色釉で波状文を描く。

その他の遺構

茶褐色土出土遺物 (Fig. 44)

土師質土器

鉢 (15) 片口を持つ。胎土は 0.2cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。内面には細かいハケがみられる。外面には指頭圧痕の後ヨコナデ調整。

弥生土器

甕 (16) 底径 7.4cm。胎土は 0.3cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。全体的に磨滅し調整不明。

李朝雑釉陶器

碗 (17) 復元口径 10.4cm、器高 3.5cm、高台径 5.0cm。胎土はやや粗く微細な白色砂粒を多く含み、暗灰色釉を全面に施す。底部は削り出で、底部内外面に目跡を残す。

表土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

鉢 (18) 体部上部で僅かに屈曲し外反する。胎土は 0.2cm 以下の砂粒を含み、色調は黄灰色を呈する。焼成は不良で、磨滅し調整不明だが、外面には煤が付着する。

土師質土器

托型土器 (19) 胎土は僅かに白色粒を含み、焼成良好で、色調は淡橙黄色を呈する。外面には僅かに煤が付着する。

(5) 小結

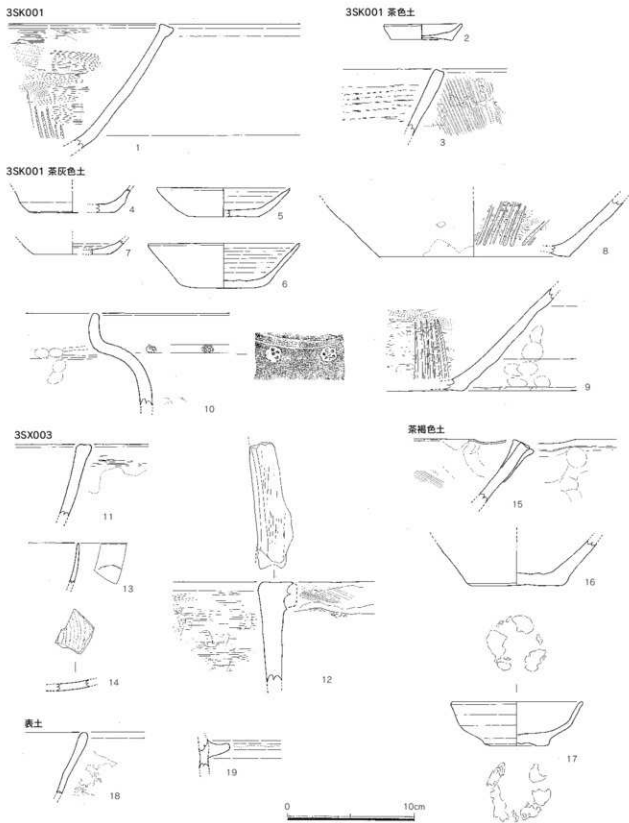


Fig. 44 長浦遺跡第3次調査出土物実測図 (1/3)

今回の調査はほとんどが中世以降の遺構であった。南隣の日焼遺跡第4次調査でも中世後期から近世かけての土地利用が確認され、今回の調査とほぼ同じ時期の遺構が展開している。また、現在の土地の形状から考えると、長浦遺跡第4次調査で検出された掘立柱建物と今回の調査地は同じ敷地内である可能性が推測される。

なお、水城西門に続く官道が付近を通ると推測されているのだが、奈良時代の遺構は未確認であった。

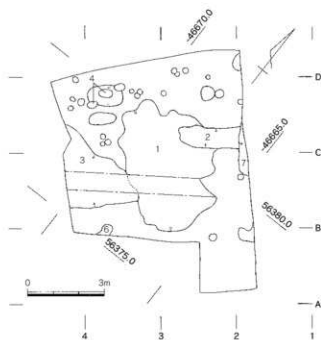


Fig. 45 長浦遺跡第3次調査遺構略測図 (1/150)

表14 長浦遺跡第3次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	3SK001	土坑	茶色土 S-1と3の切り合い不明瞭	中世後期～	BC2・3
2		土坑			C2
3	3SX003	窪み	茶灰色土 S-1と3の切り合い不明瞭	近世～	B3・4
4		ピット群		平安後期以降?	C3
6		ピット			A3
7		土坑?		中世	B1

表15 長浦遺跡第3次調査 出土遺物一覧表

S-1	須恵 器坏c	S-4	須恵 器甕3
土師 質土 器鉢、播鉢	土師 器破片	龍泉窯系青磁 椀：I(1)	弥生 土 器壺×壺
須恵 質土 器破片			
肥前系陶磁器 破片		S-6	土師 器破片
瓦 類破片(格子目)		S-7	瓦 質土 器破片
S-1 茶色土		茶褐色土	
須恵 器坏、甕、壺		須恵 器甕、破片	
土師 器坏、小皿a×坏a(1)、小皿a(1)、甕		土師 器坏	
土師 質土 器鉢		土師 質土 器鉢	
白 磁陶：V(1)		肥前系陶磁器 椀	
S-1 茶灰色土		李朝雑釉陶器 椀	
須恵 器坏、高坏、甕		国産 陶器 小坏、甕?、破片	
土師 器坏、坏a、坏a(1)、坏c、小皿a、小皿a(1)、甕		弥生 土 器甕、破片(丹塗り)	
黒色土器A類 小皿a		瓦 類破片(煉し瓦)	
土師 質土 器播鉢		石 製 品 磨片(安山岩)	
瓦 質土 器高釜			
弥生 土 器壺		表土	
S-2	土師 器破片	須恵 器甕2?	
国産 磁 器皿		土師 器坏	
S-3	土師 器坏	土師 質土 器鉢、托型土器	
土師 質土 器鉢、大甕			
瓦 質土 器鉢?			
肥前系陶磁器 椀、破片			
国産 陶 器坏、皿、破片			

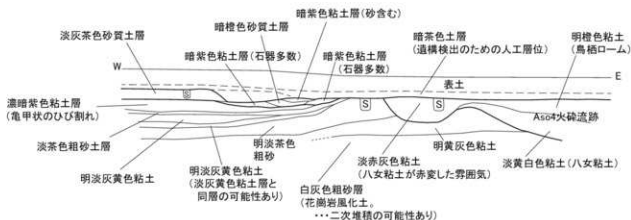


Fig. 47 長浦遺跡第4次調査区土層模式図

平されたとみられる。調査区西側は、前述の基盤層となる粘土・粗砂層の堆積の上に、表面に亀甲状のひび割れをもつ濃暗紫色粘土層が広がり、その上に淡灰茶色砂質土層が堆積している。濃暗紫色粘土層が広がるのは佐野地区一帯で確認されており、これが近隣の基本堆積とみられる。ただ、調査区中央部は、濃暗紫色粘土層の上に狭い範囲に薄く、砂を含まないシルト質の「暗紫色粘土層」が堆積しており、濃暗紫色粘土層のひび割れにも貫入していることが確認された。ここから大量の石器が出土した。「暗紫色粘土層」の北側の一部では「暗橙色砂質土層」、そして砂を含む「暗紫色粘土層」が被ったところがあり、ここからも同時期の石器そして土器片が出土している。

これらを基盤として、近現代の遺構面が広がっている。遺構の一部には古代・中世の遺物を含む遺構も散見される。これらを表土が覆っている。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

4SB005 (Fig. 48)

調査区東側で検出した。梁行の柱間は4.4m、桁行の柱間は3.15mを測る。小さく深い穴を柱穴とし、丸い栗石を根固めに利用しているようである。不明な点が多いものの、梁行2間の建物とみられる。近代か。

4SB010 (Fig. 48)

調査区西側で検出した。梁行2間、桁行3間程度の建物とみられる。梁行の柱間は3.4m、桁行の柱間は1.45～1.65mを測る。近世～近代か。

4SB015 (Fig. 48)

調査区西側で検出した。梁行2間、桁行4間程度の建物とみられる。梁行2間、桁行4間の建物で、中央に間仕切りを持つとみられる。梁行は桁行と比べて柱間が長い。

溝

4SD021

調査区西側中央で検出した溝である。検出長3.02m、深さ0.13mを測る。埋土から古代の遺物のみ出土した。

土坑

4SK001 (Fig. 49)

調査区北東隅で検出した。長径2.04m、短径1.39m、深さ0.35mを測り、埋土は暗茶色灰黄色粘土を主体とする。遺物は出土していない。

4SK011

調査区北側中央で検出した。長径1.44m、短径0.95m、深さ0.27mを測る。埋土は淡灰色砂質土。

4SK016

調査区北西隅で検出した。長径3.28m、短径2.04m、深さ0.29mを測る。埋土は暗茶色土。近代か。

4SK029 (Fig. 49)

調査区北西隅で検出した。長径1.65m、短径0.75m、深さ約0.55mを測る。三和土で側面を固めた箱型土坑。かなりの高温で焼けており、三和土の表面は煤・炭が付着する。その上に、橙灰色～黄灰色土の埋土が堆積する。近代か。

その他の遺構

小穴・小穴群

4SX012

調査区北東隅で検出した小穴群。近現代の遺物に混じって黒曜石細石刃が出土した。

4SX013

調査区北西隅で検出した小穴群。近代か。

4SX014

調査区北西隅で検出した小穴群。近代か。

4SX018

調査区西側中央で検出した小穴群。古代の遺物を含む。

4SX019

調査区西側中央で検出した小穴群。古代の遺物を含む。

4SX027

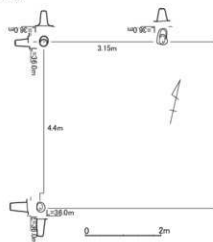
調査区北西隅で検出した小穴群。

4SX034

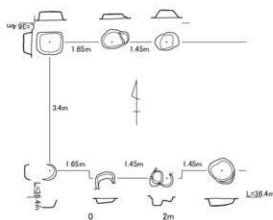
調査区中央部で検出した小穴。黒曜石剥片が出土した。

4SX036

長4SB005



長4SB010



長4SB015

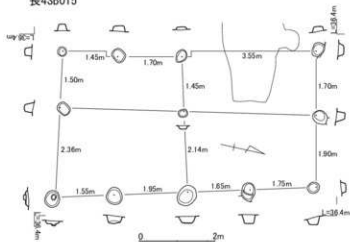
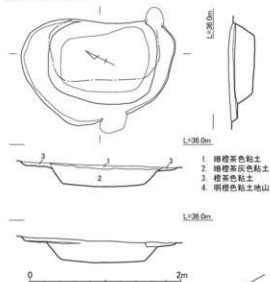


Fig. 48 長浦遺跡第4次調査掘立柱建物遺構実測図 (1/100)

長4SK001 (1/50)



長4SK029 (1/50)

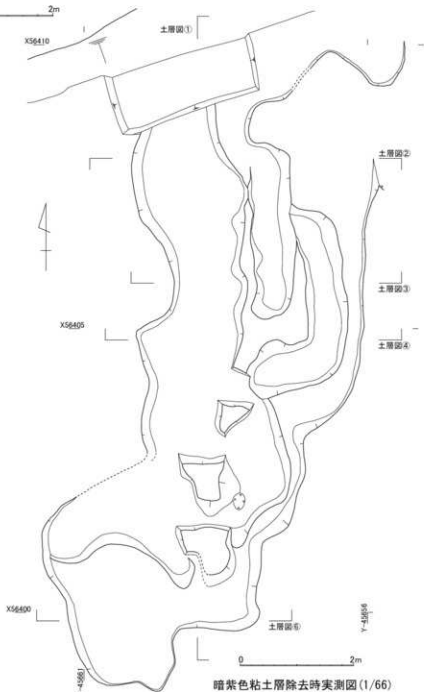
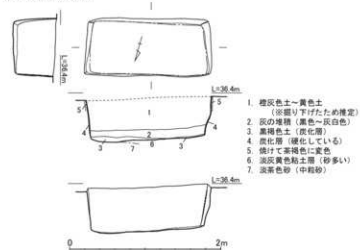


Fig. 49 長浦遺跡第4次調査各遺構実測図

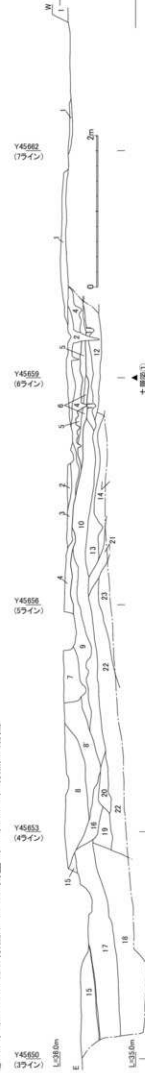
① 6ライン (Y-45.659.0) 南北土層図



土層名 ※ <> は遺物取り上げ

1. 褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味はなく強い感じ)
2. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
3. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
4. 褐色粘土 (わずかに砂を含む)
5. 褐色粘土 (わずかに砂を含む)
6. 褐色粘土 (わずかに砂を含む)

② Gライン2m北の東西トレンチ南壁 (X56.408.0) 東西土層図



土層名 ※ <> は遺物取り上げ、おぼろげな土層として扱ったもの

1. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
2. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
3. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
4. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
5. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
6. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
7. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
8. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
9. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
10. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
11. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
12. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
13. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
14. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
15. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
16. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
17. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
18. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
19. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
20. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
21. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)
22. 赤褐色粘土 (若干砂を含む)

③ Gライン0.2m南ライン (X56.405.8) 東西土層図



土層名 ※ <> は遺物取り上げ

1. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
2. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
3. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
4. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)

④ Gライン1.2m南ライン (X56.404.8) 東西土層図



土層名 ※ <> は遺物取り上げ

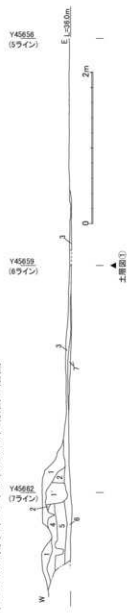
1. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
2. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
3. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)
4. 赤褐色粘土 (若干砂を含む、茶色味は強く強い感じ)

Fig.50 長浦遺跡第4次調査土層図① (1/50)

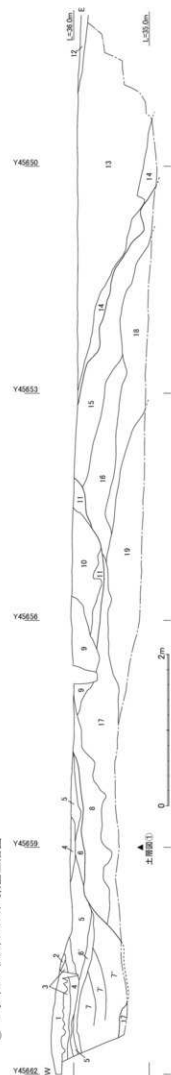
⑤ Fライン0.2m南ライン (X56.402.8) 東西土層図



⑥ Eライン0.15m南ライン (X56.399.85) 東西土層図



⑦ Dライン (X56.397.0) 東西土層図



- 土層名 ⑦ <>は流動物リトガセ
 1. 灰褐色粘土層 <灰褐色粘土層>
 2. 暗褐色粘土層 <暗褐色粘土層>
 3. 暗褐色粘土層 <暗褐色粘土層>
 4. 暗褐色粘土層 <暗褐色粘土層>
 5. 暗褐色粘土層 <暗褐色粘土層>
 6. 暗褐色粘土層 <暗褐色粘土層>
 7. 灰色砂層 (砂層)
 8. 暗褐色粘土層 (砂層)
 9. 暗褐色粘土層
 10. 暗褐色粘土層

- 土層名 ⑧ <>は流動物リトガセ
 1. 灰褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 2. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 3. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 4. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 5. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 6. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 7. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 8. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 9. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 10. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 11. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 12. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 13. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 14. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 15. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 16. やや暗い灰褐色粘土層 (砂層)
 17. 暗褐色粘土層 (砂層)
 18. 暗褐色粘土層 (砂層)
 19. 暗褐色粘土層 (砂層)

- 土層名 ⑨ <>は流動物リトガセ
 1. 灰褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 2. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 3. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 4. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 5. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 6. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 7. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 8. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 9. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 10. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 11. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 12. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 13. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 14. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 15. 暗褐色粘土層 (暗褐色粘土層)
 16. やや暗い灰褐色粘土層 (砂層)
 17. 暗褐色粘土層 (砂層)
 18. 暗褐色粘土層 (砂層)
 19. 暗褐色粘土層 (砂層)

Fig. 51 長浦遺跡第4次調査土層図② (1/50)

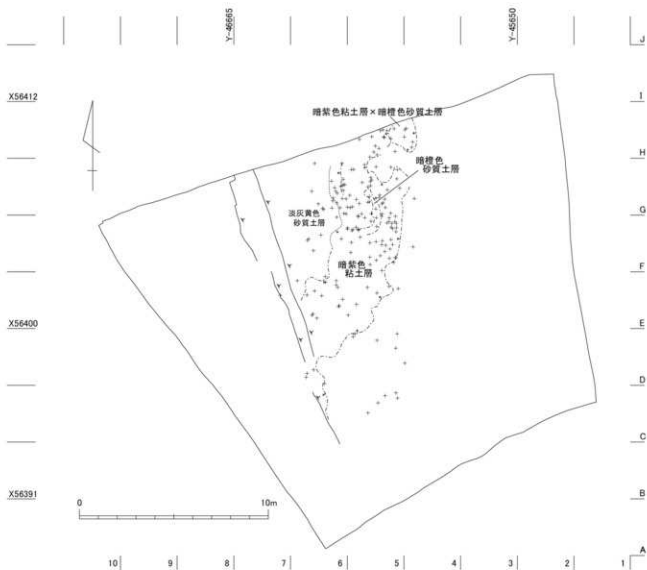


Fig. 52 長浦遺跡第4次調査 石器・土器出土分布図 (1/200)

調査区中央部で検出した小穴群。

4SX038

調査区南西寄りで検出した土坑。近現代の遺物に混じって黒曜石スボールが出土した。

攪乱

4SX006

調査区北東隅で検出した。

4SX028

調査区西側中央で検出した。

石器包含層等

暗橙色砂質土層および暗紫色粘土層 (Fig. 49)

調査区中央部に、概ね南北11m、東西4mの範囲の窪みに厚さ3～10cm程度で堆積する層群である。表面は、おそらく近現代の削平を受けているとみられる。

これらが堆積していた窪みの底面は、平坦ではなく凹凸が認められ、南西から北東に向かってごく

わずかに傾斜している。この凹凸を埋めるように暗紫色粘土層が堆積しており、範囲の北端に暗橙色砂質土が混入している、といった状況が窺われた。中でも層が厚く残存していた G5 地区 (X=56406 ~ 56409、Y=45656 ~ 45659 付近) で、後期旧石器～縄文時代草創期頃の石器、そしてわずかに土器片が出土した。石器包含層の主体は暗紫色粘土層である。なお、暗紫色粘土層の上に暗橙色砂質土層が堆積するのを基本的な層序とするが、G6 地区付近では上下関係が逆転している箇所も見受けられた。

これらの層は北に延びていたとみられるが、現在は、調査区北側は削平されており、すでに消失していると推測される。

濃暗紫色粘土層

暗紫色粘土層の直下に堆積する層である。この層の表面は亀甲状にひび割れが走っており、暗紫色粘土層がひび割れを埋めるように貫入しているのが観察される。

ここからの遺物出土は見なかった。

淡灰黄色粘土層

暗紫色粘土層や濃暗紫色粘土層の下に堆積する層である。ここからも石器が出土しているが、層の表面に近い位置からの出土であり、本層からの出土と確実に言い切れるものはなかった。この結果と調査終了期限に従い、この層の掘り下げ途中で調査終了とした。

(4) 出土遺物

溝

4SD021 出土遺物 (Fig. 53)

須恵器

蓋 c (1) 残存高 1.9cm。天井部は回転ヘラ削りを施し、つまみ取り付けに伴うナデを残す。胎土は 1mm 以下の砂粒をやや含むが精良。焼成・還元とも良好で、色調は暗灰色～黒灰色を呈す。

土坑

4SK011 出土遺物 (Fig. 53)

須恵器

蓋 3 (2) 口縁部の破片である。残存高 1.4cm。胎土は 0.1～1mm の白色砂や炭化物粒子を含むが、精良かつ密である。焼成・還元ともに良好で、淡灰色～暗灰色～黒灰色を呈す。

4SK016 出土遺物 (Fig. 53)

土師質土器

播鉢 (3) 注口部の破片である。残存高 9.8cm。胎土は 4mm 以下の白色砂をやや多く含む、微細な白雲母、角閃石を含む。焼成や良好で、色調は暗黄橙色～黄茶色を呈す。

4SK029 出土遺物 (Fig. 53)

ガラス製品

目薬瓶 (4) 「肥前神埼」「龍眼水」と書かれたガラス製目薬瓶である。色調は暗青色を呈す。

小穴・小穴群

4SX012 出土遺物 (Fig. 53)

石製品

細石刃 (15・16) 15は、長さ 0.8cm、幅 0.55cm、厚さ 0.1cm。黒曜石製。16は、長さ 1.7cm、幅 0.7cm、厚さ 0.2cm。黒曜石製。

剥片 (17) 長さ 3.7cm、幅 1.65cm、厚さ 0.45cm。黒曜石製。

4SX013 出土遺物 (Fig. 53)

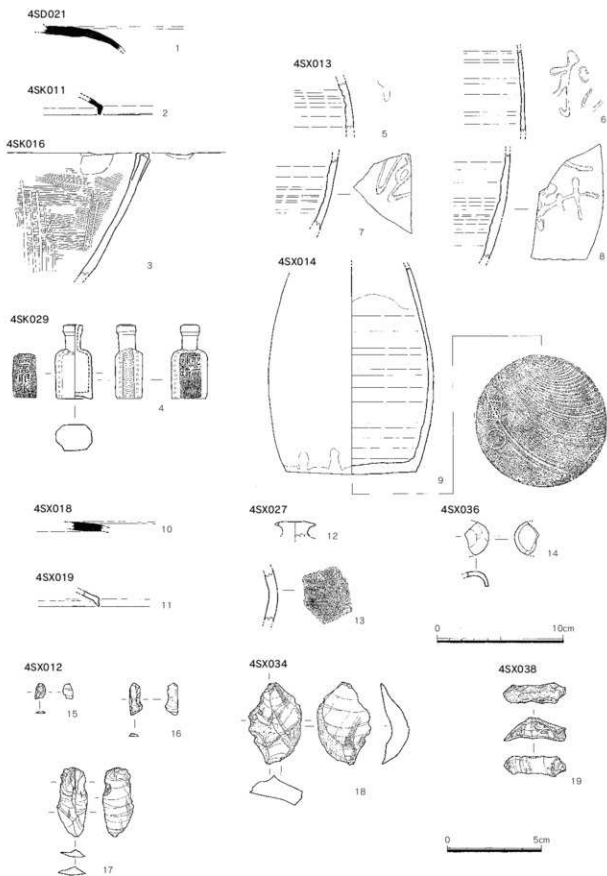


Fig. 53 長浦遺跡第4次調査溝・土坑・小穴出土遺物実測図(1～14は1/3、15～19は1/2)

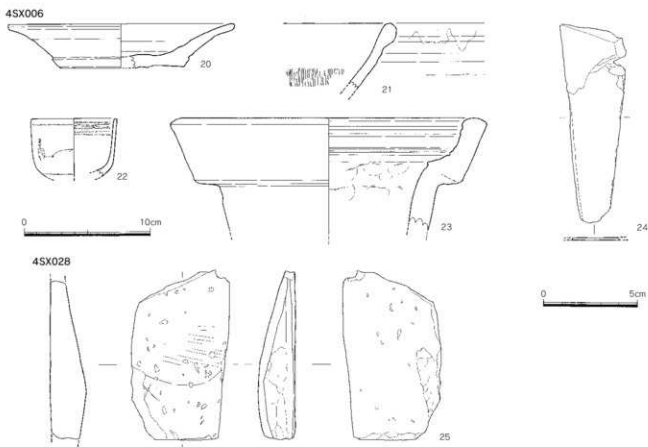


Fig. 54 長浦遺跡第4次調査攪乱出土遺物実測図 (20～23は1/3、24・25は1/2)

国産陶器

徳利 (5～8) 同一個体とみられる破片である。いずれも内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後、透明度・光沢ともに低い褐色釉を施す。素地は1mm以下の白色砂を含むが精良で硬質に仕上がりが、淡茶色を呈す。焼成は良好。なお6～8は白色釉で文字が書かれており、6は「松」、7は「屋」、8は「此」あるいは「村」などの字とみられる。

4SX014 出土遺物 (Fig. 53)

国産陶器

壺 (9) 内面は回転ナデと回転ヘラ削りを施す。素地は暗灰色で、底部および外面は茶褐色を呈す。内面には暗茶赤色の釉を薄く施す。外面は粘度の高い白色釉を粗く施し細かな凹凸のある仕上がりととなる。焼成は良好。なお底部は糸切りされ、「高」字を波線で四角く囲ったスタンプ、および巴文状のものを円で囲ったスタンプが押印されている。

4SX018 出土遺物 (Fig. 53)

須恵器

蓋 (10) 天井部の破片で、天井部は回転ヘラ削りを施す。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや含むが精良。焼成は良好だが還元はほとんど進んでおらず、色調は淡茶色～茶褐色を呈す。

4SX019 出土遺物 (Fig. 53)

土師器

蓋 3 (11) 口縁部の破片で、内面にミガキ a (回転ヘラミガキ) がわずかに観察される。胎土は0.5mm

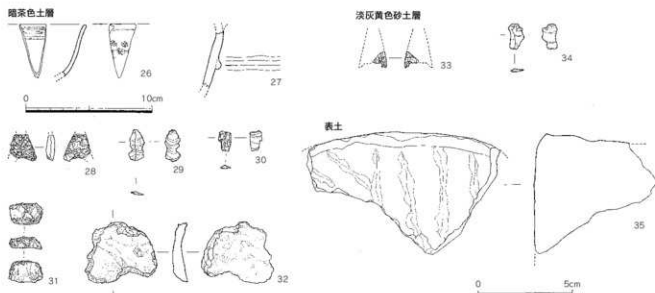


Fig. 55 長浦遺跡第4次調査各層出土遺物実測図① (1/2、26・27は1/3)

以下の砂粒・微細な白雲母をやや含む。焼成は良好で、色調は暗橙色を呈す。

4SX027 出土遺物 (Fig. 53)

土師質土器

蓋のつまみ (12) 残存高1.5cm。胎土は0.5mm以下の白色砂粒・微細な白雲母をわずかに含む。焼成は良好で、色調は断面は黄橙色、内外面は橙褐色～暗褐色を呈す。

瓦質土器

鉢×甕 (13) 外面はヨコナデを施し、上位にスタンプを施す。胎土は0.5mm以下の白色砂粒・微細な白雲母をやや含む。焼成はやや良好。色調は断面が黄色、内外面は黄色～黒色を呈す。

4SX034 出土遺物 (Fig. 53)

石製品

スポール転用スクレーパー (18) 表皮が残るスポールを転用して刃をつけてスクレーパーとしている。長さ4.35cm、幅2.8cm、厚さ1.2cm。黒曜石製。

4SX036 出土遺物 (Fig. 53)

土製品

袋状製品 (14) 残存長2.7cm、残存幅1.9cm、高さ0.35cm。器壁は0.3～0.4cm。外面は指頭でナデで調整し、端部はヘラで整形している。胎土は0.5mm以下の白色砂粒・微細な白雲母をわずかに含む。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈す。

4SX038 出土遺物 (Fig. 53)

石製品

スポール (19) 長さ3.3cm、幅1.15cm、厚さ1.2cm。黒曜石製。表皮が残る。

攪乱

4SX006 出土遺物 (Fig. 54)

国産陶器

皿×平鉢 (20) 復元口径18.0cm、器高3.5cm、復元底径10.0cm。内外を回転ナデで仕上げ、施釉する。素地は灰色で、0.1～3mmの白色砂を多く含む、やや粗い印象を受ける。釉は透明度は低いものの光沢が少しある褐色釉である。焼成は良好で、硬く焼きしまる。

挿鉢 (21) 口縁部の破片である。残存高 5.2cm。内面に櫛目を施し、褐色の釉を薄く全面に施軸する。胎土は 1mm 大の白色砂粒・茶色粒を含む。焼成は良好で硬質に仕上がる。

肥前系磁器

染付湯呑 (22) 復元口径 6.8cm、残存高 4.6cm。素地は白色で密である。釉は光沢度の高い透明釉で、内外面に薄く施軸する。

土製品

土管 (23) 復元口径 25.0cm、残存長 8.9cm。接続部の内径は 20cm 前後で、円筒部の内径は 12cm 程度とみられる。胎土は 3mm 以下の白色砂・茶色粒をやや多く含むが密である。焼成は良好で、色調は薄茶色を呈す。なお、口縁部には黒色の付着物がある。

石製品

薄板 (24) 黒灰色の粘板岩製の薄板である。端部は全て割れている。残存長 10.5cm、残存幅 3.5cm、厚さは 0.15cm。用途は不明。

4SX028 出土遺物 (Fig. 54)

石製品

砥石 (25) 表裏 2 面を研ぎ面として使用しているが、端部は全面割れている。残存長 9.0cm、残存幅 5.2cm、厚さ 0.85～1.9cm。砂岩製。

各層出土遺物

暗茶色土層出土遺物 (Fig. 55)

肥前系磁器

染付椀 (26) 残存高 4.2cm。素地は白色で密である。釉は光沢度の高い透明釉で、内外面に薄く施軸する。

瓦質土器

壺か (27) 突帯をもつ壺の胴部とみられる。図示したものの天地は判然としない。残存高 4.7cm。外面上位に把手添付痕のような表面の荒れがみられる。胎土は 1mm 以下の白色砂を含むが、精良で密。焼成は良好で、色調は灰色～淡灰色を呈す。

石製品

鎌 (28) 残存長 1.4cm、残存幅 1.4cm、厚さ 0.4cm。黒曜石製。

剥片 (29) 長さ 1.65cm、幅 0.8cm、厚さ 0.1cm。黒曜石製。

細石刃 (30) 長さ 1.05cm、幅 0.65cm、厚さ 0.2cm。黒曜石製。

細石刃核打面再生剥片 (31) 長さ 1.75cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm。黒曜石製。

スクレーパー (32) 一部に刃をつけている。長さ 3.8cm、幅 3.25cm、厚さ 0.6cm。黒曜石製。パティナが進んでいる。

淡灰黄色砂土層出土遺物 (Fig. 55)

石製品

鎌 (33) 鎌の基部の欠片である。残存長 0.9cm、残存幅 0.55cm。黒曜石製。

剥片 (34) 長さ 1.3cm、幅 0.75cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。

表土出土遺物 (Fig. 55)

石製品

石臼 (35) 表面に摺り目を残す。6.5×10.2×6.4cm の大きさで残存する。火山岩製で、暗めの灰色を呈す。

暗橙色砂質土層



暗紫色粘土層

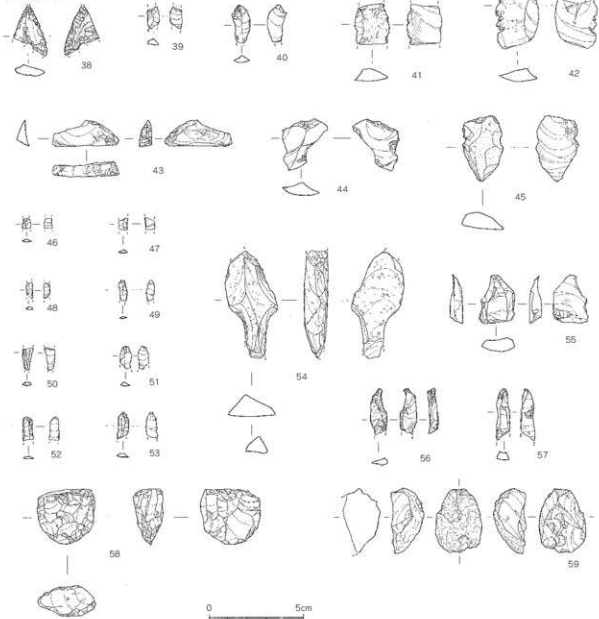


Fig. 56 長浦遺跡第4次調査各層出土遺物実測図② (1/2)

暗橙色砂質土層出土遺物 (Fig. 56)

石製品

鏃 (36) 残存長1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、安山岩製。

細石刃 (37) 下部が欠損する。残存長1.0cm、幅0.5cm、厚さ0.1cm、黒曜石製。

暗紫色粘土層出土遺物 (Fig. 56)

淡灰黄色粘土層

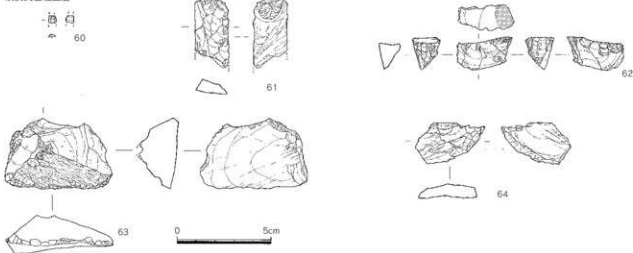


Fig. 57 長浦遺跡第4次調査各層出土遺物実測図③ (1/2)

石製品

鎌 (38) 上下端を欠す。残存長 2.6cm、幅 1.6cm、厚さ 0.5cm。黒曜石製。なお、この鎌の出土経緯から暗橙色砂質土層に帰属するのが妥当と調査時に判断している。

剥片×砂片 (39) 上下端を欠す。残存長 1.2cm、幅 0.6cm、厚さ 0.3cm。黒曜石製。

剥片 (40～45) 40は、下端を欠す。残存長 2.1cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm。黒曜石製。暗灰色を呈す。姫島産か。41は、上下端を欠す。残存長 2.1cm、幅 1.8cm、厚さ 0.6cm。黒曜石製。表皮が残る。42は、下端を欠す。残存長 2.7cm、幅 2.2cm、厚さ 1.2cm。黒曜石製。表皮が残る。43は、横割ぎの横長剥片で、長さ 3.55cm、幅 1.5cm、厚さ 0.6cm。黒曜石製。used-flake である。44は、長さ 2.6cm、幅 2.3cm、厚さ 0.7cm。黒曜石製。右図左端に図示するように微細剥離あり。45は、長さ 3.5cm、幅 2.2cm、厚さ 0.8cm。黒曜石製。表皮が残る。打面は欠す。

細石刃 (46～53) 46は、上下端を欠す。残存長 0.5cm、幅 0.4cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。47は、上下端を欠す。残存長 0.7cm、幅 0.5cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。右図左側に微細剥離あり。48は、上下端を欠す。残存長 0.9cm、幅 0.3cm、厚さ 0.2cm。黒曜石製。右図右側に微細剥離あり。49は、下端を欠す。残存長 1.1cm、幅 0.4cm、厚さ 0.1cm。黒曜石製。50は、上下端を欠す。残存長 1.1cm、幅 0.6cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。51は、下端を欠す。残存長 1.2cm、幅 0.6cm、厚さ 0.2cm。黒曜石製。52は、下端を欠す。残存長 1.3cm、幅 0.5cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。左図左側に微細剥離あり。53は、下端を欠す。残存長 1.35cm、幅 0.55cm、厚さ 0.15cm。黒曜石製。

剥片尖頭器 (54) 残存長 5.65cm、幅 2.6cm、厚さ 1.1cm。先端が折れているが、折れた部分も著しく風化している。安山岩製。

ナイフ形石器 (55) 長さ 2.55cm、幅 1.8cm、厚さ 0.7cm。黒曜石製。今峠型に類する剥離技術を素材とする剥片。後期旧石器時代のナイフである。

スポール (56・57) 56は、残存長 2.45cm、幅 0.85cm、厚さ 0.4cm。黒曜石製。表皮が残る。57は、下端を欠す残存長 2.7cm、幅 0.7cm、厚さ 0.4cm。黒曜石製。左図の右側面はパティナが進んだ古い面が残る。端部を欠くグレーバースポールか。

細石刃核 (58) 長さ 2.9cm、幅 3.0cm、厚さ 1.45cm。針尾島産黒曜石製。舟底形(楔形)。原石面も残る。

石核 (59) 長さ 3.4cm、幅 2.5cm、厚さ 1.7cm。黒曜石製。

淡灰黄色粘土層出土遺物 (Fig. 57)

石製品

細石刃 (60) 上下端を欠す。残存長 0.4cm、幅 0.4cm、厚さ 0.1cm。黒曜石製。

剥片 (61) 下端を欠す。残存長 3.6cm、幅 1.7cm、厚さ 0.65cm。黒曜石製。前面にバティナが進んだ古い面あり二重バティナとなっている。背面上端打面部に微細刻線あり。なお、調査時の所見では、上層 (暗紫色粘土層) に帰属する可能性あり。

打面再生剥片 (64) 長さ 3.65cm、幅 2.2cm、厚さ 0.65cm。安山岩製。なお、この遺物は調査時に淡灰黄色粘土層あるいはそれ以下の層から出土したことを確実に確認している。

細石刃核 (62) 長さ 1.7cm、幅 2.9cm、厚さ 1.3cm。黒曜石製。打面上部を磨いている可能性あり。船野型細石刃核 (舟形細石刃核) で、杉原敏之氏によれば、東九州には多いが西九州・北九州では 10 点ほどしか出土例がなく、福岡県内では福岡市有田遺跡第 178 次調査と併せて 2 例目の事例とのこと。なお、調査時の所見では、上層 (暗紫色粘土層) に帰属する可能性あり。

スクレーパー (63) 長さ 5.7cm、幅 3.7cm、残存厚 2.0cm。安山岩製。片面のみ刃がつく。なお、この遺物も調査時に淡灰黄色粘土層あるいはそれ以下の層から出土したことを確実に確認している。

(5) 小結

調査地は、脊振山地から延びる丘陵の先端に位置している。一帯は丘陵に沿って遺跡が点在しており、近隣でも日焼遺跡・長浦遺跡において発掘調査が行われ、古代の官道跡や墳墓跡、中近世の集落跡など検出している。

本調査地でも、そうした遺構が検出される可能性が高いと予想していたが、直前まで建っていた建物に伴うとみられる造成により、遺構面が大きく削平されていた。遺構も現代の構造物等による掘乱が最も多かった。

そうした調査であったが、丘陵端部の西から東に向かって下る傾斜地を水平に切り下げたような削平が行われている状況にあったことから、阿蘇 4 火砕流による堆積物 (鳥栖ローム層・八女粘土層) が丘陵裾を覆うように堆積していることが確認された。またこのローム層を基準として、基盤層の堆積について確認することができた。特に調査区の西側に広がっている濃暗紫色粘土層については、その土質と層の上面に亀甲状の貫入 (クラック) が入る特徴から、これまでの佐野地区遺跡群においても脇道遺跡や長ヶ坪遺跡・カヤノ遺跡など (いずれも大佐野区) で検出されたものと同じ層と判断された。脇道遺跡では、貫入から縄文時代早期の遺物が出土しており、縄文時代の早い時期以前に形成された地層ということが推測されていたところであり、遺構と地層との関連を窺うことができればと期待の中、濃暗紫色粘土層の直上に堆積する暗紫色粘土層を中心に、縄文時代草創期の石器・土器 170 点以上まとまって検出された。濃暗紫色粘土層から出土した遺物はなく、確認できたものはいずれもその貫入に堆積している暗紫色粘土層等からのみであった。このことから、濃暗紫色粘土層は、縄文時代草創期以前の堆積ということが推測できるようになったことは成果であった。

縄文時代草創期の遺物出土は太宰府市内では初めてである。後期旧石器時代の石器が出土する水城跡でもこの時期に下るものはみられないようであり、空白期を埋める成果として注目される。石器群はとくに細石刃が多く見られた。この製作に伴う細石刃核やスポールも見つかっている。また鋸型石鏃や土器も微細な破片ながら数点出土している。

なお、調査を実施したところ、独立行政法人産業技術総合研究所による警固断層の調査が筑紫地区一帯で行われ、太宰府市内でも大佐野および向佐野で調査が行われた。発掘調査中、断層調査を担当した産業技術総合研究所の吾妻崇氏が現場に立ち寄られたが、向佐野 (日焼遺跡第 5 次調査地一帯の丘陵) で

断層確認調査を実施したところ花崗岩岩盤中に破砕帯が確認されたこと、その破砕帯の延長上に本調査区が当たる可能性について述べられた。このため、基盤層の堆積状況も含めて観察していただいたが、本調査区では花崗岩風化土とみられる層はトレンチ調査で確認したものの、花崗岩岩盤本体は確認できておらず、しかも観察した東西トレンチからは、断層（破砕帯）や液状化現象に伴う噴砂現象などは土層観察では確認できないということだった。記録として留めておく。

最後に、出土した石器の整理・分類については、福岡県教育庁文化財保護課の杉原敏之係長（元九州歴史資料館）に大変お世話になりました。記して感謝いたします。



Fig. 58 長浦遺跡第4次調査 遺構略測図 (1/200)

表16 長浦遺跡第4次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
1	4SK001	土坑		橙茶色粘土→暗橙茶色粘土			H2
2		溝×たまり		淡黄灰砂質土	2→3	近代以降か	H4
3		小穴群	北側の小穴は丸釘が出土。南の小穴からは板材が出土したが、この地盤は非常に締まっているので安定しているの で礎石ではないだろう			現代	H4
4		小穴群	攪乱。	バラス(クラッシュヤー ン)を含む		近現代	H3~4
5	4SB005	建物	穴の中に径5cm前後、 厚さ2~3cmの丸い川原 石がつまっている。			近現代	
6	4SX006	攪乱		バラス(クラッシュヤー ン)を含む		昭和後期	GH2
7		土坑		暗褐色土埋土			D3
8		攪乱		バラス(クラッシュヤー ン)を含む		現代	DE2~3
9		攪乱	小穴			現代	G4
10	4SB010	竪立柱建物	S-10aから土器出土	暗茶色土埋土	10→16	近現代	EG7~9
11	4SK011	土坑		淡灰色砂質土埋土			G5
12	4SX012	小穴群	近世陶磁器とob-fのみ 出土。				EF4~5
13	4SX013	小穴群				近代?	EF9
14	4SX014	小穴群					F9
15	4SB015	竪立柱建物	2×4間			近現代	CF7~8
16	4SK016	土坑		暗茶色土埋土	16→13	近代?	EF9
17		小穴					G8
18	4SX018	小穴群				近代?	D7~8
19	4SX019	小穴群		橙灰色土を主とする埋土			DE8
20							
21	4SD021	溝	遺物は8c~	暗茶色土埋土			DE7
22		小穴群		橙色土埋土			EF8
23		小穴群					F8
24		土坑		暗茶色土埋土			F8
25							
26		土坑群					F8
27	4SX027	小穴群					EF7
28	4SX028	攪乱		砥石出土			E8
29	4SK029	土坑	三和土で側面を固めた 箱型土坑。三和土の表 面は煤・炭が付着。	橙灰色~黄灰色土埋土		近代?	F8
30							
31		攪乱					FG7
32		攪乱					FG6~7
33		小穴				現代	G6
34	4SX034	小穴	ob-f出土				D5
35							
36	4SX036	小穴群					DE4~5
37		小穴群					CG~7
38	4SX038	土坑		橙色土埋土		現代	CG
暗茶色土層		人工層位	遺構検出時の人工層位				調査区全体
暗褐色砂質土層		堆積層				縄文草創期頃	
暗紫色粘土層		堆積層				後期旧石器~縄文草創期	
濃暗紫色粘土層		堆積層	上面が亀甲状にひび割れる層				
淡黄灰色粘土層		堆積層				後期旧石器	
淡黄灰色砂土層		堆積層					
暗茶色粗砂土層		堆積層					
カクラン							調査区全体
表土							調査区全体

表17 長浦遺跡第4次調査 出土遺物一覧表

本時期は、各項目に含まれる最終の出土遺物から判断したものである。実際は、遺構間の切り合い関係等の要素を加味する必要がある。

S-2		近代以降か
上	銅 銅片	
土	の 他 他土化木?	
S-3		
金	風 製 品 銅釘 (現代)	
S-4		
国	産 陶 銅片、瓶?、瓶×壺	
金	風 製 品 漆器	
S-5		
銅	製 銅片	
国	産 陶 銅片、漆器、瓶×平鉢	
銅	製 品 銅板(銅板岩製)	
銅	製 品 土管	
瓦	製 物 半瓦 (焼し瓦)	
石	製 品 漆板 (板板岩製)	
金	風 製 品 高田学校の学生服の金ボタン (板マーク)、不明製品	
土	の 他 土化木、種子の殻、ラム革靴の舌口、赤褐色の外壁材	
S-7		
土	製 品 銅片 (平たく成形)	
S-8		
国	産 陶 銅連名(印刷)、銅片(印刷)	
瓦	製 物 半瓦 (焼し瓦、近現代)	
S-9		
土	製 品 土板質の破片 (型押し)	
瓦	製 物 ヤメント瓦、半瓦 (焼し瓦)	
土	の 他 透明ガラス小瓶、石炭	
S-10a		
土	銅 銅片	
S-11		奈良~
銅	製 品 銅葉3	
石	製 品 黒曜石片	
S-12		
銅	製 品 銅板(足込み跡き取り)	
石	製 品 黒曜石片、銅片 (黒曜石)、鎌石刀 (黒曜石)	
S-13		
土	銅 銅片	
国	産 陶 銅地利	
S-14		
国	産 陶 銅葉	
S-16		
銅	製 品 銅葉 (大舟に印刷へテ有り)、環、蓋×坪	
銅	製 品 銅板(平定)、銅鎌具、石製杖入、杖入	
土	製 品 土器(漆器(高野石製))、漆杖具(内外にヨコハク、横付着)	
土	の 他 土 銅片、土器、壺	
S-17		
金	風 製 品 銅釘?	
土	の 他 他土塊か	
S-18		
土	銅 銅片、片	
土	銅 銅片	
S-19		
土	銅 銅片×銅、蓋3 (ミダキウ)、片	
金	風 製 品 銅製銅片	
S-21		遺物に?
銅	製 品 銅葉c、葉、片	
S-22		
土	銅 銅葉、片	
S-23		
銅	製 品 銅片	
国	産 陶 銅片	
S-24		
土	銅 銅片×銅 (ミダキウ)、片	
S-26		不明 (中世以降か)
土	銅 銅片	
S-27		
銅	製 品 銅環、片	
土	銅 銅片、銅鎌具、小瓶?	
土	製 品 土器(漆器のつまみ)	
瓦	製 品 銅片	
瓦	製 品 銅片 (焼し瓦)	
土	の 他 石炭	
S-28		
瓦	製 品 銅片、片	
石	製 品 銅板(砂岩)	

S-29		
土	銅 銅片	
銅	製 品 銅板(銅板岩製)	
土	の 他 「解眼水」と記されたガラス製目薬瓶 (銅板岩製)	
S-31		
土	銅 銅片	
国	産 陶 銅葉(葉?)	
瓦	製 物 銅半瓦 (焼し瓦)	
S-32		
銅	製 品 銅葉×高坪	
土	銅 銅片	
国	産 陶 銅片 (黒曜の鮮色表現した小物入れか?、花瓶)	
瓦	製 物 銅半瓦 (焼し瓦)	
土	の 他 土一玉	
S-33		現代
瓦	製 品 コングリート瓦	
S-34		
石	製 品 銅片(黒曜石)、スポール転用スクレーパー(黒曜石)	
S-36		
土	銅 銅片	
土	製 品 袋状に押し出した製品 (人物か)	
瓦	製 物 銅半瓦 (焼し瓦)	
S-37		
土	銅 銅片	
S-38		現代
銅	製 品 銅葉	
国	産 陶 銅高有付小皿 (現代)	
瓦	製 物 銅片か? (近現代のもの)	
石	製 品 銅スポール (裏皮有り、黒曜石)	
唯茶色土層		
銅	製 品 銅片、環か、蓋か、環c	
土	銅 銅片(a) (オト切り)、葉、片、蓋?、漆杖具	
瓦	製 品 銅片	
国	産 陶 銅葉(葉)	
白	銅板(銅片)	
銅	製 品 銅板(銅板岩製)、小瓶	
国	産 陶 銅片、瓶、小瓶×小形瓶、蓋、製×鉢 (高台あり)	
瓦	製 物 銅半瓦 (焼し瓦)、杖具、方、半瓦、製半瓦、半瓦(焼目)	
石	製 品 漆石×乾杖岩、乾石、銅片 (黒曜石)、片 (黒曜石)	
鐵	(黒曜石)、スクレーパー (黒曜石)	
銅	製 品 銅片打釘再生銅片 (黒曜石)	
金	風 製 品 銅製杖具	
土	の 他 石倉(円筒状)、ビーム、おはき(ガラス製)	
唯褐色砂土層		縄文
鐵	文 土 銅片	
石	製 品 銅片 (黒曜石、安山岩)、銅片 (黒曜石)、鐵 (安山岩)、鎌石刀 (黒曜石)	
唯褐色粘土層		最終旧石器時代
石	製 品 スポール (黒曜石)、銅片 (黒曜石、安山岩)、銅片尖頭器 (安山岩)、片 (黒曜石、安山岩)、鎌石刀核 (扁平型西海柱法・楔形鎌石刀核)、針尾鳥嘴黒曜石、鎌石刀 (黒曜石)、銅片(チップ、黒曜石)、ナイフ形石器 (黒曜石)、used-flake (鉄刺さ、黒曜石)、スポール (グリーンバースポール)	
土	の 他 銅石名層	
唯灰黄色粘土層		最終旧石器時代
石	製 品 銅片(二重バテナチ、黒曜石)、鎌石刀核 (扁平型、黒曜石)、片 (黒曜石、安山岩)、銅片 (黒曜石、安山岩)、鎌石刀片 (黒曜石)、スクレーパー (安山岩)、打面西生銅片 (安山岩)	
唯灰黄色砂土層		
石	製 品 銅片 (黒曜石)、銅片 (黒曜石)、蓋 (黒曜石)	
唯茶色銅砂土層		
石	製 品 銅片 (黒曜石)	
唯瓦		
国	産 陶 銅片、銅片、片(瓦具系陶に類似)	
国	産 陶 銅片	
瓦	製 物 銅半瓦 (焼し瓦)	
土	の 他 土管	
瓦上		
銅	製 品 銅環c	
国	産 陶 銅葉	
国	産 陶 銅片、酒瓶、湯鉢、茶碗	
土	製 品 銅片	
瓦	製 物 銅半瓦	
石	製 品 石白	
土	の 他 スレート、瓦	

表18-1 長浦遺跡第4次調査 石器・土器採り上げ一覧表(1)

採り上げ番号	Fig番号	出土品 (石器)	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	出土地点(日本標準系)			層位・出土遺構 (推定出土層位)	備考
							X座標	Y座標	標高m		
001	56 56	スモール (表皮)	黒曜石	2.45*	0.85	0.4	5641014	-45657.70	35.86	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
002		削片	黒曜石				5640593	-45657.17	35.98	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
003	56 54	削片(尖頭器)	安山岩	5.85*	2.8	1.1	5640349	-45656.54	36.00	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
004		片	黒曜石				5640512	-45656.42	35.97	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
005		片	黒曜石				5640421	-45656.74	35.98	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
006		鹿×石痕					5640440	-45656.96	35.99	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
007		削片	安山岩				5640443	-45657.18	35.98	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
008		片	黒曜石				5640464	-45657.14	36.00	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
009		片	黒曜石				5640532	-45658.98	35.99	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。 Usep-Takaか
010		削片	黒曜石				5640536	-45656.41	35.98	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
011		片(表皮)	安山岩				5640371	-45656.77	35.98	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
012		片	黒曜石				5641000	-45658.35	35.51	淡茶色粗砂土	淡茶色粗砂土から出土していたが、埋藏色粘土層が深く入っているところが近く見つかったおり、上層からの沈み込みの可能性も考えらる必要はある。
013		片	安山岩				5640932	-45657.32	35.89	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
014		片(表皮)	黒曜石				5640835	-45657.17	35.89	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
015		削片	黒曜石				5640486	-45661.11	36.04	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
016		片(表皮)	黒曜石				5640217	-45659.50	36.03	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
017		片(表皮)	黒曜石				5640173	-45660.25	36.00	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
018		片	黒曜石				5640245	-45660.14	36.02	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
019		削片	黒曜石				5640199	-45660.73	36.01	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
020		片	黒曜石				5639971	-45658.59	37.03	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
021		片	黒曜石				5639957	-45658.69	36.02	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
022	56 58	燧石刃状 種石製、西掘 技法・埋型燧石 刃状	黒曜石 (針尾鳥居)	2.9	3.0	1.56	5639710	-45660.20	36.08	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
023	56 52	燧石刃	黒曜石	1.3*	0.5	0.15	5639782	-45660.78	36.13	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
024	57 61	削片	黒曜石	3.6*	1.7	0.65	5639554	-45657.80	36.04	淡灰黄色粘土	淡灰黄色粘土から出土したが、まだ上層からの沈み込みの可能性も考えらる必要はある。 二重パテナ。
025	57 62	燧石刃状 (船野型)	黒曜石	1.7	2.9	1.3	5639607	-45657.37	36.02	淡灰黄色粘土	淡灰黄色粘土から出土したが、まだ上層からの沈み込みの可能性も考えらる必要はある。
026		片	黒曜石				5639972	-45658.36	36.00	淡灰黄色粘土	淡灰黄色粘土から出土したが、まだ上層からの沈み込みの可能性も考えらる必要はある。
027		削片	黒曜石				5640432	-45655.52	35.98	埋藏色粘土	
028	55 29	削片(チップ)	黒曜石	1.65	0.8	0.1	5640715	-45659.52	35.94	埋藏色粘土	
029		削片	黒曜石				5640748	-45657.90	35.97	埋藏色粘土	
030		削片	黒曜石				5640788	-45657.76	35.92	埋藏色粘土	
031		削片	黒曜石				5640977	-45657.80	35.93	埋藏色粘土	
032	56 41	削片(表皮)	黒曜石	2.1*	1.8	0.6	5641050	-45655.95	35.90	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
033		削片(チップ)	黒曜石				5640985	-45657.51	35.87	埋藏色粘土	実験、埋藏色粘土より出土確認。
034		削片	安山岩				5641051	-45657.11	35.90	埋藏色粘土	
035		削片(表皮)	黒曜石				5641013	-45657.07	35.88	埋藏色粘土	
036		片	安山岩				5640886	-45658.08	35.90	埋藏色粘土	
037		片	黒曜石				5640840	-45658.78	35.86	埋藏色粘土	
038		削片	安山岩				5641045	-45657.24	35.84	埋藏色粘土	
039		片(表皮)	黒曜石				5640841	-45658.66	35.84	埋藏色粘土	
040		片	黒曜石				5641093	-45656.69	35.85	埋藏色粘土	
041		片	安山岩				5640918	-45657.42	35.83	埋藏色粘土	
042		削片(表皮)	黒曜石				5640933	-45657.59	35.83	埋藏色粘土	
043		削片	安山岩				5641010	-45657.04	35.80	埋藏色粘土	
044		片	安山岩				5640986	-45655.54	35.84	埋藏色粘土	
045		片	黒曜石				5641058	-45655.88	35.86	埋藏色粘土	
046		片	黒曜石				5640938	-45655.59	35.86	埋藏色粘土	
047	56 45	削片(表皮)	黒曜石	3.5	2.2	0.8	5641046	-45656.90	35.79	埋藏色粘土	行面は欠いている
048	56 59	石核	黒曜石	3.4	2.5	1.7	5641013	-45655.98	35.83	埋藏色粘土	
049		削片	安山岩				5641056	-45656.52	35.80	埋藏色粘土	
050	56 55	ナイフ状石器	黒曜石	2.55	1.8	0.7	5640840	-45656.35	35.88	埋藏色粘土	今神奈製法
051		片	黒曜石				5640873	-45660.72	35.92	淡灰黄色砂質土	濃埋藏色粘土との境で出土
052		片	黒曜石				5640474	-45661.04	35.98	淡灰黄色砂質土	濃埋藏色粘土との境で出土
053		片(表皮)	黒曜石				5640630	-45660.25	35.94	淡灰黄色砂質土	濃埋藏色粘土との境で出土
054	55 34	削片(チップ)	黒曜石	1.3	0.75	0.15	5640726	-45660.88	35.93	淡灰黄色砂質土	濃埋藏色粘土との境で出土
055		片(表皮)	黒曜石				5640659	-45660.53	35.95	淡灰黄色砂質土	濃埋藏色粘土との境で出土
056	56 53	燧石刃	黒曜石	1.35*	0.55	0.15	5640781	-45659.20	35.85	埋藏色粘土	
057		フラスチップ	黒曜石				5640636	-45664.26	35.85	淡灰黄色砂質土	埋蔵の層の厚し
058	56 43	削片(埋刺ぎ)	黒曜石	3.55	1.5	0.6	5640744	-45659.67	35.88	埋藏色粘土	Usep-Taka
059		削片	黒曜石				5640675	-45659.77	35.89	埋藏色粘土	
060		片	黒曜石				5640873	-45659.27	35.75	埋藏色粘土	
061		片	ハラス				5640588	-45659.55	35.92	埋藏色粘土	
062	56 49	燧石刃	黒曜石	1.1*	0.4	0.1	5640635	-45660.30	35.84	埋藏色粘土	
063		片	安山岩				5640638	-45659.38	35.87	埋藏色粘土	
064		削片	安山岩				5640637	-45659.81	35.85	埋藏色粘土	
065		片(表皮)	黒曜石				5640664	-45659.55	35.84	埋藏色粘土	

表18-2 長浦遺跡第4次調査 石器・土器採り上げ一覧表(2)

採上 番号	Fig番号	出土品	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	出土地点(日本標準系II系)			層位・出土遺構 (確定出土層位)	備考	
							X座標	Y座標	標高m			
066		剥片	黒曜石				5640474	-45659.31	35.94	暗紫色粘土		
067		片	黒曜石				5640608	-45659.18	35.87	暗紫色粘土		
068		剥片(表皮)	黒曜石				5640725	-45659.61	35.84	暗紫色粘土		
069		剥片(表皮)	黒曜石				5640690	-45659.73	35.84	暗紫色粘土		
070		片(表皮)	黒曜石				5640375	-45656.44	35.97	暗紫色粘土		
071		片	黒曜石				5640723	-45656.88	35.93	暗紫色粘土		
072		剥片	黒曜石				5640596	-45656.64	35.95	暗紫色粘土		
073		片	安山岩				5640730	-45659.21	35.79	暗紫色粘土		
074		片	黒曜石				5640742	-45656.22	35.90	暗紫色粘土		
075		剥片	黒曜石				5640385	-45657.25	35.98	暗紫色粘土		
076		片	安山岩				5640361	-45657.46	35.98	暗紫色粘土		
077		剥片	黒曜石				5640760	-45659.12	35.76	暗紫色粘土		
078	56	48	楕石刃 (傷痕剥離あり)	黒曜石	0.9*	0.3	0.2	5640407	-45657.01	35.95	暗紫色粘土	
079		片(表皮)	黒曜石				5640374	-45656.45	35.96	暗紫色粘土		
080	56	46	楕石刃 (傷痕剥離あり)	黒曜石	0.5*	0.4	0.15	5640402	-45658.81	35.97	暗紫色粘土	
081		片	安山岩				5640606	-45657.15	35.92	暗紫色粘土		
082	56	42	剥片(表皮)	黒曜石	2.7*	2.2	1.2	5640755	-45659.26	35.75	暗紫色粘土	
083		片(表皮)	黒曜石				5640687	-45659.26	35.74	暗紫色粘土		
084		片(表皮)	黒曜石				5640684	-45657.01	35.86	暗紫色粘土		
085		片(表皮)	黒曜石				5640567	-45657.74	35.93	暗紫色粘土	中央の暗紫色粘土のたまり	
086		剥片(表皮)	黒曜石				5640685	-45657.10	35.83	暗紫色粘土		
087		片(表皮)	黒曜石				5640706	-45657.27	35.83	暗紫色粘土		
088	56	44	剥片 (傷痕剥離あり)	黒曜石	2.6	2.3	0.7	5640640	-45656.98	35.80	暗紫色粘土	used-fake
089		片	安山岩				5640660	-45657.17	35.81	暗紫色粘土		
090		片(チップ)	黒曜石				5640693	-45657.32	35.81	暗紫色粘土		
091		剥片	黒曜石				5640459	-45657.47	35.88	暗紫色粘土	二重パティナ	
092	56	47	楕石刃	黒曜石	0.7*	0.5	0.15	5640661	-45658.36	35.84	暗紫色粘土	
093		片	黒曜石				5639645	-45657.00	35.97	淡灰黄色粘土		
094		剥片	黒曜石				5639632	-45656.34	35.93	淡灰黄色粘土		
095		剥片	安山岩				5639660	-45656.42	35.94	淡灰黄色粘土		
096		剥片 (割傷痕あり)	黒曜石	2.1*	1.0	0.3	5640533	-45656.40	35.89	暗紫色粘土		
097	56	40	片	黒曜石			5640565	-45656.48	35.87	暗紫色粘土		
098		片	黒曜石				5640528	-45656.60	35.87	暗紫色粘土		
099		片	安山岩				5640536	-45656.67	35.87	暗紫色粘土		
100	56	50	楕石刃	黒曜石	1.1*	0.6	0.15	5640470	-45656.68	35.86	暗紫色粘土	
101		剥片	黒曜石				5640606	-45658.24	35.75	暗紫色粘土		
102		片(表皮)	安山岩				5640565	-45656.79	35.86	暗紫色粘土		
103		片	黒曜石				5640853	-45656.69	35.92	暗褐色砂質土		
104		片	黒曜石				5640444	-45656.60	35.86	暗紫色粘土		
105		片	黒曜石				5640453	-45657.80	35.77	暗紫色粘土		
106		片	安山岩				5640520	-45656.40	35.88	暗褐色砂質土		
107	56	57	スホール (グレーバース ホール)	黒曜石	2.7*	0.7	0.4	5640377	-45657.80	35.85	暗紫色粘土	二重パティナ
108		片	安山岩				5640593	-45656.45	35.84	暗紫色粘土		
109		片	安山岩				5640558	-45656.90	35.81	暗紫色粘土		
110		片	黒曜石				5640686	-45659.06	35.69	暗紫色粘土		
111		片	安山岩				5640223	-45656.79	35.97	暗紫色粘土		
112		片	安山岩				5640682	-45658.51	35.80	暗褐色砂質土		
113		片	黒曜石				5640529	-45657.44	35.93	暗褐色砂質土		
114		土器					5640643	-45658.73	35.80	暗褐色砂質土	土器片	
115		片(表皮)	黒曜石				5640188	-45657.43	35.87	暗紫色粘土	二重パティナ	
116		片	黒曜石				5640525	-45658.44	35.87	暗紫色粘土		
117		片	黒曜石				5640751	-45659.35	35.73	暗紫色粘土		
118		なし	-				5640524	-45658.70	35.84	暗紫色粘土	面に泥しか入っていなかった	
119		片	黒曜石				5640535	-45658.53	35.83	暗紫色粘土		
120		剥片	安山岩				5640772	-45658.21	35.83	暗紫色粘土		
121		剥片	黒曜石				5640632	-45657.49	35.93	暗褐色砂質土		
122		剥片	黒曜石				5640217	-45657.93	35.96	暗紫色粘土		
123		片	安山岩				5640698	-45657.83	35.91	暗褐色砂質土		
124		片(表皮)	黒曜石				5640128	-45658.51	36.00	暗紫色粘土		
125		剥片(表皮)	黒曜石				5640483	-45658.31	35.89	暗褐色砂質土		
126	56	38	楕	黒曜石	2.8*	1.6	0.5	5640936	-45656.47	35.86	暗褐色砂質土	後の地山土層層より付近の暗紫色粘土としたものは暗褐色砂質土とみられる。
127		片	黒曜石				5640275	-45660.16	35.99	暗紫色粘土		
128		片(表皮)	黒曜石				5640230	-45659.58	35.98	暗紫色粘土		
129		片	黒曜石				5640253	-45661.64	35.96	暗紫色粘土		
130	56	51	楕石刃	黒曜石	1.2*	0.6	0.2	5640055	-45660.61	35.88	暗紫色粘土	

表18-3 長浦遺跡第4次調査 石器・土器採り上げ一覧表(3)

採上番号	Fig番号	出土品	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	出土地点(日本産標準Ⅱ系)			層位・出土遺構 (確定出土層位)	備考				
							X座標	Y座標	標高m						
131		割片	黒曜石				56406 70	-45657.83	35.83	埋蔵色砂質土					
132		割片	黒曜石				56401 54	-45659.24	35.98	埋蔵色粘土					
133		割片	安山岩				56404 55	-45658.78	35.90	埋蔵色粘土					
134		土器	—				56407 55	-45657.77	35.79	埋蔵色砂質土	土器片				
135		土器	—				56406 67	-45657.90	35.82	埋蔵色砂質土	土器(大きな破片)				
136		片	安山岩				56400 70	-45660.86	35.97	埋蔵色粘土					
137		片	黒曜石				56401 21	-45659.43	35.95	埋蔵色粘土					
138		燧石刃	黒曜石				56401 16	-45659.45	35.94	埋蔵色粘土					
139		土器	—				56406 67	-45657.78	35.77	埋蔵色砂質土					
140		片	黒曜石				56402 53	-45659.58	35.84	埋蔵色粘土					
141		片(チップ)	安山岩				56401 78	-45661.13	35.84	埋蔵色粘土					
142		土器	土器				56406 10	-45656.70	35.81	埋蔵色粘土	これは遺構を踏んで通った(1)した後に掘り下げたものなので、掘りも費して取らなければならない。				
143	57	63	スクレーパー	安山岩	5.7	3.7	2.0*	56398 17	-45655.95	36.01	淡灰黄色粘土				
144			片	黒曜石			56400 78	-45660.81	36.01	埋蔵色粘土					
145	55	33	鏃	黒曜石	0.9*	0.55*		56401 75	-45662.54	36.02	淡灰黄色砂質土				
146			片(表皮)	黒曜石			56397 83	-45661.12	36.17	埋蔵色粘土					
147			片	黒曜石			56397 42	-45661.17	36.15	埋蔵色粘土					
148			片	黒曜石			56407 91	-45658.38	35.94	埋蔵色粘土	遺物洗浄まではしたが所在不明				
149	56	36	鏃	安山岩	1.8*	1.4	0.35	56407 85	-45657.71	35.77	埋蔵色砂質土				
150			片(表皮)	黒曜石			56405 95	-45658.42	35.94	埋蔵色砂質土					
151			片(表皮)	黒曜石			56405 85	-45658.78	35.86	埋蔵色粘土					
152			片	安山岩			56404 94	-45660.40	35.99	埋蔵色粘土	埋蔵色砂質土の貫入より出土。土は埋蔵色粘土				
153			割片	黒曜石			56406 67	-45655.45	35.95	淡灰黄色粘土	底を削いたり、掘り込んだところまで、出土層位には疑われない。				
154			片	安山岩			56407 77	-45657.78	35.74	埋蔵色砂質土					
155			砕片	黒曜石			56407 89	-45659.21	35.78	埋蔵色粘土					
156			片	黒曜石			56405 86	-45658.07	35.78	埋蔵色砂質土					
157	56	37	燧石刃	黒曜石	1.0*	0.5	0.1	56405 92	-45658.41	35.76	埋蔵色砂質土				
158			土器×石	—			56405 86	-45657.46	35.88	埋蔵色砂質土					
159			片(表皮)	黒曜石			56407 94	-45658.87	35.70	埋蔵色粘土					
160			土器	—			56407 79	-45659.83	35.78	埋蔵色粘土	埋蔵色粘土までok				
161			割片	黒曜石			56405 26	-45658.99	35.93	埋蔵色砂質土					
162			片(表皮)	黒曜石			56405 17	-45658.75	35.83	埋蔵色粘土					
163			片	黒曜石			56400 71	-45658.95	35.95	埋蔵色粘土					
164			片	安山岩			56406 39	-45658.85	35.71	埋蔵色粘土					
165			片	安山岩			56406 99	-45659.06	36.80	埋蔵色粘土					
166			燧石	安山岩			56406 42	-45659.00	35.76	埋蔵色粘土	首周部				
167			割片	黒曜石			56404 12	-45660.79	36.00	淡灰黄色砂質土					
168	57	80	燧石刃	黒曜石	0.4*	0.4	0.1	56402 11	-45656.30	35.98	淡灰黄色粘土	表面(最上層)より出土。			
169			片	安山岩			56398 96	-45658.43	36.02	淡灰黄色粘土	表面(最上層)より出土。				
170	57	64	打面再生割片	安山岩	3.65	2.2	0.65	56399 38	-45657.42	35.99	淡灰黄色粘土	下層にある皮を含む淡灰黄色粘土との間にある層からの出土の可能性あり、層位にんだ可能性は十分ある。			
171			片(表皮)	黒曜石			56403 38	-45657.79	35.87	埋蔵色粘土	掘り残しの埋蔵色粘土から出土				
172	56	39	割片×砕片	黒曜石	1.2*	0.6	0.3	56403 96	-45657.17	35.94	埋蔵色粘土	掘り残しの埋蔵色粘土から出土			
173			片	黒曜石			—	—	—	S-11					
174	53	17	割片	黒曜石	3.7	1.65	0.45	—	—	—	S-12				
175			片	黒曜石			—	—	—	—	S-12				
176	53	16	燧石刃	黒曜石	1.7	0.7	0.2	—	—	—	—	S-12			
177	53	15	燧石刃	黒曜石	0.8	0.55	0.1	—	—	—	—	—	S-12		
178	53	18	スモール転用スクレーパー	黒曜石	4.35	2.8	1.2	—	—	—	—	—	S-34		
179			割片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	S-34		
180	53	19	スモール(表皮あり)	黒曜石	3.3	1.15	1.2	—	—	—	—	—	S-38		
181			片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
182			片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
183			片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
184	55	28	鏃	黒曜石	1.4*	1.4*	0.4	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
185			片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
186	55	32	スクレーパー	黒曜石	3.8	3.25	0.6	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
187			燧石	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
188	55	31	燧石刃様打面再生割片	黒曜石	1.75	1.2	0.7	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
189			片	黒曜石			—	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	
190	55	30	燧石刃	黒曜石	1.05	0.65	0.2	—	—	—	—	—	—	埋蔵色土	Z(埋蔵色土)

12、長浦遺跡第5次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市向佐野1丁目87番、88番、96番で、区画整理以前の向佐野集落の北端に位置する。2003(平成15)年頃から文化財の取り扱いについての問合せが始まり、東側の中段の土地である96番については、2005(平成17)年7月5日に確認調査を実施し、遺構や遺物は確認されなかった。その後目立った動きはなかったが、2013(平成25)年から具体的な調整が行われるようになった。2013(平成25)年2月12日、確認調査を行い、深さ0.55m付近で遺構が確認された。宅地造成の予定で遺構が破壊されることは明確であったため、調査することとなった。本来調査は原因者負担で行われる条件であったが、佐野土地区画整理地内での事業ということで、市費で実施された。調査は2014(平成26)年1月9日～2014(平成26)年3月17日に実施した。調査対象面積1526.52㎡であったが、重機による表土剥ぎで、上面が削平により遺構が確認できなかった。そのため、遺構確認を行い、遺構が確認できた西側を中心に調査を行った。調査面積357.88㎡である。調査は主に中村茂央が担当した。なお、現場の調査・記録が不十分なところもあり、若干不明瞭な部分がある。

(2) 基本層位

調査地は、東側の市道から高さ約1.8mほどで中段があり、さらに約2.2mで旧宅地面がある。現地表面から真砂土(厚さ0.15m)、暗茶色土(厚さ0.15m)、茶色土(厚さ0.2m)で、地表から深さ0.5mで橙色土の地山に達し遺構が確認できる。これら表土は近現代のもので、耕作土や包含層などは全く残っておらず、宅地造成時に大きく削平されていることは明白であった。

東側の中段の土地である96番については、東に向かってなだらかに下がる傾斜地で、東端はほぼ道路と同じレベルとなるのだが、現代の真砂土や礫砂により盛土され、道路より1.8m程高い土地を造り出している。

(3) 検出遺構

土坑

5SK001 (Fig. 61)

径1.5～1.75m、深さ0.3m前後の楕円形土坑である。SK020の埋土の一部を切り込んで掘削されている。埋土は2層に分層でき、上層は縮まりの弱い茶褐色土、下層には粘質でやや固くしまった淡黄色土が堆積する。特に下層の埋土は地山である灰白色土に似ている。上面を大きく削平されているものと推測され、明確に言い難いが、貯蔵穴など弥生時代の遺構である可能性が考えられる。

5SK002

大きさ1.18×1.24m、深さ0.2mの方形土坑である。埋土は縮まりのあまりない茶褐色土の単層である。

5SK020 (Fig. 61)

南側の一部がSK001によって切られている。残存長2.1m、幅1.45m、深さ0.35m前後の隅丸長方形土坑である。埋土は2層に分層でき、上層は地山(橙色土と灰白色土)のブロックを多量に含んだ暗灰色土、下層は粘質でやや縮まりのある灰褐色土で、上層と同じく地山のブロックを多量に含む。埋土から遺物は出土していない。

5SK025 (Fig. 61)

直径2.0～2.1m、深さ0.5m前後、断面逆台形の円形土坑である。埋土は2層に分けられ、上層は明褐色土、下層は赤褐色土で、最初のひと下げについては、暗褐色土で遺物を取り上げている。どちらも縮まりがなくやわらかい土である。遺構の側面・底面には径約10cmの浅い凹みが無数にみられる。遺

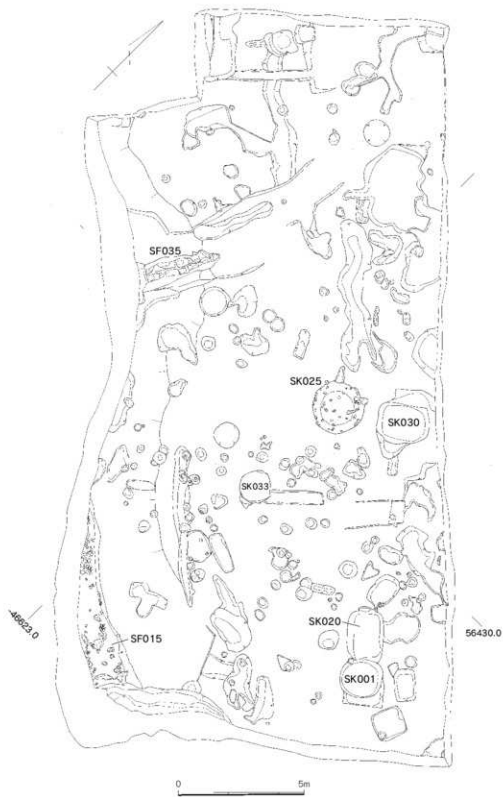


Fig. 59 長浦遺跡第5次調査 遺構全体図 (1/150)

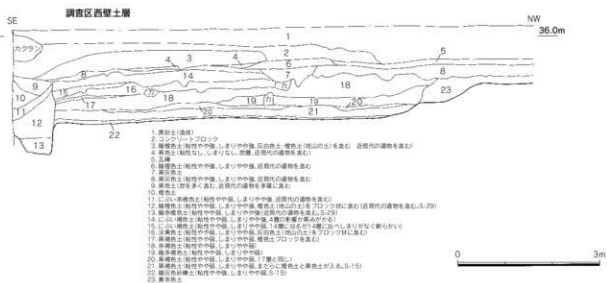
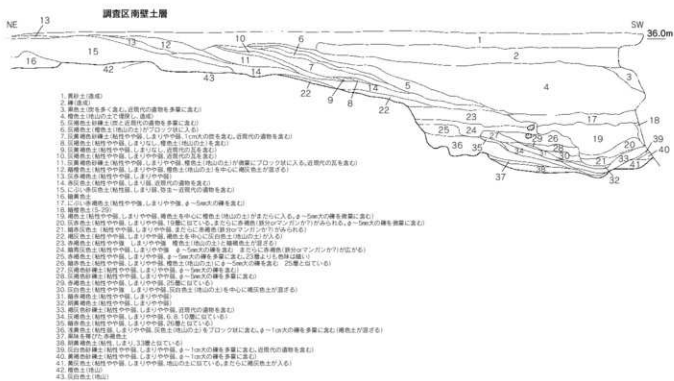


Fig. 60 長浦遺跡第5次調査区土層実測図(1/80)

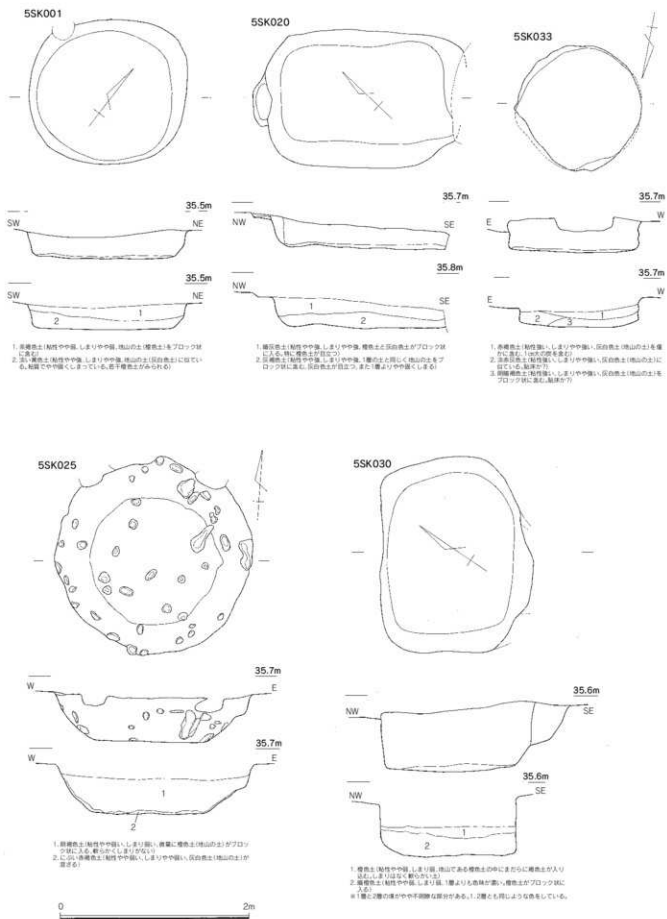


Fig. 61 長浦遺跡第5次調査 土坑実測図 (1/40)

物が少なく明確に言い切れないが、弥生時代の土坑の可能性と底面にある無数の凹みから近現代の植木痕の可能性が考えられる。

5SK030 (Fig. 61)

大きさ2.05m×1.5m、深さ0.65mの楕円形土坑である。埋土は上層が橙色土と下層が暗橙色土の2層に分けられ、どちらも締まりがなく軟らかい。また、上層と下層の境が明瞭ではなく、どちらも橙色土を基本に褐色土が混ざる地山由来の埋土である。遺物は確認しておらず遺構の性格や時期は不明である。

5SK033 (Fig. 61)

遺構上面は近現代の埋甕が据えられ、その下に埋甕と無関係なこの遺構がある。直径1.3m、深さ0.3m前後の円形土坑で、土坑側面にはややえぐり込みがある。埋土は3層に分けられ、上から赤褐色土、淡赤灰色土、明暗褐色土が堆積する。このうち底面に堆積する淡赤灰色土と明暗褐色土は地山の土を含み、締まりと粘性が強い。そのため貼り床であった可能性が考えられる。側面のえぐり込みや、底面の締まりの強い土を考慮すれば貯蔵穴であった可能性が考えられる。

通路状遺構

5SF015 (Fig. 62)

調査区の南西隅で検出された溝状の落ち込みである。この付近は調査区西端ゆえに調査地そのものが、SF015に向かってなだらかに下がっていく地形をなし、長さ7.4m、最大幅1.3mの範囲で底面が確認できる。深さは現地表面から1.8mと深く、北側の遺構検出面からでも1.3m前後である。調査区端のため、落ち込みの埋土には近現代の遺物を含み、明らかに宅地造成時に埋め立てられたことがわかる。これら近現代の攪乱層を除去すると、底面直上で、厚さ0.02～0.06mの5mm程の砂礫を含む暗灰色砂礫層（遺物取り上げは青灰色土）が確認された。この暗灰色砂礫層を除去すると、底面には大きさが0.2～0.45m、深さ0.05m前後の小さなビットが多く穿たれている。道路の路盤を安定させるために突き固めた痕跡の可能性も考えられる。

近隣住民の話によると、宅地化される前、西側水路側から調査地南側の土地に繋がる通路があったといい、その北端がこの5SF015と考えられる。

遺構の時期については、遺物が少ないものの、暗灰色砂礫層で出土した遺物に底部系切りの土師器があることから、暗灰色砂礫層が古代の官道の路盤ではないことは明確である。しかし、調査地周辺が官道の推定ラインのひとつであり、この落ち込みが測れば官道として掘削された部分であり、その後通路として現代まで利用されたと考えerことはあり得ないわけではないが、推測の域を出ない。

5SF035 (Fig. 62)

調査地西端で検出された階段状の遺構である。土管や真砂土など近現代の堆積土を除去すると、黒褐色土の溝状遺構が検出された。遺構は調査区外にさらに続いているが、検出長は3.1mで、幅は低い方が最も広く1.05mで、高いほど狭くなっていく。南西に向かって下がっており、高低差は1.25mを測る。溝状遺構の底には、明瞭でない段が2列に8段前後並んでいる状況で検出された。これは人が長く歩行することによって形成された段差と推測される。肥前系陶磁器や燻し瓦など比較的新しい遺物が出土しているため、現在ある擁壁が造られる前に水路側から上り下りしていた通路と推測される。

堆積層

5SX049

調査区南側のなだらかに下がる斜面途中で検出された堆積層で、検出範囲は長さ約7m、幅3m前後であるが、石製品の出土範囲は幅1m前後、レベル差0.1m以内というまとまりで確認されている。堆積層

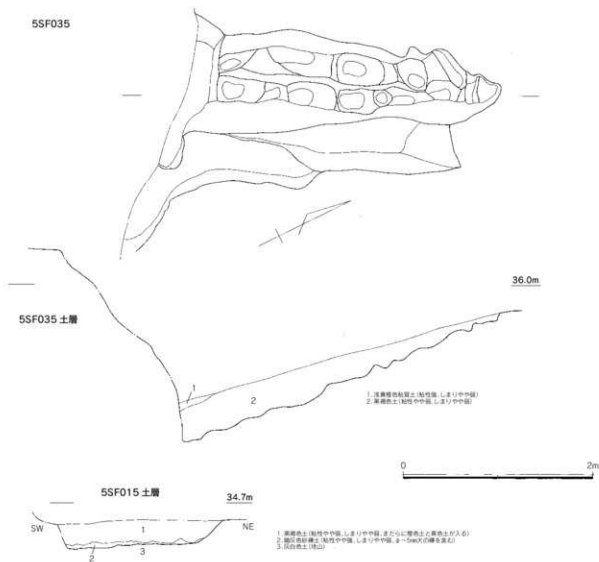


Fig. 62 長浦遺跡 5SF015・5SX035 遺構実測図 (1/40)

は明褐色土、灰黄色土もしくは灰黄褐色土、礫混じり灰褐色土のおよそ3層に分かれる。石製品は22点でほとんどが剥片である。明褐色土で安山岩剥片4点、灰黄色土で安山岩剥片4点、黒曜石剥片1点、灰黄褐色土で安山岩剥片6点、黒曜石剥片6点、チャート剥片1点、押型文縄文土器の小片1点、礫混じり灰褐色土からの遺物は無い。若干の差はあるものの、ほぼ同時期に堆積したものと推測される。

落ち込み

5SX010・028・029

調査区南端の窪みで、当初の丘陵法面部分とみられ、近現代の宅地造成のため盛土されている。

(4) 出土遺物

土坑

5SK002 茶褐色土出土遺物 (Fig. 63)

石製品

削器(1) 欠損し現存長5.8cm、幅3.2cm、厚さ0.9cm。側面に細かい刃部を作り出している。安山岩製。

5SK025 明褐色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

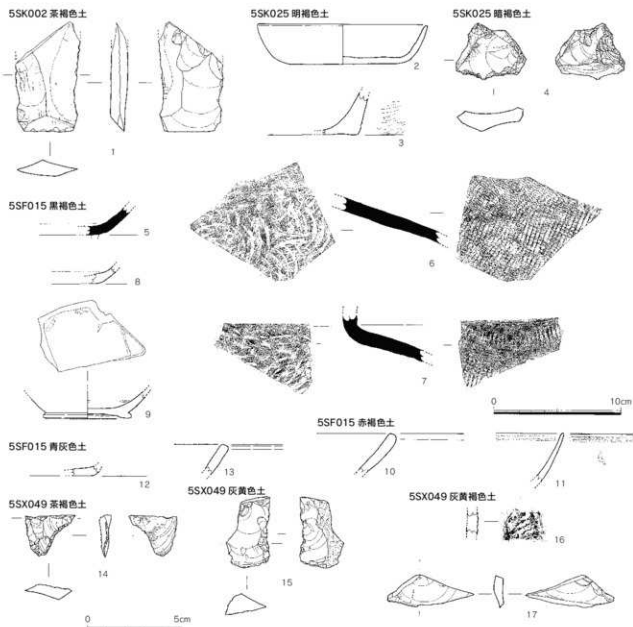


Fig. 63 長浦遺跡第5次SK002・025、SF015、SX049 出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

坏 a (2) 口径 13.5cm、器高 3.1cm、底径 8.6cm。全体的に磨滅するが、外面はミガキか。色調は橙色を呈する。

弥生土器

甕 (3) 底部は平底。

5SK025 暗褐色土出土遺物 (Fig. 63)

石製品

剥片 (4) 大きさ 3.0 × 3.75cm、厚さ 1.0cm。部分的に細かい加工がある。黒曜石製。

通路状遺構

5SF015 黒褐色土出土遺物 (Fig. 63)

須恵器

杯 c (5) 高台は欠損する。内面回転ナデ、外面調整不明。色調は灰白色を呈する。
甕 (6、7) 2点とも甕の肩部付近で、内面は同心円当て具のあとナデ調整。外面はタタキである。6は黄灰色を呈する。7は頸部と体部との境目付近は回転ナデ。色調は灰白色を呈する。

土師器

杯 a × 小皿 a (8) 底部切り離しは糸切り。色調は浅黄橙色を呈する。

越州窯系青磁

碗 (9) II-1b 類。

5SF015 赤褐色土出土遺物 (Fig. 63)

土師質土器

鍋 (10) 若干内湾する口縁部で、胎土は砂粒をやや含み、色調は淡茶黄色を呈する。内面ヨコナデ、外面には煤が厚く付着する。

肥前系磁器

碗 (11) 淡水色釉で口縁端部内外面に圈線を、外面に文様を施す。

5SF015 青灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (12) 底部切り離しは糸切り。色調は暗黄色を呈する。

鉢 (13) 胎土は 0.1cm 以下の白色砂粒をやや含み、色調は淡茶黄色を呈する。内外面ともヨコナデ調整。

堆積層

5SX049 茶褐色土出土遺物 (Fig. 63)

石製品

剥片 (14) 大きさ 2.2 × 2.6cm、厚さ 0.6cm。黒曜石製。

5SX049 灰黄色土出土遺物 (Fig. 63)

石製品

剥片 (15) 全面風化する。大きさは 3.8 × 2.3cm、厚さ 1.0cm。黒曜石製。側面に細かい加工があり、その反対側に原石面が残る。

5SX049 灰黄褐色土出土遺物 (Fig. 63)

縄文土器

甕 (16) 胎土は砂粒を多く含み、色調は内面暗茶色、外面暗橙黄色を呈する。外面には押型文を施す。

石製品

剥片 (17) 大きさ 1.7 × 4.6cm、厚さ 0.5cm。ナイフ的な利用をしていた可能性もある。チャート製。

落ち込み

18世紀から現代までの遺物が混ざっている。現代の集落に繋がる生活遺物ということで掲載している。

5SX028 褐色土出土遺物 (Fig. 64)

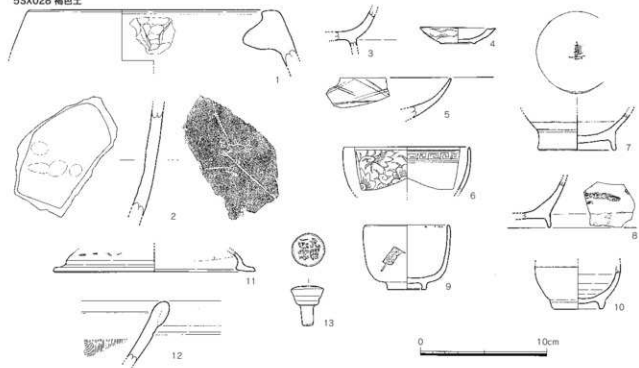
土師質土器

七輪 (1) 内面に受け部の突起を造り出し、その周辺には煤が付着する。外面は磨滅し調整不明。胎土は浅黄橙色を呈する。口縁部の形状は波状をなしていたか。

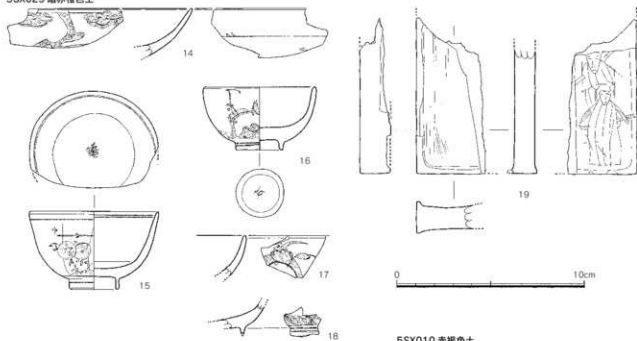
瓦質土器

火鉢 (2) 内面は回転ナデ後下半を燻す。外面も燻し、浅いスタンプが施されているが、文様の内容は不明瞭。断面は淡黄橙色を呈する。

5SX028 褐色土



5SX029 赭赤褐色土



5SX010 茶色土

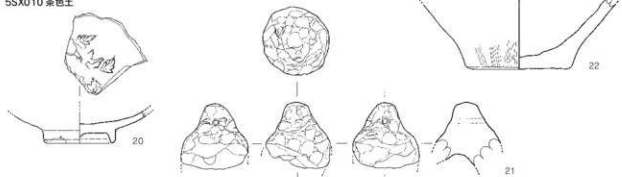


Fig. 64 長浦遺跡第5次 SX010・028・029 出土遺物実測図 (1/3、石製品は 1/2)

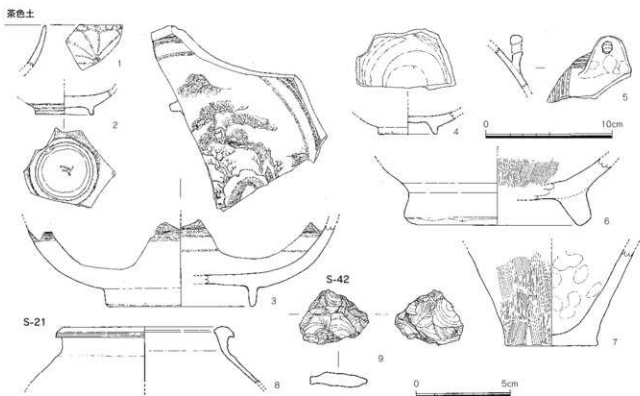


Fig. 65 長浦遺跡第5次調査茶色土、その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、9は1/2)

龍泉窯系青磁

小碗 (3) I-1 類。ややムラのある黄緑色釉を施す。

肥前系磁器

紅皿 (4) 口径6.1cm、器高1.3cm、低い高台径2.8cm。外面にはぼんやりとした蛸唐草文を施す。外面露胎。

皿 (5) やや青味にある灰白色釉を内外面に施し、内面には水色釉で摺文を描く。

碗 (6~8) 6は復元口径10.0cm。明るい呉須で内面には雷文、外面には草花文を描く。7は高台径6.2cm。全面灰白色釉を施し、内外面に呉須で文様を描く。高台畳付は釉を拭き取る。8は外面に呉須で文様を描く。高台畳付は釉を拭き取る。

小杯 (9) 復元口径6.8cm、器高5.1cm、高台径3.1cm。外面に呉須で文様を描く。高台畳付は釉を拭き取る。

瓶 (10) 内面回転ナデで露胎。外面は青味がかかった灰白色釉を施し、淡水色釉で圏線を描く。高台径4.0cm。高台畳付は釉を拭き取る。

国産陶器

蓋 (11) 復元口径16.0cm。口縁部外面には煤が付着する。外面は回転ヘラケズリで、黄色味を帯びた灰白色釉を施し、淡緑色釉で文様を描く。

捕鉢 (12) 口縁端部を折り曲げ肥厚させる。内面に摺り目を施す。

栓 (13) 「九曜正宗」と書かれている。新潟県の日本酒の栓か。

5SX029 暗赤褐色土出土遺物 (Fig. 64)

肥前系磁器

皿 (14) 内外面とも青緑色釉と淡青色釉で草花文を描く。

(15～18) 丸味のある体部で、外面に淡青色釉と緑灰色釉で草花文を描く。

石製品

硯 (19) 方形硯石で、背面には合羽のような衣服をまとい帯刀する人物を細い刻線で描いている。

5SX010 茶色土出土遺物 (Fig. 64)

龍泉窯系青磁

碗 (20) IV類。内外面とも灰オリーブ色釉を施し、全体的に粗い貫入が入る。内面底部に文様を描く。

高台内面は回転ヘラケズリで露胎。

土製品

土鈴 (21) 高さ 5.3cm、幅 5.2cm。上部に径 0.4cm の円孔が穿たれている。下方が欠損しているが、ナデ調整された面があり、空洞と考えられると土鈴と推測される。

5SX010 赤褐色土出土遺物 (Fig. 64)

弥生土器

甕 (22) 内外面磨滅するが、外面下部にタテハケが残る。底径 8.6cm。

茶色土出土遺物 (Fig. 65)

肥前系磁器

碗 (1, 2) 1 は外面に呉須で菊花文を描くが、磨滅し文様が薄くなる。2 は高台径 4.6cm。外面に青灰色で圏線等の文様を描く。

鉢 (3) 復元高台径 11.6cm。内外面上半部には青色や薄青色の呉須で圏線を描く。内面底部には呉須で松など山水が描かれている。

国産陶器

碗 (4) 高台径 4.6cm。胎土は明褐色を呈する。内外面とも灰白色釉を施し、内面は輪状に釉を拭き取る。

急須 (5) 耳部付近で、胎土は橙色で、内面はナデ調整で煤が付着する。外面には暗褐色の不透明釉を施す。外面には凹線が縦横に施している。

播鉢 (6) 復元口径 14.8cm。内面に細かい播目を施す。にぶい黄褐色の胎土に暗褐色釉を施す。高台畳付は使用により平滑である。

弥生土器

甕 (7) 底径 7.2cm。内面は指頭圧痕、背面は細かいタテハケ調整。底部外面にはモミ痕が残る。

その他の出土遺物 (Fig. 65)

中国陶器

壺 (8) 復元口径 14.2cm。口縁端部外面に沈線を巡らす。胎土は長石を僅かに含み、断面の色調は灰赤色を呈する。内外面とも灰黄褐色釉を呈する。S-21 より出土。

石製品

剥片 (9) 大きさは 2.9 × 3.6cm、厚さ 0.7cm。黒曜石製。S-42 より出土。

(5) 小結

調査地は低丘陵上面で、さらに直前まで住宅が建っていたこともあり、大きく削平を受け、遺構の残りは悪く、深い遺構だけが残存している状況であった。各土坑の残り具合から、元々の丘陵は遺構面よ

り1m前後は高かった可能性が考えられる。また、調査区西側では宅地造成される前の丘陵の形状が残されていて、そこに剥片が多くみられた。かつて、この丘陵端部に縄文時代や弥生時代の遺構が展開していた可能性を窺わせる結果であった。

また、調査対象地東側の中段については、確認調査で遺構は確認されなかったものの、官道の名残である可能性が出てきた。これについては、調査まとめて後述する。

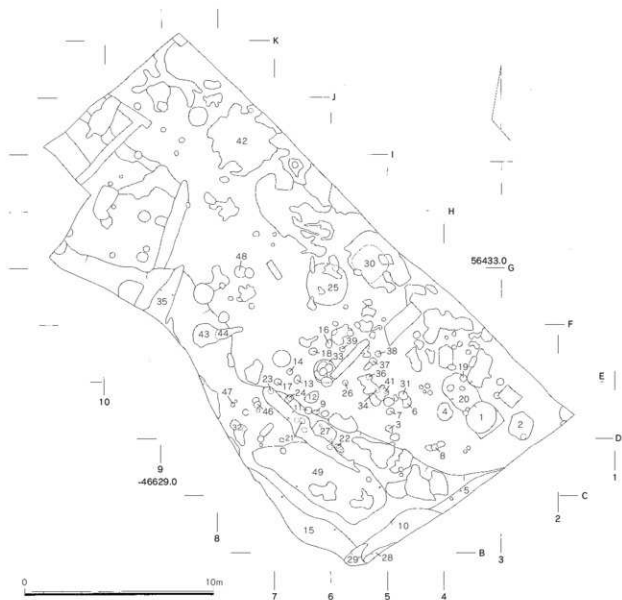


Fig. 66 長浦遺跡第5次調査遺構略測図 (1/200)

表19 長浦遺跡第5次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	5SK001	土坑	茶褐色土	弥生時代?	D3
2	5SK002	土坑	茶褐色土	弥生時代?	D2
3		ビット	黒褐色土		D4
4		土坑	黒褐色土		B3・4
5		落ち込み	暗茶色土 近現代の盛土	近現代	B3・4
6		ビット	黒褐色土 埋土に柱痕確認。	中世以降	D4
7		ビット	茶褐色土		D4
8		ビット	暗褐色土		C4
9		ビット (柱穴か)	暗褐色土 底面に柱痕とみられる凹みがある	中世以降	D6
10	5SX010	落ち込み	赤褐色土ほか 近現代の盛土	近現代	B4・5
11		ビット	暗褐色土		D6
12		土坑	暗茶色土		D6
13		ビット	暗褐色土		E6
14		ビット	茶色土		E7
15	5SF015	通路状遺構	黒褐色土	中世～近世	B5～7 C5～8
16		ビット (柱穴か)	灰褐色土 底面に柱痕とみられる凹みがある		E6
17		ビット (柱穴か)	暗褐色土 底面に柱痕とみられる凹みがある		D6・E6
18		ビット	暗褐色土		E6
19		ビット	暗茶色土	古墳時代以降	E3
20	5SK020	土坑	暗灰色土	弥生時代?	D3
21		ビット	暗茶色土 カクラン下で検出	中世か?	D6
22		ビット	暗褐色土 カクラン下で検出		C5
23		ビット	暗褐色土 カクラン下で検出		D7
24		ビット (柱穴か)	暗茶色土 カクラン下で検出 底面に柱痕とみられる凹みがある		D6
25	5SK025	土坑	灰黄褐色土	近世以降	F5・6
26		ビット	暗褐色土		D5
27		土坑	黄褐色土		D6
28	5SX028	落ち込み	近現代の盛土	近現代	A5
29	5SX029	落ち込み	暗橙色土 近現代の盛土	近現代	A5・B5
30	5SK030	土坑	橙色土	中世以降	F5・G5
31		ビット	褐色土		D4
32		土坑	暗褐色土	平安時代	D7
33	5SK033	土坑	赤褐色土・淡橙色土 上層に攪乱	弥生時代	E6
34		ビット	灰褐色土		D5
35	5SF035	通路状遺構	黒褐色土 階段状になる	近現代	F8・9
36		ビット	灰褐色土		E5
37		ビット	灰褐色土		E5
38		ビット	灰褐色土	中世～	E5
39		柱穴	柱痕あり		E5
41		ビット			D5
42		土坑	橙色土に灰褐色土混じる。	中世以降	H7・17
43		土坑	黒褐色土	中世～?	E8
44		土坑			E7
46		ビット	暗茶色土	中世～?	D7
47		ビット	暗茶色土		D7
48		ビット	灰褐色土	中世以降	F7
49	5SX049	堆積層	灰黄褐色砂礫土が広がる。石器刺片集中	縄文時代	C・D5～7

V、調査まとめ

博多側から大宰府に入る古代官道は、水城の東門と西門を通る2つのルートで、今回の調査地一帯は、官道西門ルートの推定ラインにある。

西門ルートは春日公園遺跡での調査をきっかけに、断片的に遺構が確認され、水城跡より大宰府側では、現在大きく4地点（島本、日焼、前田、条坊）で官道の遺構が確認されている。春日公園遺跡から発見地南端の条坊99次調査にかけての官道については、大きく見ると直線的ではあるが、細かく見るとそれぞれの地点での角度に違いがあり、途中で方向の振り直しがあることが指摘され、その変化点を河川や丘陵に想定されてきた。通常官道は丘陵でさえ直線的に造られることが多いが、西門ルートの官道の設計は、水城西門を通過させることが絶対条件で、さらに大宰府条坊南辺部への接続や大宰府の南方向への交通網も視野に施工されたと推測される。周知の通り、水城は牛頭山から派生した丘陵の最も張り出した場所に築造されているため、条坊南辺部と福岡側の官道を直線的に繋ぐと、水城西門を通過できない。よって、水城西門を通過するには、官道は一直線ではなく、いくつかの変化点を設け、丘陵を迂回しなければならない。

そのような状況の中で、長浦周辺の官道の調査状況を見て行くと、長浦遺跡の南隣にある日焼遺跡5・8次調査では、長浦地区の丘陵を避けるような位置で、8世紀前半～中頃埋没の官道側溝が確認されている。また、西門と島本遺跡の官道を結んだその延長は、前田遺跡に向かわず、長浦地区の丘陵先端部付近に向かっている。この丘陵は島本～日焼遺跡を結ぶ直線上に位置し、この間の調査は丘陵上に位置する長浦遺跡第2～5次調査のみだが、上面は大きく削平されていることもあり、明確な官道遺構は検出されていない。しかし、丘陵西縁部では、官道と関連付けられる遺構が確認されている。長浦5次調査では丘陵西側で法面に切り込んだ通路状遺構(5SF015)が検出されたものの、現代まで使用されていたこともあり、古代に遡る証拠を得られていない。しかし、丘陵東側には帯状に段を成す地形(長浦2SX015)が残っており、そこに掘られた遺構(長浦2SX011・SD005)から、それは7世紀中～後半には造成され、奈良時代までの使用が確認されている。以上のことから考えると、官道は長浦地区の丘陵東側縁辺部を沿うように巡り、丘陵先端部を変化点としていたと推測できる。さらに、この丘陵北側の原口遺跡では、官道以前(7世紀後半)の道路が迂回していることが確認されており、时期的にも奈良時代の官道も直線的な施工されることなく、それを踏襲するように丘陵を迂回していた可能性が高い。

今回の長浦遺跡の調査で、より具体的な官道の変化点が推測できたのだが、明確な官道そのものを確認したわけではない。今回はFig. 67のような長浦の丘陵沿いを通るルート案を提示し、今後の調査の課題としたい。

参考文献

- 大宰府市『大宰府市史 考古資料編』1992
- 大宰府市教委『大宰府・佐野地区遺跡群X』大宰府市の文化財第50集 2000
- 大宰府市教委『大宰府・吉松地区遺跡群1』大宰府市の文化財第77集 2005
- 大宰府市教委『大宰府・佐野地区遺跡群24』大宰府市の文化財第100集 2008
- 筑紫野市教委『大宰府条坊跡 第99次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第52集 1997
- 大野城市教委『谷川・池田・池ノ上遺跡』大野城市文化財調査報告書第51集 1998
- 山村信榮『大宰府周辺の古代官道』九州考古学 第68号』1993



Fig. 67 長浦遺跡周辺官道西門ルート推定図 (1/10000) 地図は昭和 23 年

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



前田遺跡第 15 次調査区全景（上が北、空中写真）



前田遺跡第 16 次調査全景（上が西、空中写真）



前田遺跡第 17 次調査全景（上が南東、空中写真）



宮ノ本遺跡第 8 次調査全景（北東から）



日焼遺跡第17次調査全景（上が北西、空中写真）



久郎利遺跡第1次調査全景（北から）



久郎利遺跡第3次調査全景（北から）



長浦遺跡第1次調査全景（北東から）



長浦遺跡第2次調査全景（上が北、空中写真）



長浦 2ST010 木棺部完掘状況（南から）



長浦遺跡第3次調査全景（西から）



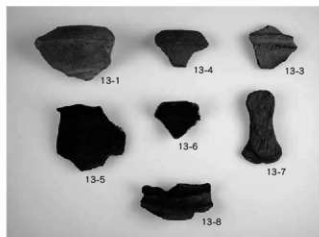
長浦遺跡第4次調査区全景（下が北、空中写真）



長浦遺跡第5次調査全景（上が南西）



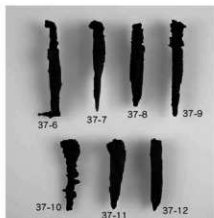
長浦遺跡第5次調査上空から水城跡を望む



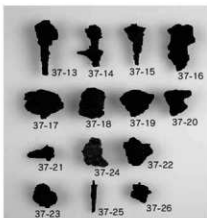
前田 16 次 SX010 出土遺物 (Fig. 13)



前田 16 次 SX015 出土石製品 (Fig. 14)



長浦 2 次 ST010 出土鉄釘 (Fig. 37)



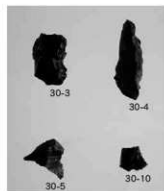
前田 17 次 SX015 出土瓦質土器壺 (Fig. 24-4)



長浦 4 次暗紫色土層出土石鏃 (Fig. 56-38)



長浦 3 次 SK001 出土土師器 (Fig. 44)



日焼 17 次出土石製品 (Fig. 30)



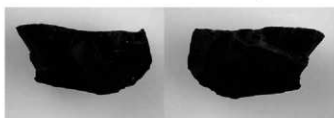
長浦 4 次暗紫色土層出土石鏃 (Fig. 56-54)



長浦 4 次暗紫色粘土層出土細石刃核 Fig. 56-58)



長浦 5 次 SX029 暗赤橙色土出土土硯 (Fig. 64-19)



長浦 4 次淡灰黄色粘土層出土細石刃核 (Fig. 57-62)

報告書抄録

ふりがな	だざいふ きのちくいせきぐん									
書名	太宰府・佐野地区遺跡群 27									
副書名	前田・宮ノ本・日焼・久郎利・長浦遺跡の調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	128集									
編著者	宮崎 亮一・山村信榮・井上信正・中村茂史									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2016(平成28)年3月31日									
ふりがな 所収遺跡名	集坊 【編山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
まえたいせき 前田遺跡 第15次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210075	56200.0	-46450.0	20050404	20050506	210	区画整理 記録保存調査
まえたいせき 前田遺跡 第16次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210075	56025.0	-46520.0	20050408	20050523	161	区画整理 記録保存調査
まえたいせき 前田遺跡 第17次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210075	55980.0	-46500.0	20070109	20070206	156	区画整理 記録保存調査
みやのちもといせき 宮ノ本遺跡 第8次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210091	55950.0	-46730.0	19940511	19940623	3800	区画整理 記録保存調査
ひやけせき 日焼遺跡 第17次	桑坊外	むかいざの 向佐野1丁目	402214	210081	56300.0	-46490.0	20130731	20130830	255	区画整理 記録保存調査
くろうらいせき 久郎利遺跡 第1次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214		56380.0	-46510.0	19900410	19900411	132	区画整理 記録保存調査
くろうらいせき 久郎利遺跡 第3次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214		56338.0	-46433.0	19970930	19971006	30	区画整理 記録保存調査
ながらいせき 長浦遺跡 第1次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210071	560800.0	-46900.0	199001	199002	7000	区画整理 記録保存調査
ながらいせき 長浦遺跡 第2次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210071	56430.0	-46630.0	20030519	20030807	426	区画整理 記録保存調査
ながらいせき 長浦遺跡 第3次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210071	56380.0	-46670.0	20030911	20030920	5406	区画整理 記録保存調査
ながらいせき 長浦遺跡 第4次	桑坊外	むかいざの 大字向佐野	402214	210071	56400.0	-46660.0	20061027	20070125	384.5	区画整理 記録保存調査
ながらいせき 長浦遺跡 第5次	桑坊外	むかいざの 向佐野1丁目	402214	210071	56430.0	-46625.0	20140109	20140317	357.88	共同住宅建設 記録保存調査
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
前田遺跡 第15次	耕作地	近世	溝		木杭					
前田遺跡 第16次	集落	弥生、中世後期	縦立柱建物、土坑 溝、流路		縄文土器、弥生土器、石鏡 瓦質土器、肥前系陶磁器					
前田遺跡 第17次	集落	中世、近世	縦穴住居、埋蔵		須恵器、瓦質土器、 肥前系陶磁器					
宮ノ本遺跡 第8次			遺構なし							
日焼遺跡 第17次	集落	弥生前期、近世	貯蔵穴		土師質土器、石器					
久郎利遺跡 第1次	集落	時期不明	窪み、ピット		遺物なし					
久郎利遺跡 第3次	集落	古代	沼澤原		須恵器、青白磁					
長浦遺跡 第1次			遺構なし							
長浦遺跡 第2次	集落	飛鳥、奈良	木箱墓、溝、土坑		鉄釘、弥生土器、須恵器 肥前系磁器、銅鏡					
長浦遺跡 第3次	集落	中世	土坑		土師器、土師質土器					
長浦遺跡 第4次	集落	後期旧石器、 縄文前期前	縦立柱建物、土坑 包含層		細石刃、石鏡、細石刀核 瓦質土器					
長浦遺跡 第5次	集落	弥生、近世～現代	土坑、通路状遺構		須恵器、銅片、肥前系陶磁器					

太宰府市の文化財 第128集
太宰府・佐野地区遺跡群 27
—前田・宮ノ本・日焼・久郎利・長浦遺跡の調査—
平成28(2016)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 有限会社 システム・レコ
福岡市東区多の津一丁目14番1号
FRCビル